
薔薇のマリア
21.I love you.[rouge]
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


僕はきみと巡り会った。
理由なんて、事情なんて、因果なんて、どうでもいい。
僕はきみと出会った。
それは紛れもない事実で、真実で、それが大切なことなんだ。
変わらないよ。
変わったりしない。
僕はここにいるから。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
21. I love you.[rouge]


「決着をつけるんだ！
みんなで勝つんだ！」
大丈夫だ。ZOOはみんな無事だ。
負けない、とマリアローズは思った。
強く思うことができた。
僕らは負けない。


アジアンは迷う。
だけど、僕はわかってる。
きみは結局、僕を信じてくれる。
僕もきみを信じている。僕は僕にできることをやればいい。
「――僕を信じて」

薔薇のマリア

21.I love you.[rouge]

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 21
I love you.[rouge]
Ao Jyumonji

First published 2014 in Japan
By
KADOKAWA CORPORATION

illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A Brave Heart of Red Rose

21

CONTENTS

CONTENTS

Calamitage 003 “rebirth”(sequel)

　落ちる。

　ゆっくりと、しかし確実に落ちてゆく。

　どこまで落ちるのだろう。

　こわごわと下を見る。何もない。

　何も。

　暗いからなのか。光が届かないから、見えないだけなのか。それとも。

　わからない。

　とにかく、落ちる。

　なすすべなく落ちてゆく。

　いつまで？

　どこまで……？

30　蒼炎

「──フォァ……ッ!?」

　自分たちを包んでいる光が消失した瞬間、飛フエイ燕ヤンはユリカをきつく抱きしめて受け身をとる体勢になった。間もなく背中からどこか硬い地面に落ちたが、たいした衝撃じゃない。

「飛燕……!?」

「ああ」飛燕は心配してくれたユリカをさらに力いっぱい抱きすくめて彼女の香りを胸いっぱいに吸いこんだ。そうしてぬくもりをぞ

んぶんに味わいつくしてから、そっと彼女を放した。「オレァなんともねェーよ。つゥーか、ここドコだァ……？」

「しゃ、しゃあ……」

　ユリカは起きあがってあたりを見まわしている。そう感じるのは──見えるわけではなくて感じることしかできないのは、ひたすら暗いからだ。真っ暗でも、声だの何だのが聞こえるし、さっきまではキング・グッダーの魔法によるものとおぼしき光に包まれてゆったりと落下している自分たち以外の人間の姿がぼんやりと確認できていた。周囲に誰かがいることは間違いない。

「やいッ。無事なヤツァ、声出せッ！」

　呼びかけると、すぐに返事があった。

「ウォウッ私だッ、ファニーのフランクだッ！　軍師どのもいるぞォウッ！」

「──はイ」「いるよ」ピンパーネルとハニーメリーか。

「……どこだ、ここは」聞き覚えのある声だ。秩モラ序ル・のキー番パー人ズの死神羅ラ叉サだろう。

　羅叉に「総長代理！」と応じる声が、十かそこら。

「これはまいりましたね」

「サイケングレンマイセルヒか」

「あれ。リキエルじゃありませんか。他には？」

「……っす」

「お、おれも、いるけど……な……」

「祝花ノリカとボダダグですね。トトやロロ、ボンドは？」

「わ、わかんねえ。離れねえように、し、してたんだけど……」

「あの、人数をかぞえてみませんか」と女が提案した。たぶんアーニャ・クルチバだ。

　断る理由はない。一、二、三、と一人ずつ数字を言ってゆくと、ぜんぶで二十三人だということがわかった。

「フーン。二十三ねェー。多いのか、少ねェーのか……てかよォ、どォーなってンだこのヘン。壁とかも見えねェーし──」飛燕は試しに地面を蹴ってみた。かなり硬い。しゃがんで素手でさわってみると、氷みたいに冷たかった。「……ユリィ。寒くねェーか？」

「え？　しょうね……しゃむい、ような気もしゅるし──逆にあちゅいような気も……」

「同じデス」とピンパーネルが、「うん。なんか変な感じ。鳥肌が立ってる」とハニーメリーが答えた。

「フゥームンッ？」ファニー・フランクは首をかしげているらしい。「私は平気の平へい左ざなのだが……？」

「どうもそう広くはないようだ」と昼ラン飯チタ時イムのリキエルが言った。「端はしから端まで、十七歩。俺の一歩はおよそ一・二メーテルだ。ただし、奥行きはある」

「見てください」とサイケングレンマイセルヒが言った。

「イヤ、見ろっつッたってよォー……」テメェーがどこにいるのかもわかンねェーワケだから、ドコ見りゃいいのかもトーゼンわかンねェ──くもない。方向でいえば左後方だ。地面に何か青いものがちょろちょろと見えていて、その手前に誰かがしゃがんでいる。おそらくサイケングレンマイセルヒだろう。あの青いものはいったい何なのか。飛燕は首をひねった。「──炎、か……？」

31　仲間たち

　カタリはその青い炎のようなものを踏んづけてみた。「──魚うおぉづっ……くはないな。せやけど、なんか……」

　どう表現したものか。熱いのに、冷たい。冷たいのに、熱い。耐えられなくはないが、耐えたくない。

　これは悪いものだとカタリの勘が告げている。警告している。

「──そうはゆうてもな。これしか手がかりがあらへんのや。せやろ」

「ムゥーン……」トワニングはカタリの傍かたわらで屈かがみこみ、焚き火にかざすように手を近づけた。「……なんと面めん妖ような。この感覚は……」

「くう……」きゅーが心配そうにすぐ後ろでトワニングとカタリを見つめている。

　ベアトリーチェが隣の大男に「何か知らないのか」と尋ねた。

「すまないねえ」ＳＩＸの口調はどことなく悲しげだった。ＳＩＸのくせに悲しげとはこれいかに。「じつを言うと、俺はやつらと繋つながりがないでもないんだが、千年以上前からみそっかす扱いなのさ。ようするに、俺は死なない以外に取とり柄えがないんだよ」

「へっ」とカタリは鼻を鳴らした。「死なんっちゅうだけで充分すぎるやろ。わしかてなあ。よう死なんのやったら、もっとこう──」

　アーニャちゃん。

　はぐれてしもうた。

　落っこちて、ふわあってなって、気がついたらここやった。

　大丈夫やって、信じとるけどな。せやけどな。──くっそ……！

　きっついわ。正味の話。

「幅はばは二十メーテルといったところか」ヨハン・サンライズの声は落ちつきはらっている。彼こそ妻子と別れ別れになって、内心穏やかではないはずなのに。「両側は垂直の壁で、通路状になっているようだ。片側からその青い炎が流れてきている」

「だったら、さっさと行くしかねぇだろ」と昼ラン飯チタ時イムのダリエロが言った。「当然、その炎の方向に、だ。反対側は暗くて何も見えねぇんだからな。てめぇらがぐずぐずしてやがるなら、俺らは行くぜ。クララ、リリア、チェリー、シャマニ、ヴィクトリア、白しろ妙たえ、用意しろ。シャマニはロロとトトとボンドを引

きずってこい。リリア、餓が鬼きどもの面めん倒どうはてめぇでみろ。てめぇがこさえたんだからな。クララとチェリーはしょうがねぇからリリアを手伝ってやれ。ババアはこの俺が背負ってやる。文句垂れるんじゃねぇぞ」

「しょうがないね。おとなしく背負われてやるから、あんまり揺らすんじゃないよ。腰にくるんだ」

「……クソババアめ」

「ダリエロ」と、誰か知らないが女のやわらかい声が言った。「平気よ。きっと、みんな無事。もちろん、ミシーリャちゃんも」

「あぁ!?　なんでそこでミシーリャの名前が出てきやがるんだ！　てめぇ、ぶっ殺されてぇのか、リリア……！」

　昼ラン飯チタ時イムの連中がどっとわいた。

　こんなときに、こんな場所で、あんなふうに笑える。

　ええ仲間や。心強くもある。

　まあ、トワニングも、きゅーもおるわけやしな。秩序の番人も、ヨハン以下、シャルロット・リンデやユキシ・庚コウといった手練れがいる。

　総勢三十八名。

　まあ、なんとかなるやろ。

「ちゅうかな……」カタリは、ふう、と一つ息をついて、右みぎ拳こぶしで左の掌てのひらを叩いた。「なんとかせなあかんやろ。なあ？」

32　ＳＲＡＩ

「うぉん！」とアルファが吠えた。ロム・フォウは振り向きざまに刀を抜き放つ。当たらなかった。よけられたのか。「──速い。トマ

ト……！」「ぬうあ……！」トマトクンが聖断罪の剣を振るうと、虹のような光がばらまかれて周囲がいくらか明るくなった。一瞬、見えた。人。人間なのか。暗色の鎧のようなものを身にまとった人間。頭にはゴーグル付きのマスクのようなものを被っていた。悪魔なのだろうか。とにかくそいつが跳とび下がってトマトクンの斬ざん撃げきから逃のがれ、闇にまぎれこんだ。そいつ。一人ではないはずだ。複数いる。突然、火花のような光とともに、ドドドッ……と腹にくる音が響き渡って、悲鳴があがった。「銃撃だと……!?」トマトクンが叫んだ。「止まるな、動きまわれ……！　狙い撃うちされるぞ……！」「──アルファ、おいで！」ロム・フォウはアルファを呼びよせて、以降、口をつぐみ、目を凝こらして、体勢を低くし、暗闇の中で片時も足を止めずに歩いた。ときおり例の、ドドドッ、という音がして、悲鳴があがる。銃撃。銃。ハニーメリーが持っているのと同じものか。しかしこの銃撃は単発じゃない。連発だ。ここに落ちて、近くにトマトクンがいることがわかってすぐ、攻撃を受けた。いったいどんな相手なのか。

「こいよ！　撃ってみろ……！」トマトクンが聖断罪の剣を振りあげた。人に止まるなと言っておいて、自分は止まっている。わざとだ。あえて的になろうとしている。敵は誘さそいに乗った。ドドドドドッ。ドドドッ。ドドドドドドドッ。ドドドドドッ。ドドドドドドドドドドッ。ドドドドドッ。ドドドドドドドドドッ。七方向からだ。銃撃。トマトクンは身体からだ中に銃弾を浴びて蜂の巣にされながらも、一番近くの銃撃手に躍りかかって斬り伏せた。ドドドドドッ。ドドドドッ。ドドドッ。銃撃はつづいている。トマトクンは二人目を斬り倒して、三人目を叩き斬ったところで銃声がやんだ。「──特化型Ｓ強化Ｒ装甲Ａ歩兵Ｉ……!?　馬鹿な、なんでこんなものが！　あと四人いるぞ……！」トマトクンがそう言った直後に、また銃火が閃ひらめいた。ロム・フォウはその前に刀を納めて弓を用意していたので、とっさに矢を放った。命中した──と思う。でも、効かなかった。ロム・フォウの矢は敵の装そう甲こうに弾はじかれた。金属の鎧でも貫通できるのに。反撃がくる。ロム・フォウが跳ぶと同時に銃声がして、一瞬前まで彼女がいたところに着弾した。アルファは大丈夫か。身体をこすりつけてきた。大丈夫のようだ。「怯ひるむな……！」と野太い男の声がした。名前まではわからないが、秩序の番人の誰かだ。「恐るることなかれ！　義のために死ね……！」「こんなところでくたばって何になるんだ！」トマトクンが怒鳴った。「敵は俺が始末する！　お前たちは生きのびることを考えろ！　無駄死にするな！　おおおおおおおりゃあ……！」トマトクンがまた一人殺やった。「ぱぴゅりゃぱぽりゅ

ぽるるー」というような不思議な声が聞こえた。このあたりに何人いるのだろう。十人や二十人ではおそらくない。それ以上いる。トマトクンが、スライ、と言っていた。それが敵の名前か。トマトクンはこの敵を知っているのだ。ドドドドドドッ。また銃火と銃声。「──ひぉんっ」とアルファが鳴いた。「アルファ……!?」呼ぶとアルファは尻尾でロム・フォウを叩いたが、ただ驚いただけであんな声を出すような子じゃない。銃弾がかするくらいはしたはずだ。あるいは、傷はもっと深いかもしれない。「──相手は暗くてもこちらが見えている……!?」「本当にスライだとしたら、間違いなくそうでしょうね」とすぐ近くで誰かが言った。「ちょっと考えづらいですが、ディオロットが根拠もなくそんなことを言いだすわけがないですし」どこか揶や揄ゆするような響きをふくんだこの声。あの男か。ジュジ。「……きみは何を知っている」「それはまあ、いろいろあって、いろいろ──っと」銃撃。ジュジはよけたようだ。「わあ。危ないな。ＳＲＡＩスライっていうのはね。単体で一個大隊に相当する陸上戦力として合衆国が最初に開発した強化外骨格や人工筋肉等々を統合したシステムです。あなたにこんなことを言ってもわからないかな。もちろん、わかりっこないと思っているから言ってるんですけどね。わっ──」ドドドドッ。ジュジが倒れた。撃たれたのか。「おい！」助け起こそうとしたら手を払はらわれた。「……残念ながら、ぼくはもうだめみたいです。このぼくは、ね」

33　光る目

「……な、何だよ、この音……」マリアローズは右を見て、左を見た。振り返る。前に向きなおる。この音の発生源はどこなのか。わからない。暗すぎるんだよ。何も見えない。なんとか墜落死せずにすんだと思ったらこれだ。やめてよね。どうも仲間は周りにいないみたいだし。一人ではないけれど。声がするし、気配を感じるから、誰かはいる。たぶん、一人や二人じゃなくて、十人とかそれ以上。その中に知りあいはいないのか。確かめる前にこの音が鳴りはじめた。重い音だ。地響きのような。何かとんでもなく大きくて重量のある物体が移動している。たとえばそんな感じだ。たとえば、じゃなくて、そのとおりなのかもしれない。何かが移動している。近づいてくる。だとしたら、まずくない？　まずい。明白に。「落ちついて……！」と女性の声がした。「秩序の番人、静まりなさい！　声を出しあって場所を確認！　ばらばらにならないで！」あ

れは──琺瑠フオールか。秩序の番人の琺瑠副長。「怪け我がをしてる人はいない？　治すわよ」「……モリー？」聞き違えるわけがない。今のは絶対にモリー・リップスの声だった。マリアローズはモリーを捜さがそうとした。いきなりあの音がやんで、まばゆい光に目を焼かれた。「──ま、まぶしっ……!?」

目を細めた。まばたきをする。少しずつ見えるようになってきた。何だろう。強力な半永久灯みたいなものか。それがこっちに向けられている。一つじゃなくて、二つ。光の源は二つある。まるで目みたいに。光る目がこっちを見ている。目……？　あれって、生き物──ではないよね？　車、とか……？　戦車。マリアローズはエルデンに攻めてきたラフレシア第三帝国軍の自走式戦車を思いだした。戦車のようなものがいる。ある、と言うべきか。マリアローズ以外にも何人もが手をかざして光を遮さえぎり、その戦車を凝視している。あの音はこの戦車が立てていたのだ。そうに違いない。でも戦車？　こんなところに？　ここは地獄なのに？　まあ地獄に戦車が似つかわしいのか似つかわしくないのか、よくわからないけどさ。戦車じゃないかもしれないわけだし。ただ、一つだけたしかなことがある。あれは味方じゃない。味方のわけがない。敵だ。敵の乗り物か、敵そのものだ。マリアローズは「伏せて……！」と叫びながら左方向に身を投げた。なんか出た。というか、撃った？　戦車が。ズババババズガガガガガガガガガッと。「おわ」「ぐっ」「ひあ」「ぬああぁっ」「ばっ──」「うお」「あ……」声。声。声。倒れる。人が。ばたばたと倒れてゆく。「モリー……ッ！」マリアローズは友だちの名を呼びながら射線上から離れようとした。戦車らしきものの上部から無数の弾たまが途切れることなく射出されている。あんなの食らったら死ぬ。死んじゃうって。実際、死んでいる。「モリー!?　モリィィーッ……！」

34　機械

当然。当然だ。あたりまえのことだ。アジアンはマリアローズと昼ラン飯チタ時イムの仲間をどうにかして救おうとした。上から何か降ってきて、地面が砕けてしまっても、アジアンには翼がある。黒い翼が。アジアンは飛ぶことができる。落ちることはない。まずはマリアローズ。マリア。マリア！　マリア……！　アジアンは飛んでゆこうとしたのだ。できなかった。邪魔されたのだ。横合いか

ら何かが突っこんできた。それは人の頭よりも一回り小さいくらいで、蜂はちのような翅はねを持っていた。接近してきて、パスパスパスッと何か小さいものを連続で撃ちだした。アジアンは急転回してかわしたが、それは追いかけてきた。アルカーディアで貫くと動かなくなったが、それは単独ではなかった。あっちからもこっちからも、どんどんきた。形はほぼ同じでタイプが異なるものもあるのか。肉薄してきてヴゥンッというような音とともに目には見えない何かを放つものもあった。その何かを不覚にもアジアンは一度、食らった。すぐに回復したが、身体が痺しびれて力が入らなくなった。とにかく近よらせてはいけないということだ。しかし数が多い。数えきれないほどだ。手当たり次第に落とすしかない。そうしている。こんなことをやっている場合じゃないのに。

「ベティ！　ベティ……！」何回か呼ばわると、ベティが雷撃の魔術で敵を駆逐しながら飛んできた。「──何なのよ、これは⁉」「ボクにわかるとでも……⁉」「思わないわね、たしかに！　たぶん悪魔じゃないわ！」「悪魔じゃない……⁉」「そもそも、こいつらは生き物じゃない！　機械マシンよ、これは！　キング・グッダーの魔ま導どう兵みたいな──」ベティと背中あわせになって、ほんの一瞬、アジアンは息をついた。アルカーディアで二匹──いや、二機の敵をぶち抜く。ジャシュギシュで同じく二機、叩き落とす。ベティは爆ばく雷らい索さくを何重にも発動させて、多くの敵機をいっぺんに落とした。「……まいったわね。雑魚だけど、きりがないわ！」「ダリエロたちは大丈夫サ！」「ええ！　でも……」「ああ。早く行ってやらないとネ」「あんたは別口のほうが気になってるんじゃないの」「両方だヨ」「二に兎とを追う者は一いつ兎とをも得ずってね」「月並みなことを言う。キミらしくないネ」「じゃあ、二兎を得てみせなさいよ」「そうするつもりサ……！」アジアンとベティは飛び離れて、それぞれ敵機を撃つ。撃ち落とす。敵機を撃墜しながら二人はすれ違う。ＺＯＯのサフィニアがいる。チビグッダーが、剣聖がいる。閃光の魔女と踊ダンシリングシ羊ープ、超メガ賢セイ者ジモーグとその弟子の姿もある。頭上には真珠色の竜レインドゥラス・ヴィシュクラトーが。竜は十四枚の羽を羽ばたかせて落下物を受け止めているらしい。でも、遠ざかると魔術士たちも竜も闇に薄れ、やがて見えなくなる。この暗闇は濃い。闇色の気体が充満しているかのようだ。

「空間にゆがみがある……っ！」チビグッダーはピンク色の光線で敵機を焼き払うだけじゃなくて、あちこち飛びまわって何か調べているようだ。「ヴィシュクラトー！　もう支えずともよい！　落下

物は放っておけ……！」『わかりました、グッダー』「しかし、にゃんにゃのだ、これは……！　都市ロ制圧ー用無カ人攻ス撃機トとはっ！　対テロリスト兵器ではにゃいか……！　にゃぜこんなものが地獄ここに……っ！」「──ローカスト……？」呟いたアジアンとそのときちょうど交錯したベティが、「イナゴ……⁉」と言った。イナゴ。ときに大群をなして蝗こう害がいをなすバッタのことか。とてもバッタには見えない形をしているが、たしかに群れで襲いかかってくる。「──これはあなたたちが消し去った技術とやらの遺物なのかしら……⁉」魔女が白光でイナゴを撃ち抜きながら問うと、チビグッダーが癇かん癪しやくを起こした子供みたいな声で「違うっ！」と否定した。「──まったく別のものだっ！　この世界にあるべきではにゃい！　あるはずのにゃいものだ……っ！」「だが、ある！」剣聖は残像をばらまきながら超高速移動して両腕のブレードでイナゴたちを斬り裂いてゆく。あそこまでいくと、速さすら感じない。「あるものは滅めつすればいい！　それが敵ならば！　簡単なことだ……！」「りりぃっ！　度しがたい単細胞め……っ！」チビグッダーは不意に静止した。ヴィシュクラトーがゆったりと降下してくる。チビグッダーは左のほうに顔を向けた。「ローカストがあるということは、他もあるやもしれぬっ！　余はそれを──」

號ォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ
何かがチビグッダーに激突しようとしている。もうぶつかる。イナゴではない。もっと大きい。もっと、ずっと、遥かに大きい。滑かつ空くうするハヤブサのような。そんな形をしているというだけの話で、鳥なんかじゃ決してない。大きさが違うし、あれも生き物じゃない。飛行する物体。機械マシンなのか。「──ぐ……っ！」チビグッダーはそれの先端に手をついた。機首の先っぽに。むろん、ただ素手で受け止めたわけではない。その手は赤、黄、オレンジ色の光を帯びている。「──ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅあ……っ！」チビグッダーは、そして、そらした。機械マシンを、下のほうへ。機械マシンはチビグッダーの下を通りすぎてゆく。旋回するつもりのようだ。「──Ｆ□42だとぉ……⁉　ステルス戦闘機が……っ！」「おもしろい！」剣聖がそのＦ□42ステルス戦闘機とやらに殺到する。剣聖は一人しかいないはずなのに、数十人、それ以上の剣聖が一挙にＦ□42に躍りかかったように見えた。十五メーテルほどはありそうなＦ□42が剣聖のブレードで輪切りにされ、さらに細かく斬り刻まれる。「──前言撤てつ回かいだ！　歯応ごたえがない！　ただの機械マシンなど……！」「あほうっ！　まだくる

わ……っ！」チビグッダーが目からピンク色の光線を迸ほとばしらせた。光線が何かをとらえて爆発させる。大爆発だ。「ミサイルだ……っ！」とチビグッダーが叫んだ。アジアンはやや呆気にとられていたのだが、我に返った。ミサイル。あれか。白い筒状の物体。後尾から炎を発して飛来する。数は――五十か、百か、その倍か。『敵は我らを殲滅しようとしています』ヴィシュクラトーが小さくなる。あっという間に縮んで、竜ではない、人のような、人竜の姿となった。「上等なのだわ……！」魔女が無数の白い光線を放散させた。「サフィニア！　わたくしに手を貸しなさいな！」「はい、お姉さま……！」サフィニアも魔女の隣で白い光線を放ちだした。「うーん、クルオはちょっと一休みかな」踊り羊は魔女の後ろに隠れようとしている。（あのようなものでは我と我が娘を傷つけることはできぬ）（おっしゃるとおりです、お師様）モーグとエヴァンジェリンは静観の構えか。アジアンは一つ息を吐はいた。「ベティ。ボクから離れるんじゃない」「……ずいぶんかっこいいこと言うじゃない」「たまには恰かつ好こうをつけさせてくれてもいいだろう？」「ええ、そうね。たまになら、ね」「切り抜ける……！」アジアンはベティを従え、ミサイル群に向かって飛んだ。逃げても無駄だと本能的に悟さとっていた。あのミサイルというやつは、きっと猟犬のようにどこまでも追ってくる。だったら、立ち向かって撃滅するまでだ。「――くっ！　くくくくくくく……っ！」と、チビグッダーが唐突に笑いだした。「この分厚い攻撃……！　この世界の者には思い描えがくことすらできぬ兵器の数々……！　馬ば脚きやくをあらわしたにゃ！　余らの敵はあの方向におる！　この先にこそ〝終わオーリのバー果てエンド〟があるのだ……っ！」

35　願い

　青い炎が流れてくる方向へと進むしかない。しかし、その方向から敵はやってくるのだ。敵。何ものなのか。ピンパーネルにはわからない。ただ、何ものであろうと、敵意を持って襲いかかってくる。それは間違いない。その敵意は冷たい。熱を一切感じない。ゆえに感知しづらいが、直線的で鋭く、疑いを差し挟む余地のない敵意。殺意だ。ピンパーネルは破壊する。雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣で、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザで、斬りつける、脚部を切断する、ねじこむ、穴を穿うがつ、その穴を拡ひろげる。あ

るいは、蹴倒そうとする。だが敵は倒れない。大きさは人と同じくらいか。人間が四よつん這ばいになったような姿形をしている。もちろん人間ではない。こんな獣は見たことがない。ここは地獄だ。悪魔なのだろう。その背中に半球形のでっぱりがあって、そこに青い目のようなものがある。一つ目だ。でっぱりの両脇の筒がハニーメリーの拳銃のように弾丸を発射する。それから、背に負ったもっと大きな筒から赤い炎を吐きだす。以上がこの敵の攻撃手段だ。接近してしまえば封じられるが、この敵は硬い。鎧を着ているのか。しかし中も硬いのだ。脚を一本や二本失っても倒れない。倒れないのだ。脚が一本になっても、その脚で地面を引っかいて動く。

「っ……！」ハニーメリーが敵を撃うつ。すると敵の青い目がこちらを向く。銃弾が当たっても敵はびくともしない。ハニーメリーはただちに逃げ、ピンパーネルは突進する。敵の銃撃は目を離さなければ見える。銃は弾の出元さえわかっていれば怖くないことをピンパーネルは知っている。自作の拳銃を愛用しているハニーメリーのおかげだ。近づき、まず脚を一本破壊する。敵は倒れないが、体勢が崩れる。接近されると、敵は火炎を浴びせようとするが、予想していればかわすのは難しくない。ピンパーネルは二本目の脚を壊す。それから青い目があるでっぱりを狙う。青い目がダメになると、敵はピンパーネルを捕捉できなくなるようで、でたらめに残りの脚を動かしたり、火炎を放ったりしはじめる。敵はもはや瀕ひん死しだ。しかしここからがしぶとい。身体からだの半分ほどが解体されるまで、敵は止まらない。移動不能になり攻撃できなくなっても、敵はおそらく死んではいない。残骸のような有様になっても身体のあちこちが動いている。もしかすると、この敵は死なないのではないか。「―セェェェェイッ！」飛フエイ燕ヤンが電光石火の飛び蹴げりで敵の青い目をぶち壊す。「離りゃぁぁ……！」ユリカが真上から極クライ限マックス九スナイ手ンポ棍ールを敵のでっぱりに叩きこむ。「ＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＲＡＡＡＡＡＡ……！」昼ラン飯チタ時イムのリキエルが二本の大剣を回転させて銃弾を弾はじき返しながら敵に突とつ撃げきしてゆく。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」秩序の番人の死神が地を這うように敵に詰めよって刀を振るう。アーニャ・クルチバが、番人たちが死神につづく。「お、おっかねえ……！」と誰かがどこかで叫んでいる。「がんばろうぞォォォッ！　というかがんばってくださりまっせいィィ……ッ⁉」ファニー・フランクが声援を送る。地面を伝って流れてくる青い炎の上に青い目がたくさん灯っている。「困っちゃったね！」と、たいして困ってもいなさそうな口調でハニーメリーが言う。彼女の息は弾んでいる。可能なら、この手で敵をすべて薙なぎ

倒してしまいたいとピンパーネルは思う。彼女はきっと、息絶える寸前まで、ピンパーネルと目があえば笑ってくれる。弱音を吐くときでさえ、明るさを失わない。不意に、彼女と一緒に故郷の砂漠を見たくなった。砂の海に咲く一輪の花、かつて彼の前ではかなく散った花を、彼女ならいつまでもともに探してくれるだろう。彼女はその花について考察を加える。可能性を検討する。道を示してくれるだろう。いや、そうではない──探す必要などない。彼女こそが花なのだ。「ハニーメリー！」とピンパーネルは花の名を呼んだ。「気ヲつけテ！　死んデワいけナイ！　絶対ニ……！」「え？」ハニーメリーは蛍ルミナ光スグリ緑ーンの瞳で彼を見つめて、うなずいた。「わかってる。あたし、あなたの子供を産むんだから！」「ハハッ」思わず笑ってしまった。子をなす。自分の子供を彼女が産む。想像がつかない。実感がわかない。でも、仲間たちは祝福してくれるだろう。その子を愛し、あたたかく育はぐくんでくれるだろう。それはとてもすばらしいことだ。もしそうなれば。そんな夢を見ることが許されるのか。この人殺しに。

　あたりまえだと仲間たちは言ってくれるだろう。たとえ世界中の誰も彼もが許さなくても、自分たちは許すに決まっている、と。許すも何もない、と。生きなければならない。彼はそう強く思う。その夢を叶かなえなければならない。生きたい。仲間たちと。彼女と。

「Ｓｈｈ……！」ピンパーネルは銃口を見て銃弾をよけて敵に駆けよる。雌雄一対の短剣を振るう。敵は多い。壊しても壊しても壊しても壊しても壊しても壊しても壊しても減らない。ピンパーネルは、だが、倦うむことはない。破壊は手に馴な染じんでいる。呼吸と大差ない。一時間でも二時間でも半日でも一日でも三日でも十日でもつづけられる。「──これは悪魔じゃないですね」と昼ラン飯チタ時イムの男が言う。男の名前はやたらと長たらしい。ピンパーネルは覚えられない。ややこしい名前を持つ男は大きな鎌かまのようなものを持っている。それで敵を刈り倒している。大振りで隙すきだらけだが、男は銃弾を食らっても小揺るぎもしない。「悪魔の僕がそう思うんですから、間違いありません。彼らは悪魔じゃない」「──テメェーが悪魔だァ……!?」と飛燕が敵をぶん殴りながら叫んだ。長い名前を持つ男は「まあね。理解してくれなくてもいいですが。道化の父を持つと、これはこれで大変なんですよ」と軽く答えると、鎌を肩に担いで青い炎の果てを見やった。「悪魔じゃないものたちに守られている。

地獄の帝王とは、いったい何なんだ……？」

36　いいアイディア

「うが──」悲鳴が爆発音にかき消された。吹っ飛んだのは秩序の番人のユキシ・庚コウだ。ユキシは「ああがあぁっ！　くぅぅああぁぁぁ……っ！」と苦しみ悶もだえて右脚を押さえようとしている。できっこない。右脚はなくなっている。「──全員動くんじゃねぇ！　何だ……!?」と昼ラン飯チタ時イムのダリエロがオトミをおぶったまま振り返った。「わたしが！」ベアトリーチェがユキシを手当てするべく飛びだそうとしたら、ＳＩＸの大きな手に押しとどめられた。「──待つんだ。ダメだよ」「しかし……！」「拙せつ僧そうに任せよ」ＺＯＯのトワニングがユキシのそばにしゃがんだ。「……ぬう。これは──応急処置として、出血と痛みを止める。よいか」「……は……はい……お願い、します……」「くそ……」ベアトリーチェは歯は嚙がみした。医術士としては未熟な彼女でもわかる。ユキシの右脚はどうにもならない。こんな状況で片脚を失ったら。「……何が爆発したんや？」ＺＯＯのカタリがきょろきょろしている。「くう……」その後ろできゅーは不安げだ。「ユキシ・庚」ヨハンがユキシの隣に膝ひざをついてその手を握にぎった。「案ずるな。仲間がいる。私がついている。ただし、治ち療りようを受けたら肩を借りて歩いてもらうぞ。いいな」「……も、もちろんです、総長」「よし」「どういうことです……？　何が起こったの？」剛胆なシャルロット・リンデが慌てている。ベアトリーチェたちはただ、床を伝ってくる青い炎の流れに逆らうようにして歩を進めていただけなのだ。敵影はなく、静かだった。突然、ユキシがあんな目に遭ったのだ。見えない敵がいるのか。それとも……？　わからない。わからないから、歴戦の勇士が恐れている。「いいか！」ダリエロが怒鳴った。「誰も動くんじゃねぇぞ！　くそったれめ。罠か何かか……？」「ご名答」ＳＩＸが手を叩いた。「こいつは罠だよ。史上最も悪名高い、シンプルで、効率的で、効果的で、恐るべき罠。──地雷だ」「……じらい？」ベアトリーチェは青い炎に覆われている床に目を落とした。「床に何か……爆発するものが仕掛けられているということか……？」「そうだよ」ＳＩＸは顎をしゃくって前方を示してみせた。「たぶん、この先は地雷原だ。なんでこんなものがあるのかは知らないが、迂う闊かつに地雷を踏んだらドカーンさ。まあ、踏んですぐ作動した

り、少したってから空中に跳はねて作動したり、いろいろなタイプがあるらしいがねえ。どっちにしても、探知して除去できる装備があるわけじゃない。一か八かで駆け抜けるってのもおすすめはできないよ。お前たちはやるべきじゃない」「……ＳＩＸ。まさか、お前」「俺なら平気だ。地雷が作動して爆発しても、俺は死なない。傷ついたって治っちまうからね。いいかい。俺が通って問題なければついてくるんだ。爆発したらしたで、そこはクリアになる。いい手だろう？」

37　その剣、貫かば

　日ひ陰かげ者ものだった。日陰が己おのれには似合っていると心得ていた。秩序の番人といえば初代デニス・サンライズだ。それから二代目総長にして現副長兼けん総長代理の〝死神〟羅ラ又サ。そして、四代目総長のヨハン・サンライズ。さらには副長の琺瑠フォール。もう一人の副長の名を知る者は少ない。それでよいと思っていた。不満を感じたことは一度も、ただの一度としてない。もとより剣の才に秀ひいでているわけでも、明にして敏びんなるわけでもなかった。堅実と言われればそのとおりかもしれないが、単にそう生きるしかなかっただけのことだ。他に能がないから、ひたむきに初代に仕え、二代目に仕え、三代目にも従い、四代目に仕えてきた。華々しい活躍など己には望むべくもないと知っているから、影働きに精を出した。屋台骨、大黒柱を、後ろからそっと支えるのが自身の領分だと信じてきた。もちろん、ひとたび戦いくさとなれば前線に出ることも厭いとわなかった。これでも秩序の番人だ。刀を振った回数では一流の剣士に引けをとらない自負はある。一度だけ初代に褒ほめられた。曲がらぬ剣なり、と。貫けよ、と肩を叩かれた。そうしてきたつもりだ。もう若くない。それでも、まだ若い者たちのために道を掃はき清きよめる程度の仕事はできよう。なすべきことがあらば、なそう。

「何人残ってる……!?」と元三代目が吼ほえた。マシュー・シュナイデルは即座に「我が隊は十四名──」と、そこまで応じたところで咳せきこみそうになり、こらえた。何やら胸の底に泥どろ水みずでもたまっているかのようだ。若くはないとはいえ、老けこむほどの年齢としではまだない。これほどまで鈍るとは何事ぞ。「ぷりゅぷるぷー？」と少女が顔をのぞきこんできた。何を言っているのかは

わからないが、どうやら心配されているようだ。マシューは笑ってうなずき、腹に力をこめた。気が遠くなる。さわって確かめるまでもない。己の身体のことだ。把握している。銃弾を食らった。土手っ腹に二発。いや、三発。何、斬られたわけではないのだ。なんということもあるまい。「──まだくるぞ！」と元三代目が叫んだ。マシューは「秩序の番人……！」と声を振りしぼった。「義のために、生きよ……！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」十三人の隊士がすぐさま返事をした。そばにラッド・ワーノンがいる。マシューはワーノンの太い腕を肘で打った。「リンデを悲しませるなよ、ワーノン」「……む、むろんのこと！」「そうだ……」言葉がつづかない。否だ。頭を振る。敵。敵がくるのだ。スライとかいう。敵はきわめて強力な戦士だ。この日陰者には荷が勝つ相手だな。マシューは低く笑った。弱気ではないか。初代に褒めていただいた。こんな剣でも。秩序の番人なのだ。誇りがある。膝を折ることはせぬ。前へ。前へ。前へと進むのだ。

「義のために……！」マシューは駆ける。「なっ──」「副長……!?」制止を振りきって、マシューは走る。すまぬな。進めるうちに進ませてもらう。敵の兵士。射撃。何箇所かに被弾。かまわず突撃する。とうていとらえられぬと思っていたが──捨て身ならばなんとかなるものだ。体当たりをする。刀で己と敵を縫いつけるかのように。押し倒し、組み伏せて、脇わき差ざしを抜く。敵の顔面に突き刺す。何度も。何度も。敵も黙ってはいない。マシューを押しのけようとする。ナイフをマシューの首筋に突きたてる。「それがどうした」とマシューは笑う。痛みはない。むしろ痛快だ。ひどい戦いぶりだが、爽快だ。ここまでみっともない戦いは初めてだが、気持ちがいい。どうした。早いぞ。これで仕し舞まいか。もう動かぬのか。「副長……！」チェス・ピードがきた。「おのれ！」李イ童ドウ晏アン。「副長を……！」ラッド・ワーノン。「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長！」「副長……！」隊士たち。マシューは「大事ない」と答いらえて起きあがろうとする。言うことを聞かぬ。ええい、根性なしめ。所詮はこの程度か。「──雑魚め、寄るな……！」元三代目が咆ほう吼こうして、その剣とも呼べぬ大いなる剣の一振りでどれだけの敵を屠ほふったのか。役者が違う、とマシューは思い、目を閉じようとした。「おい」と声をかけられた。「俺はお前をよくは知らん。でも、まっすぐな剣だったぞ。貫いたな」「……ああ……」初代。総長。報いられた。目をつぶる。この上ない。私は、幸せだ。

38　譲り渡されたもの

　戦車が地鳴りのような音をあげて前進する。マリアローズたちはなすすべがない。下がる。下がる以外どうしようもない。「──モリー、大丈夫……!?」マリアローズはモリーの手を引いている。モリーは自分の足で走っている。だから大丈夫だとは思うが、確認せずにはいられない。「ええ！　傷はふさいだから！　もう平気よ……！」「でも、ちゃんと治してはないでしょ!?　そんな余裕ないはずだし──」「きみねえ、わたしを誰だと思ってるの！　完治してるわよ！　見る!?」「それこそ、そんな余裕ないってば……！」モリーは戦車の銃撃で左の大だい腿たい部ぶに一発もらったのだ。たった一発でも、その部分が破裂したみたいに弾はじけてかなりひどい傷だった。しかも、直撃じゃない。銃弾はたぶん、モリーの左ひだり腿ももをかすめただけだ。当たりどころがよかった、と考えないといけない。日ごろの行いのおかげだ。運がよかった。まともに食らったら、被弾箇所がどこだろうとやばい。死ぬか、動けなくなる。動けなくなったら、戦車に轢ひかれてしまいかねない。──と、戦車が止まった。光る目のような照明が動く。「──まただ、くる！　モリー！」マリアローズはモリーを抱きよせて伏せた。その直後に銃撃が始まった。「くぅぅぅぅぅぅぅぅ……！」

　やだな。ほんとにやだ。こうやって伏せているしかないなんて。悲鳴。また何人か撃うたれた。次は自分かもしれない。モリーは。モリーだけはやらせない。「悪くないわね、こういうのも！」とモリーが言って、マリアローズの顎に口づけをした。「大丈夫よ。大丈夫。当たらない。当たらないわ。怖くない。ね？」「モリーってば……！」すてきだよ。すてきすぎるじゃないか。ぜんぜん怖くなくなっちゃった。それに実際、当たらなかった！　銃撃が終わる。そしてまた戦車は前進しはじめる。マリアローズはモリーと一緒に跳とび起きた。負けてたまるか。きっと、みんながんばってる。「琺瑠フオールさん……！」返事がなかったらどうしよう。ちょっとひやひやしたが、安あん堵どした。「──何……!?」「敵はワンパターンだよ！　やるなら今だ……！」「やりましょう！」さすがは秩序の番人の副長、決断が早い。そうでなくちゃ。「──秩序の番人！　突撃……！」「モリーはどいてて！」マリアローズはモリーを後方に押しやって身を翻ひるがえした。モリーは何も言わなかった。もちろん、ついてもこない。モリーにはモリーの、僕には僕の

役目がある。言い出しっぺだからね。番人だけにやらせるわけにはいかないし。「うわあああああああああああ……！」腹の底から声を出して戦車に突っこむ。結局、僕は臆チ病キ者ンだからさ。弱虫だし。無力で、役立たずで。でも、だからってふてくされて、それでどうなる？　どうにもならない。いやというほどわかっている。ダメでもやるだけはやる。やるんだ。やれ。いけ。いっちゃえ……！

　番人たちが次々と戦車に飛びついて、よじ登ってゆく。ワンパターン。だけど本当にそうなのか。もし違ったら……？　考えてもしょうがない。開きなおれ。「っ……！」マリアローズも戦車にとりついた。登れ。登れ。登れ。「──上に蓋ふたがある……！」と一番乗りの番人が叫んだ。「十番遊ゆう撃げき隊隊長太タイ臺ダイ子シーここにあり！　うおぉぉら──」太臺子は蓋を開けたらしい。と同時に吹ふき飛ばされた。「太臺子……！」「何か出てきたぞ！」「殺やれ！」「仇あだ討うちだ！」「殺れ……！」どうやら蓋の向こう、戦車の中から、敵が出てきたようだ。その人間みたいな姿の敵に番人が群がる。番人に組みつかれて、敵が戦車から転げ落ちる。二人の番人もろとも戦車に轢ひかれた。「──まだいるぞ……！」二人目の敵が出てきた。銃。銃を持っている。ババババババババババッ。撃った。「うっ」「あっ」「がっ」番人たちが戦車から落下する。マリアローズはなんとか巻きこまれずに戦車の上に達した。敵は銃口をこっちに向けようとしている。おっと──かなりやばいよね、これ？　そう思いつつ、マリアローズは反射的に剣を抜いた。正直、こんなことになるなんて予想だにしていなかった。でも考えてみれば、この剣は偽物じゃない。本物だ。赤レツドの・ツエ男ペリ爵オンならぬ赤のレツド・伯爵テリオンが持っていた。焼きつくバーニし刺しングレ貫く剣イピア〝劫ごう火か〟。炎が奔はしる。竜とまではいかないものの、蛇のような炎が。敵は銃をぶっ放した。しかし弾たまは炎に絡からめとられた。炎はそのまま敵を舐めて、燃えあがらせた。──これが、劫火。真物マジモノの劫火。その力。すごっ……。

「──って、感心してる場合じゃ……！」マリアローズは炎上している敵を蹴倒して、開いた蓋の中に劫火を突っこんだ。どうやればいいのかな。赤のレツド・伯爵テリオンはどうしてたっけ。ええと、そうだ、たしか。「──炎バー熱ニン地グヘ獄ル……！」よくわからないが、力を送りこむようなイメージでそんなふうに叫んでみた。吸いとられた。劫火に、生命力のようなものを、ずるずるずると。引きだされて、のみこまれた。そんな心ここ地ちがした。一瞬気が遠くなったが、一応それだけの効果というか、やってみただけの価

値はあったようだ。劫火からものすごい勢いで炎が噴きだして、それが戦車の中を暴れまわる。炎は戦車の外にもあふれた。マリアローズも炎にさらされたが、どうしてか熱くなかった。劫火のせいというか、劫火のおかげなのか。まあそういう特典でもなかったら、こんなもの危なすぎて使えるわけないけど。マリアローズは膝に手をつき、劫火を杖つえにして身体からだを支えた。いっぺんに五十歳くらい年をとったような気分だ。めちゃくちゃ疲れた。なんて言っていられない。マリアローズは無理やり上体を起こして劫火を振りあげた。適当な台詞せりふが浮かばなくて「おおおおおおおおおぉぉぉ！」と叫んだら、みんなも「おおおおおおおおおお……！」と返してくれた。なんか泣いちゃいそうだ。こういう達成感はなかなか味わえない。で、オチがつくんだよね。地鳴りのような音が聞こえる。マリアローズは青い炎が流れてくる方向に視線をやった。光る目。戦車だ。一台じゃなかったのか。「……やめてよ、もう……」



39　深度

「大丈夫か、陛下？」尋ねられて、うなずく。ファニー・フランクは大丈夫だ。問題ない。何しろ、このフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトは〝おかしなフアニー〟フランクなのだから。だいたい、旗を振り振り皆のあとをついていっているだけだ。しっかし、アレだねえ。頼もしいねえ。飛フエイ燕ヤン君に、ユリカ君。ピンパーネル君にハニーメリー君。リキエル君。サイケン……何とか君。死神君に、アーニャ・クルチバ君。そして、我が愛いとしの軍師どの。このあたりは本ッッッッッッッッ当に頼もしい。ファニー・フランクはただ進むだけでいいのだ。とはいえ皆に守られ、皆の後ろに隠れているだけというのもつまらない。ファニー・フランクはできるだけ前線に立とうとしている。戦えないが、敵の的になることくらいはできるのだッ。敵の弾は、だが、このファニー・フランクには当たらないッ。正直に言うと心の底からそう信じているわけではないのだが、当たってもかまわないと思っている。死など恐れない。とうに死んでいてもおかしくない身なのだ。皆に生かされてここまできた。我が命は我のものにあらずッ。皆さんのおかげですッ。すでに生死は天に預けている。自分自身が決めることではない。生きようが死のうが後悔などしないッ。

　まあ、我が軍師どのが結婚前に未亡人みたいなことになってしまったら、それは哀れだねえ。そんな目には遭わせたくないので、やはり死なないほうがいいッ。死にたくないッ。元気いっぱい、生き抜いてやるぞォッ。「──あそォーれッ！　フレーッ！　フレーッ！　フレッ、フレッ、フレェェー……ッ！」旗を振れ。振れ。振れ！　こォーの四つん這ばい悪魔たちめ！　悪魔ではないとかサイケン何とか君が言っておりましたがァ……？　よくわからない。とにかく悪魔の一味であることは間違いなかろう。旗を振るファニー・フランクの前に四つん這い悪魔が立ちふさがる。撃たれた。が、銃弾は彼の頰ほおをかすっただけだった。アーイムラッキィーボーイ！　ファニー・フランクは「──どっせいッ！」と四つん這い悪魔に蹴りを入れる。四つん這い悪魔はビクともしないが、死神君が「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌」とやってきてヤツに刀をガツンガツンぶちこみ、動けなくしてくれた。「ワハハッ！すンごい……ッ！」笑いが止まらないが、しかしあの忌忌忌忌忌忌はどうなのかねェ。人を捨てているようでおっかないよ。ウン。ねェ。そのへん。どうなのかなァ……。「陛下⁉」と、また軍師どのにどやされて、慌てて「は、はいッ⁉」と返事をした。いかんいかんいかんッ。どうもボヤーッとしている。身体に力がこもらない、というか──抜けてゆくような。ふと気づいた。熱いような、冷たいような青い炎。さっきまではせいぜいくるぶしくらいまでだっ

たのに、今は膝ほどまであるではないか。

40　過去

「Ｈｉ□Ｇｏ……！」爆発が起きて、ＳＩＸの右脚が砕け散った。ＳＩＸは崩れ落ちて、這う。のばした右手が地雷にふれたらしい。起爆。「Ｏｈ……！」右腕が半分吹っ飛んだ。それでもＳＩＸは這い進む。今度は左腕だ。「Ｇａ……！」爆発。右脚と両腕がなくなったＳＩＸは、身体を横向きにした。「……すまないねえ。ちょっと一休みだ。なあに。そんなに長い時間はかからないよ。どうもねえ。昔より、再生の速度がずいぶん上がってるんだ。こんな化物の話なんか聞いたって参考にならないだろうし、べつにおもしろくもないだろうが、黙ってるのも暇だからしゃべらせておいてくれ。もともと俺はおしゃべりなんだよ。そう……俺はだいぶ斬られたり何だりしただろう？　そっちも斬ったり何だりしただろうと言いたくなるかもしれないが、それはまあこの際、関係ないのさ。俺という化物はねえ。ある刺激を加えられると、それに対して反応する。自動的にね。で、似たような刺激を繰りかえし受けると、慣れちまうんだ。耐性がついたり、ある作用が起こりやすくなったり。やられればやられるほど、もとどおりになりやすくなるってことさ。便利だろう？　そう……便利なのさ。化物も使いようでねえ。さあ、治ってきた。つづきをやろう」

　誰も言葉を発しない。ただ見守っている。ＳＩＸは起きあがる。地雷を踏む。爆発する。身体の一部が壊される。地雷を踏む。爆発する。身体の一部が壊される。進めるかぎりは進む。そうやってＳＩＸは道を切り開く。少しずつ、少しずつ、安全な道を。そのうち進むことができなくなれば、ＳＩＸは休む。再生を待つ。「……やれやれ、だ。一回で十メートル……いや、メーテルか。十メーテルか、十五メーテルってところかねえ。もっと距離を稼かせぎたいところだけど。ああ……また再生が速くなってきた気がするよ。いい具合だ。ここまで短いスパンで身体がぶっ壊れたことは今までなかったからね。俺はどんどん化物になってゆくよ。Ｋｕ□ｋｕｋｕ……わからないだろうが、これはこれで悪くないんだ。身体が戻っていくってのはねえ。特別な感覚なのさ。さあ、やろうか。急がないとね」

「罪つみ滅ほろぼしのつもりか」とヨハンは問いかけた。「改心したと、証明してみせたいのか」

「……Ｆｕ……」ＳＩＸは頭を振った。「違うよ。そんなんじゃない。自分がしたことを許してもらおうとか、許してもらいたいとか、俺は思ってやしないよ。過去は積み重なるものだろう？　帳消しにはできない。消してしまっていいものでもない。たとえそれがどんな過去であれ、ね。すべてが大切なんだ。俺はやっとわかったんだよ。かなり長く生きてきたのに、わかってなかったんだ。笑えるだろう？　何もかもどうでもよかった。そのときそのときが楽しけりゃいいと思ってた。違うんだ。そうじゃないんだ。違う。お前たちのおかげだよ。お前たちと向きあって、ようやくわかった。俺が手に入れてきたもの、捨ててきたもの、失ってきたもの、そのぜんぶに意味があるんだってことを。正確に言えば、意味なんかなくても意味を持たせることはできるし、意味を持たせられるってことに意味があるんだってことをね。ヨハン。俺はお前に許しを求めない。でも、これだけは言わせてくれ。言わなくたっていいことだが、言いたいんだ。どう思ってくれてもかまわないが、言っておきたい。俺はお前たちを守りたい。お前たちを進ませてやりたい。一人でも多く、この先に連れてゆきたい。これは俺の義務だとさえ思ってるんだ。俺は山賊上がりのろくでなしだからさ。たいしたことはできないが、身体を張ることだけは得意だ。俺は死なないからねえ。細胞の一片でも残っていれば、俺は戻ってこられる……まあ、そこまで言ったら大おお袈げ裟さかもしれないが、俺はそういう化物なんだよ。化物には化物のできることがあるのさ。ひたむきに生きているお前たちと違って、俺は卑怯だ。卑劣な化物だ。俺は死なない。どんなに身体を張っても、俺は死なない。お前たちと一緒じゃない。お前たちと同じにはなれない。お前たちのようには生きられない。俺の命は輝かない。俺はずっと卑劣な化物のままだ。どうかお願いだよ。そんな俺にもこれくらいのことはさせてくれ。化物の手なんかきっと借りたかないだろうが、俺が好き勝手にやってることだ。黙認してくれ。俺はお前たちを進ませるよ。一歩でも二歩でも先に、ね。──さあ、つづきだ」

41　引きよせる流れ

「……解げせんな」呟きながら大懺カタスト滅刀ロフアーを解き放

つ。竜りゅう玉ぎょく、逆げき鱗りん、竜骨、竜の腱けんを素材とした七百七十七枚の鱗りん牙がが腹をすかせた獣の群れのように特化型Ｓ強化Ｒ装甲Ａ歩兵Ｉに殺到して、貪むさぼり食らうかのごとくまたたく間に圧殺してしまう。ＳＲＡＩ単体で一個大隊、千人以上の完全武装した兵隊に匹ひつ敵てきする戦闘能力を有していて、中身は人間だとか人間をもとにした改造人間だとか、ああだこうだと噂されていたが、詳細は知らない。かねてより極ごく秘ひ裏りに開発が進められていたＳＲＡＩは、統一Ｕ抵抗Ｒ戦線Ｆがありとあらゆる武装組織や難民集団を傘さん下かに収めて各地で武力闘争を仕掛けはじめてすぐ、実戦に投入され、赫かく々かくたる戦果をあげた。その圧倒的な戦闘力に抗こうするすべがなくなったことで、ＵＲＦはＡＤ兵器による大規模テロへと駆りたてられたのだと主張する者もいたはずだ。画面では何度か見たが、実際やりあってみるとそこまでの相手じゃない。彼が人の域を踏み越えているからそう感じるだけか。たしかに、マシュー・シュナイデル以下、秩序の番人の隊士が十五人ほども殺られて、被害は小さくない。だが、おかしい。このやり方は変だ。大contentカタスト滅刀ロフアーでまた一人、ＳＲＡＩの息の根を止めた彼の足あし許もとに猫がいた。灰色の猫だ。「ジュジか。失うせろ」

「ひどい言われようですね」猫はそう言いながら、にゃあ、と鳴いてみせた。「ところで、あなたは妙だと思いませんか、ディオロット。ＳＲＡＩはどんどんやってくる。でも、一気にはこない。戦力の逐ちく次じ投入は愚ぐ策さくです。地獄の帝王はそんなに馬鹿なんですかね」

「知ったことか」彼は聖断罪の剣を振るう。虹色の光が迸ほとばしってＳＲＡＩの首をぶった斬り、ロム・フォウやアルファ、顔を見知った番人たち、それから昼ラン飯チタ時イムの何人かを照らした。あいつらは無事なのか。なんではぐれた。焦燥が彼の全身を焼きつくしてしまいそうだ。落ちつけ。あいつらを信じろ。そんなにやわじゃない。──しかし、ジュジにはああ言ったものの、そのとおりだ。彼も同じことを考えていた。敵は本気でやってるのか。これくらいで俺たちが潰れるとでも？　ロム・フォウがしきりと傍かたわらのアルファを気にしている。そのとき彼は気づいた。炎。火ではないだろう。床を伝い流れてくる青い炎のような何かが──その量が増え、勢いが増している。水位という言い方は間違いだが、あえて水位という言葉を使えば、七十か八十サンチ、彼の腿ももほどまである。狼にしてはきわめて大きいといっても、アルファは青い炎の中を泳いでいるようなものだ。いやがっているのか。アルファの

足が鈍っているみたいだ。「ロム・フォウ！」「――うん！　平気だよ！」「そんなふうには見えんぞ！」「いざとなったら、あたしが背負って行くから！」ロム・フォウがそう言うと、アルファは途端に元気になった。まあ空元気でも出ないよりはましか。

「鬱うつ陶とうしいな……！」彼は青い炎の上流めがけて疾しつ駆くし、大熾カタスト滅刀ロフアーと聖断罪の剣ですれ違いざまにＳＲＡＩを四人しとめた。かいくぐって、彼の後ろにいるロム・フォウたちに銃撃を浴びせようとしたＳＲＡＩを、細長くのばした大熾カタスト滅刀ロフアーで両断する。「――くるならこい！　一人残らず殺してやる……！」挑発しても無駄だ。ＳＲＡＩたちからは意思らしきものが感じられない。おそらく操あやつられている。人工知能ＡＩで動く自動人形のようなものだ。動作が単調なわけでも、連れん携けいがとれていないわけでもない、悪い兵士ではないのだろうが、感情がない。彼は青い炎を睨みつける。その向こうを。いるのか、そこに。地獄の帝王。待ち構えているのか。だとしたら、彼らは誘おびきよせられているのではないのか。

42　悪あがき

　肩で息をしている。息ができるだけいいか、と思う。そうだよ。息ができてるんだから、なんとかなる。なんともないよ。これくらい、どうってことない。「……っし。これで、三台目」と口に出してみると、気持ちが上向いた。劫ごう火かを掲かかげる。歓声があがった。戦車から降りないと。よろめきそうになる。しっかりしろ。やだな。この青い炎。熱くて、冷たい。たまらなく暑いのに、ひどく寒いんだ。手がかじかむ。足がすくむ。戦車から降りると、青い炎はマリアローズの胸くらいまで達する。これ、吸いこんだら、身体からだに害があるんじゃないかな。きっと毒だ。「あなた――」と琺瑠フオールに呼び止められた。「大丈夫なの？　どこか怪け我がは？」「ないよ。……うん。ない」マリアローズは目を凝こらして琺瑠の腕に抱かれている小さな子供を見た。「その子は？　平気……？」「あーだー」と子供が答えた。ぐったりしてるっぽかったんだけどな。そうでもないのかな。「かわいいな……」マリアローズは子供のやわらかな頬をちょっとだけさわった。生き残ってもらわないと。琺瑠も子供も先には進ませたくない。だけどここに残るわけにもいかないよね。どうしようもないのか。またあの地

じ響ひびきが聞こえる。「──行かないと」「マリア！」モリーが駆けよってきた。抱きしめられて、耳許で囁ささやかれた。「無理してもいいけど、周りに頼りなさい。わかってるでしょう？」「……そうだね」まったくだ。僕は何をやってるんだ。一人で背負う気になって。そんな器じゃないのに。わかってるはずじゃないか。マリアローズはちょうどそばにいた秩序の番人のコンラッド・アシャーに劫火を押しつけた。「ごめん、これ使ってみて！　僕なんかより、ずっとうまくできると思うから！」「──了解！　見ていたので、やり方はなんとなくわかります！」「お願い！　援護はする！」「秩序の番人、もういっちょいきましょう！　我らに義あり！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」答える声はだいぶ少なくなった。みんな死んじゃったんだ。涙が出そうになる。泣かないけどさ。

　感覚が麻ま痺ひしちゃってるのかな。恐怖感は皆無だ。「前面に立たないで！　銃撃が始まる前に……！」と琺瑠が叫んだ。具体的には戦車の照明が当たらないところを通って近づいてゆけばいい。マリアローズは壁際ぎりぎりを行く。壁。この幅はば十メーテルもなさそうな通路には壁がある。暗いだけじゃなくて、壁自体も真っ黒だし、光を反射しない材質みたいだから、見えないんだけど。右か左に走って壁にぶつかったら、その壁沿いを戦車がくる方向へとひた駆ける。ああ。重いな。身体が。とても。ものすごく。青い炎は高くなるだけじゃない、濃度も上がっているような気がする。吸いこんだら絶対に毒だと思うけれど、息をすればどうしたって口の、鼻の中に入ってくる。息をしないわけにもいかない。息を止めたら、とても前には進めない。僕だけじゃないんだ。全員、つらい。少なくとも、楽じゃないはずだ。戦車。もうすぐだ。あと一歩。先に戦車によじ登っている番人につづく。コンラッド・アシャーが蓋ふたを開けた。戦車の中から飛びだしてきた敵を、アシャーが劫火で斬り燃やす。「──ええい……！」アシャーは開けた蓋から戦車の内部に劫火を突っこんだ。「バーニング⁉　ヘル……ッ！」炎が暴れくるう。その直後だったと思う。炎に包まれた敵が中から手をのばして、アシャーの左脚にしがみついた。アシャーを車内に引きずりこもうとしている。「──落ちついて！　火は……！」マリアローズがそこまで言ったときだった。アシャーが味方に劫火を投げ渡した。なんで。「──ダメだ！」

　遅い。手遅れだ。劫火は二十五番無名隊隊長ハインツ・クルエルフォートの手に渡った。アシャーはあっという間に炎に巻かれて、敵もろとも車内に陥おちいった。おそらく劫火ごと炎が渦うず巻ま

く戦車の中に落ちてしまうわけにはいかないとアシャーは考えたのだろう。劫火だけは味方に手渡さないといけない、と。劫火を持っていれば、炎に焼かれることはなかったのに。敵は悪あがきをしただけだ。慌てずに対処すればそれでよかった。でも、とっさの判断だ。アシャーは劫火のことをよく知っているわけでもなかった。責められない。責められないどころか。「……僕のせいだ」マリアローズは戦車を叩いた。アシャーに託たくすべきじゃなかった。あくまでも自分でやればよかった。アシャーは僕の代わりに死んだようなものだ。僕のせいで。「──やったぞ……！」とクルエルフォートが戦車の上で劫火を振ふりまわして声を張りあげた。あがった歓呼の声は半分やけくそみたいに聞こえた。やけくそでも何でも前を向くしかない。自己嫌悪も後悔も腹の底に押しこめろ。マリアローズは歯を食いしばって戦車を乗り越こえた。青い炎はマリアローズの背丈よりも高い。光る目が青い炎の中で揺ゆれている。また一台、戦車がくる。「怪我をした人は……⁉」とモリーが呼びかけている。寒い。それとも暑すぎるのか。身体が震えている。マリアローズだけじゃない。明らかに味方全体の動きが鈍い。息をするごとにきつくなる。琺瑠は？　わからない。目が霞かすむ。そんなことない。まだいける。いかないと。すぐそばで番人が膝をついている。マリアローズは背中をさすってやった。「立って。立たないと」「……はい」「ほら」肩を貸して進もうとしたら、戦車が止まった。いつの間にこんなに近くまで？　こっちがのろのろしていたせいか。「やばい……」射撃が始まる。「いい、おれはもうだめだ」と番人がマリアローズの身体を左方向に押しだした。マリアローズは倒たおれた。戦車は射撃を開始した。番人は銃弾を食らった。その番人だけじゃない。戦車に迫ろうとしていたクルエルフォートもどうやら撃うたれたようだ。マリアローズは這はう。壁際まで這ってゆく。劫火はどうなったんだろ。クルエルフォートが持ってたはずだけど。射撃がやんだ。戦車がふたたび前進しはじめる。嘘。どうすれば。戦車の幅は通路の幅とほとんど変わらない。戦車の脇をすり抜けて前に出るのはまず不可能だ。下がるしかない。そうだ。さっき止めた戦車の後ろに隠れれば。「後ろに！　戦車を盾に……！」どこに仲間がいるのかもうよくわからないが、マリアローズはそう叫びながら必死に後退した。死にものぐるいで戦車を越えて、後ろに回る。間もなく、どん、と戦車が戦車に追突する衝撃がきた。まずい。押される。戦車が戦車に。「さ、下がって……！」戦車に押されて進む戦車から逃げる。逃げる。周りに何人かいる。モリー。モリーもいるし、琺瑠も。それから、琺瑠じゃない女性の番人。たしか、カロリーナ・シェルベリだっけ。二十五番無名隊の隊長だ。シェルベリがマリアローズに近づいてきた。

「━これを……！」マリアローズは差しだされた劫火を受けとって、うなずいた。まだやれるとか、やれそうだとか、ぜんぜん思わない。だけどやっぱりやらなきゃ。「珐瑠さんと、珐瑠さんの子供と、モリーをお願い……！」返事を聞かずに踵きびすを返す。悲壮な覚悟とか、そういうのとは違うんだよね。ほんとに、やらなきゃいけないっていう、それだけで。外がい套とうからクルルが顔を出している。クルルもきついんじゃないかな。引っこんでたほうがいいよ。言いたいんだけど、声なんか出したらそのぶん消耗するように思えて。もったいないから。戦車に押されている戦車に飛びつく。登る。意外と動けるものだ。しっかし、揺れるなあ。振り落とされそうになりながら、戦車から戦車へと飛び移る。蓋に手をかけようとしたら、開いた。敵が出てきて、びっくりしてもよさそうなものなのに、なぜかマリアローズは驚かなかった。劫火で串くし刺ざしにすると、敵は燃えあがった。蹴り離して、戦車の中に劫火を突っこむ。「━炎バー熱ニン地グヘ獄ル……！」噴きだせ。あふれろ、炎。焼き尽くせ。意識が遠のきそうになる。でも、劫火は手放さない。マリアローズは戦車から転げ落ちた。背中とか腰とか、あちこち打って、起きあがれない。寒いしさ。やっぱり暑いってより、寒い、だよね、これ。凍こおっちゃいそうだ。なんとなく、全身の皮ひ膚ふが青く染まってそう。クルルが胸の上にのっている。いつ外套から出てきたんだろ。クルルはマリアローズを見おろしている。まるで観察しているみたいに。それか、待っている。息が止まるのを。マリアローズは目をつぶった。もういいかな。

いいわけ、ない。

マリアローズが上半身を起こすと、クルルは床に降りたった。劫火を支えにして立ちあがる。これでもさ。わりとあきらめが悪いほうだったりするんだよね。戦車、もうこないのかな。とりあえず見えないけど。みんな、大丈夫かな。僕がまだ生きてるんだから、大丈夫だよね。きっと大丈夫だ。行かないと。絶対、大丈夫だから。行くんだ。大丈夫に決まってるんだから、会いに行かないと。大丈夫だって、この目で確かめるんだ。こんなところで終わりにはできない。終わらせない。終わらせてたまるもんか。

43　終わりの終わり、偽りの虚無

「ヴィシュクラトぉーっ！」チビグッダーは目から出したグッダー・ビームをミサイルに浴びせて爆発させた。「──鍵の具合はどうにゃのだ……っ!?」「安心なさい」ヴィシュクラトーはひらりとＦ□42ステルス戦闘機をかわしながらマグニデアグローブを出現させて、マーキング済みの光点を示してみせた。「このとおり、鍵は健在です」「余としたことが、確保しそこねたのは失敗であったわ……っ！　このタイミングであれをうしにゃっては、面倒にゃことににゃるぞ……！」「アニマが離れてしまいさえしなければ用は足ります。そうなのでしょう、りりぃ」「──あたしに聞くな……！」りりぃは空中に大量の残像をばらまきながら、ミサイルを、Ｆ□42を斬り捨てている。「そんなことは知らない……！　とうに忘れた……！」「忘れたではすまされぬ……っ！」チビグッダーは「ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅええいっ……！」と気合いを入れて突っこんでくるＦ□42に右掌てのひらを向け、静止させた。「──ぐっだぁぁぁぁぁ……っ！　くらぁぁぁぁぁぁぁぁーっしゅ……っ！」右手を握りしめると、それにあわせてＦ□42がひしゃげる。爆発が起こって、Ｆ□42は落下してゆく。「うぬとジュジが基コア幹エン技ジニ師アの血縁者で、余らが知りえぬ情報を握っておったからこそ、この計画はにゃりたった！　今さら知らぬ存ぜぬが通用すると思うにゃっ！」「あたしをあの馬鹿と一緒にしないでもらおう……！」りりぃは躍動している。破壊を愉たのしんでいるのだ。愉しみ、没頭して、肝心なことから目をそらそうとしているのだろう。この女は千年以上そうやって逃げてきた。愚かな、愚かすぎる女だ。「──いいかげん目を覚ますのだ、りりぃ……っ！　こんにゃものはぜんぶまやかしにすぎぬ……！　そんにゃことはうぬとてわかっておろうが……っ！」「貴様こそ、いいかげん悟れ……！」りりぃはＦ□42を一刀両断し、一基のミサイルを蹴飛ばして爆発させた。「──否定しえない！　これこそがあたしたちの現実リアルだ……！」「このうつけめ！　たわけたことを……っ！」チビグッダーは魔術士たちを振ふり返った。「おい、うぬら！　一つ、余と競ってみぬか……っ!?」

「競うって？」踊り羊がひょいとＦ□42をよけつつ、目をくりくりさせた。「何で競うのかな？」「何であれ、あなたと競ったとして──」閃光の魔女は白い光線でＦ□42を撃墜しながら、下目遣づかいでチビグッダーを見た。「いったい、わたくしに何のメリットがあるというのかしら」「どあほうっ！」チビグッダーは目を剝むいて舌を出してみせた。「魔術士として、このキング・グッダー、唯一無二の魔ま導どう王に先んじたという事実以外に、にゃにを求めるというのだぁ……っ！」（ふむ）と超メガ賢セイ者ジがチビグッ

ダーに向きなおり、車椅子の弟子は師を仰いだ。（やりましょう、お師様）（それも一興……かのう）「よくってよ。受けて立ってやるのだわ」「内容次第かなあ？　つまらないことだったら、クルオはやだよ」「負けるのが恐ろしいのにゃら、正直にそう言うがいいのだっ！」「そんなこと、クルオはひとっことも言ってないじゃないか！」「にゃらば黙って余と競ってみせればよいのだっ！　この先に──」と、チビグッダーは暗闇の果てを指さした。「余らの目指す終着点ゴールがある！　いち早くそこにたどりついた者が勝ちだ……っ！　わかりやすかろうが……⁉」「──ボクは魔術士じゃないし、そんなお遊びには興味もないけどネ……！」アジアンが先頭を切って抜けだした。「マリアが！　ボクの仲間たちが！　その終着点ゴールとやらに向かっているはずサ！　そこに行けば、必ず合流できる……！　ベティ！」「ええ……！」「待ちなさい、ベティ！　あなたはわたくしについてくるのよ！」「はあ⁉　今さら何を──」「あなたが必要だからに決まっているでしょう？　他の誰でもない、このわたくしが！　あなたを必要としているのよ！　黙ってわたくしに従いなさい、ベティ！」「……っ！　もう！　勝手なんだから！」「それでよいのだわ！　勝負には、このわたくしが勝つ……！　サフィニア、ベティ、わたくしについてきなさい……！」魔女が白い彗星と化して翔かける。「──は、はい……！」と銀髪の弟子サフィニアが、「なんであたしが……！」ともう一人の弟子ベティが魔女を追いかける。「いいや！　勝つのはクルオだよ……！」踊り羊も。（お師様！）（うむ）モーグとエヴァンジェリンもつづく。「──うっくくくく……っ！」チビグッダーはふくみ笑いをして暗闇の果てへと突つき進む。「御ぎよしやすし、餌えさに釣られるとんちきどもよ……っ！　ゆくぞ、ヴィシュクラトー、りりぃ！　余らの宿願を果たすのだぁ……っ！」「ええ、よいでしょう、グッダー」「あたしには宿願などない……！」「にゃぁーひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃにゃひゃぁぁぁぁー……っ！」

　Ｆ42の編隊が闇をつんざいて押しよせる。Ｆ42がミサイルを放つ。虐殺カーネイ人形ジドールが、魔女が、その弟子たちが、踊り羊が、超賢者と娘がミサイルを爆発させると、Ｆ42は接近して機銃を撃ってくる。虐殺カーネイ人形ジドールが螺ら旋せん飛行で機銃弾を回避し、黒こく鱗りんの王ジャシュギシュと化さしめた左腕でＦ42を一撃して叩き潰す。魔女とその弟子たちは純白の光線でミサイルを、Ｆ42を狙い撃ちする。踊り羊はミサイルも機銃弾もＦ42もひたすらよけて進む。超賢者と弟子に至ってはプラスマル・ボディを薄く、薄くのばして、ミサイル、機銃弾、Ｆ42を無

視して進む。りりぃはミサイルをすれ違いざまに斬る。ミサイルが爆発したときにはもう、りりぃはそこにはいない。次のミサイルを斬っている。チビグッダーとヴィシュクラトーは彼ら、彼女らのあとをついてゆく。慌てたわけでも焦ったわけでも決してないが、多少予定がくるったせいで、力をいくらか無駄に使ってしまった。先を行くとんまどもにはいつでも追いつける。たやすく追い抜ける。しかし、その必要はない。きゃつらに露つゆ払はらいをさせる。「──見えるぞ……！　見える……っ！」チビグッダーの目が暗黒の先の先にちらつく青い炎のようなものをとらえた。あれこそが地獄の帝王がまとう炎ともつかない炎。熱くも冷たくもある魂アニマを燃やす地獄の火炎。小さな魂アニマしか持たない虫けらや獣ならば、一瞬で焼き尽くされて消し飛んでしまう。やはり。やはりだ。案の定、方向は間違っていない。あの蒼そう炎えんの向こうに帝王はいる。チビグッダーは速度を上げて魔女らを煽あおった。「うーりゃうりゃうりゃうりゃぁぁ……っ！　どぉーしたぁっ⁉　そんにゃものか、うぬらの力はっ⁉　その程度で余に勝てるつもりでおるのかぁっ⁉　片腹痛いわぁ……っ！」「──見ているがよいのだわ……！」魔女とその弟子たちが一気に虐殺カーネイ人形ジドールを抜き去った。「合体アマル魔術ガムよ……！　サフィニア、ベティ、わたくしにあわせなさい！　できないとは言わせないのよ……！」「はい……！」「──やってやるわよ……！」

「ほぉ……」チビグッダーは思わず感嘆の声をもらした。「──やりおるではにゃいか」

　魔女とその弟子たち三人が円陣を組んだ。三人はその陣形を維持したまま、回転しながら突っ走る。魔女の背や右肩からは真っ白い光が噴きだしている。やがて弟子たちの背からも白い光が迸ほとばしりだした。光は渦巻いて、のびる。うねる。のびる。唸る。さながら光の巨大熱帯ハリケ低気圧ーンだ。超大型で超強力な光のハリケーンがミサイルを、機銃弾を、Ｆ□42を蹴散らして進む。近づくミサイル、Ｆ□42は、いや、近づかなくても、光のハリケーンにのみこまれてしまう。それは純粋に破壊的な魔術だ。破壊以外は何も生まない、どこまでも暴力的で、じつに美しい魔術だ。そうだ。それでいい。壊してしまえ。滅ぼすがいい。何もかもを。すべてを灰かい燼じんに帰すのだ。魔女は一人の魔力でそれをなしているのではない。弟子たちの魔力を有効活用している。それゆえに魔女はいまだ未熟であるとはチビグッダーは思わない。そこまでふくめて魔術だ。何をどう用いようが構わない。このくだらぬ醜悪な世界で唯一、彼を熱中させたのが魔術だった。魔術の研究とその奥義の追求

にだけは彼も心を奪われた。信じようとしたこともある。信じかけていたことすらなかったわけではない。魔術こそは真理であると。我が現実リアルであると。しかしどれだけ熱く熱く精神を燃やしても、ふとしたときに彼は我に返るのだ。夢から醒さめてしまうのだ。これは違う。ぜんぶ違う。何の意味もない。本物ではない。みんな嘘っぱちだ。この魔術さえも。

「にゃにが勝負、だ」彼の幼い顔がくしゃくしゃになった。彼は小さな両手で顔を覆った。おまえたちにわかるか、この虚無が。わかるまい。わかるはずがない。それを埋うめ合わせるためには何だってする。彼は顔を笑わせて、両手をどけた。「──くくく……くっくっくっくっくっ……！」あえて笑い声を立てながら、巨大な光のハリケーンを、魔女たちを追いかける。「──働け。働け。働け！　余のために働くがいい……！　鮮やかに働け！　目覚ましく働け！　すり減っても働け！　働け！　もったいにゃくも、この余が使い捨ててくれるわ！　余のために働け……っ！　余はうぬらをねぎらわぬ！　同情にゃどもっての他だ！　うぬらは道具だ！　道具にすぎぬっ！　いずれ用済みににゃる！　余はうぬらを惜おしまぬ！　顧かえりみぬ！　それまで、余のために働け！　余に尽くすのだぁ……っ！」

　光のハリケーンは速い。どんどん速くなる。チビグッダーでも本気を出さないと置いてゆかれかねない。りりぃ、ヴィシュクラトーはさすがについてくるが、アジアンと踊り羊はやや遅れ気味だ。モーグとエヴァンジェリンに至ってはだいぶ後方にいる。光のハリケーンはミサイルやＦ□42を片かたっ端ぱしから消し去ってしまう。障害が障害にならない。妨害しようとしても無意味だ。光のハリケーンは何の抵抗もなくどんどん距離を稼ぐ。程なく行く手に母艦が見えた。一隻せきではない。十隻。二十隻。それよりも多い。浮いている。蒼炎の海に、おそらく合計百隻以上の空母が、そして、巡洋艦、駆逐艦、フリゲートが。

　それがどうしたとばかりに光のハリケーンは猛進する。巡洋艦、駆逐艦、フリゲートが垂直発射装置からミサイルを発射する。艦かん砲ぽう射撃を開始する。潜水艦でもいるのか、蒼炎の海中からも無数のミサイルが飛びだしてくる。光のハリケーンはそのすべてを雪のように溶とかしてしまう。笑いが止まらない。なんとたやすいのだろう。これだけでもこの者たちをここまで連れてきた甲か斐いがあったというものだ。彼らを待ち受けていた艦隊が見るも無残に壊滅しようとしている。間もなく全滅する。跡あと形かたもなく消

え失せる。そして光のハリケーンは蒼炎の海へと突入する。魂アニマを焼く蒼炎すらもかき消しながら。その先には蒼炎の源がある。そこが終着点ゴールだ。目的地だ。光のハリケーンがそこに到達する前に、チビグッダーは後方に赤、黄、オレンジ色の光を撃うち放つ。「──ぐっだあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！
ぶぅぅぅぅぅぅぅぅぅすとぉぉぉぉぉぉぉああぁぁぁぁぁぁぁぁ
……っ！」

　倍、さらに倍。身体からだが引きちぎれそうなほど急激に超加速して、チビグッダーは光のハリケーンをぶっこ抜く。抜き去ってしまう。魔女の呆気にとられた顔をほんの一瞬だが、たしかに見た。
「にゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ
ひゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！　ざ
まぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁみさらせぇぇぇぇぇぇぇぇー
……っ！」

　甘い。甘い。甘い。甘い。甘い。甘い。甘い。甘すぎるのだ。大甘ちゃんめ。このキング・グッダーがみすみす敗れるわけがないではないか。勝負には勝つ。必ず完勝する。

　チビグッダーは蒼炎の海を突破した。

　そう。

　突破したのだ。

　あれほどまでに充みち満ち吹き荒れていた蒼炎が、今はその名残なごりすらも感じられない。

　終わりはついに果てた。

　果たして、ここは広大なのか、狭きよう隘あいなのか。

　天は？

　地は？

　不明。

　上も下も、前後左右、いずれもただただ不明。

　ここは最果ての際さい涯がいである。ひたすらの底である。底

の、底の、底である。

　従って、彼はここにたどりついたのではない。落ちたのだ。

　落ちて、堕おちて、どこまでも堕ちて、その果てに行きつくこともなく、ここに陥おちいった。

　ここは最終の地である。しかしながら、終わりではない。真の終わりとは無であるはずだ。無は終わらない。よって、真実の終わりは決して終わることがない。

　ここは、そう、ただの無。

　その無に、形があるとは。

　形があるならば、もはやそれは無ではありえないはずだ。無ではありえぬ無が、やはり無でしかありえない。

　少なくともそれは、終わりの終わり、終わりの果て、無に至ろうとしている、その寸前にある何ものかだ。

　これこそが虚きよ無むか。

　彼はその虚無の王、無の帝王に、自らのうちにある虚無の姿を瞬間、見たような気がした。だがこうして見ることができるのならば、虚無などではない。所しよ詮せんはまやかしにすぎぬ。無ではない。虚無ではない。

　それは欺ぎ瞞まんである。

　無を騙かたる欺あざむきの気配である。

　無は、虚無は、それがまとう虚きよ飾しよくでしかない。

　消えよ、と彼は念じる。念じればただちに虚飾は剝はぎとられる。その姿がはっきりと浮きあがる。これが。

　これが帝王。地獄の帝王か。この目で見るのは初めてだ。

「王が王に、会いにきたぞ」

　地獄の帝王。地獄では憚はばかって誰もその名を口にすることはないという。管理者、俗ぞくに言う神であったころの名はルシ

ファ。反逆してからはサタンを名乗った。サタン。魔王。ルシファ。名など何でもいい。それは形のない玉座に深く腰を埋めている巨人だ。黒い甲かつ冑ちゆうで全身を鎧よろっている。どこもかしこも曲がり、うねり、波打ち、ねじくれていて、あやしく、おぞましい、威圧的で、険悪、老ろう獪かいな印象を与えつつも猛々しく、血気盛んな風もある、奇怪な甲冑だ。幾いく重えにも重なる閉ざされた瞼まぶたと凝視する瞳とがその総身に張りめぐらされているかのようで、鋸のこぎりの歯や鉤かぎ爪づめのごときものがあちこちに生え、左右対称ではなく、右肩は大きく盛りあがり、左肩は削そぎ落とされたようにすっきりしていて、右腕のほうが左腕より倍ほども太くて長い。脚はその逆で、右脚よりも左脚のほうが数段凶暴な輪郭を描えがいている。頭部は闇だ。凝こり固まる闇に覆われていて、形をうかがい知ることもできない。その身の丈はどのくらいなのだろう。数十メートルか、数百メートルか。ここでは、帝王の御ぎよ座ざがあるこの御ご所しよでは、方向も距離もわからないので目測がきかない。彼は地獄の帝王を見上げているのか、それとも見おろしているのか。右から見ているのか左から見ているのか。それすらもわからないのだ。ただ、地獄の帝王はそこにいる。この御所に。そして彼もその御所にいる。それだけは間違いない。なんというまやかしだ。どこまで手の込んだペテンなのだ。彼は憤いきどおりを感じる。あまりに仰々しすぎて、おかしくもある。

「これは……」と閃光の魔女が呟いた。御所は底の底の底だ。ここに至った者は唐突にこの場に現れる。師の後ろで犠牲に捧げられようとしている子羊のごとく身をすくめ、震えている魔女の弟子たちは滑こつ稽けいだが、まあ無理もない。魔女でさえ言葉を失っているのだ。

　すぐにりりぃが現れ、ヴィシュクラトーが現れた。アジアンと踊り羊も御所に足を踏み入れた。それから、モーグとエヴァンジェリンも。皆、地獄の帝王に見入っている。圧倒的という表現すら軽すぎて足りない存在感だ。目をそらすことなどできはしない。何か考えることすら難しい。正直、彼も寸時、目的を忘れていたほどだ。
「──りりぃ！　ヴィシュクラトーっ！　にゃーにをぼけぇーっとしておる……！　やつが動くぞ……っ！」

　何か兆きざしがあったわけではない。だが確信めいたものがあった。御所全体が揺らいだ。

にぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

げぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん
んん

めぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ
えええええええええええええ
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇええええええええええ
えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ

44　彼

　青い炎にのまれ、呼吸も満足にできない、互いに支えあい、一歩一歩、いや半歩ずつ、もう何のために、なぜこうして足を進めているのかわからない、ただ止まることはできない、立ち止まったら自分の、自分たちの存在自体が、消されてしまうのではない、それどころかたぶん、なかったことになってしまう、会えなくなってしまう、彼に、カタリさん、彼との出会いがなかったことになってしまう、それはいやだ、絶対にいやだ、彼に会いたい、もう一度だけでいいから会いたい、会って伝えないと、あなたに会えてよかったと、あなたに出会わなければ知らずにいたかもしれないことがたくさんあったと、わたしは器用じゃないから、もっとこうしたい、ああしたい、こんなことをしてあげたい、あんなこともしてあげたい、そう思うだけでちっともできないけれど、本当に、あなたのためなら何だってできるのだと、わたしの命でも何でもあなたに捧げられるのだと、あなたに伝えたくて、それだけはどうしてもしないといけないから、よろよろと、じりじりと這はい進むようにして、とうとうそこを抜けた。突破した。アーニャ・クルチバは昼ラン飯チタ時イムの祝花ノリカという女やボダダグという男と身体を預けあって歩いていた。皆、息をのんだ。一斉に。

　そうじゃない。息が止まった。打ちのめされた。声？　叫び声？　わからない。とにかく何かを聞いたように思う。そして、震動。ぐちゃぐちゃになる。肉体が。頭が。心が。こねられる。丸められて、押し潰される。ああ。ここは。無。何もない。底の、底

の、底。何もないのに、黒い巨人がいる。にんげんめ。人間め、とあの巨人が言ったのだ。誰も彼も這いつくばっている、転げまわっている。カタリさん、カタリさん、カタリさん。アーニャは彼の名を呼ぶ。アーニャはわかっている。今、自分を救ってくれるのは彼の名前だけだ。彼はいつだって彼女を助けてくれる。カタリさん。強く、強く、強く、アーニャは祝花を抱きしめる。ボダダグを抱きよせる。ファニー・フランクが旗を引っかぶっている。その軍師ジャン・スタンバックがファニー・フランクの背中を叩いている。総長代理が何か怒ど号ごうを発している。仮面の巨漢リキエルは伏ふして拝んでいるかのようだ。悪魔を名乗るサイケングレンマイセルヒもうずくまっている。ＺＯＯのピンパーネルはハニーメリーを庇かばうようにしゃがんでいる。飛フエイ燕ヤンが恐るべきおぞましい力を振りはらうように「ン
ナァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
……ッ！」と叫んでユリカ・白雪を抱き起こした。アーニャは目を凝らす。気のせいかもしれない。空耳かもしれない。でも、聞こえた。たしかに聞いたのだ。彼の声を。ああ。いる。こっちへ向かってくる。見間違えるはずがない。「──カタリさん……！」

45　鏡像

「アーニャちゃん……！」彼女の姿を目にした瞬間、カタリはスーパー・カタリとなって跳とび起き、駆けだした。一瞬前まで身動きがとれないどころか叩き伏せられていたのだ。身体は重い。思うようには動かない。それでもスーパー・カタリは進んだ。ＳＩＸのおかげで地雷原を越え、海のような青い炎を通り抜けて、ここまでやってきた。ここがどこだかは知らないが、わかっていたことがある。ここまでくれば、必ず仲間たちに会える。そして、アーニャ。アーニャ・クルチバ。アーニャちゃんにも。ほれ、見てみい。そのとおりやったやないか！　どや！　どないやねん！　どや……っ！　スーパー・カタリはアーニャめがけて無のような闇を突き進む。アーニャもこちらに気づいている。スーパー・カタリを見つめている。スーパー・カタリの名を呼んでいる。いや、スーパーはつけとらんけども。駆けよって、思いっきり抱きすくめるつもりだ。上も下も右も左もよくわからないが、彼女がいる。彼女がいる方向へ進めばいいのだ。問題ない。あとどれくらいだろう。わからないが、関係ない。彼女はそこにいる。スーパー・カタリの目

が彼女の姿をちゃんと、しっかりはっきりとらえている。「──アーニャちゃん！」「カタリさん……！」

　だめ、と言うふうにアーニャの口が動いたように見えた。ダメ？　何がダメなん？　ダメなわけないやんか。「──はっ……」殺気。カタリは振り向いた。いる。何か。無の闇からせりあがる。人の形をした──見覚えがある。それは……それは。「──はぁぁ!?　わしやないか……!?」そんなアホな。だがしかし実際、それはカタリだ。カタリと瓜うり二つで、カタリと同じように変形斧おのを持っている。その斧を振りおろす。カタリが、カタリに向かって。「だ……っ」カタリは右方向に身を投げだしてカタリの斧をかわした。よけきることはできなかった。左の上じよう腕わんをザックリ斬られた。カタリは膝立ちになりながら変形斧を抜く。カタリの斧をカタリの斧で防ぐ。撥はね返す。あかん、とカタリは思う。左腕がよう使われん。それに対して、カタリは両手に一本ずつ変形斧を持っている。二刀流ならぬ二斧流。カタリは一本の斧で二斧流のカタリに対抗しなければならない。「──うなあっ、ややこしいわい……！」カタリはとりあえず回避に専念しようとした。カタリにしては弱気な選択だ。それがよくなかったのか。一撃。二撃目をよけそこねて、左肩に食らった。鎖さ骨こつまでいったか。「カタリさん……！」アーニャちゃんが呼んどる。そっちを見る余裕がない。カタリが攻めてくる。攻めよせる。反撃。無理や。でけへん。強いやん、わし？　せやけど、わしがわしにやられてどないすんねん。カタリは横っ跳びして逃げる。意識が朦もう朧ろうとしそうだ。あかん。しっかりせいや。「──死んでたまるかい、ダァホ……！」

46　幻じゃない

「何です、これは」と猫が言う。猫の目の前には球体がある。その球体は鈍にび色いろで、何本かの細い溝みぞが見える他には何の飾り気もない。ただの球体だ。「──ぼくじゃないですか」

　球体が転がってくる。猛然と。猫は球体を跳び越えてかわす。球体は急停止して逆回転し、猫に躍りかかってくる。猫は走る。球体は追いかけてくる。「たっ、助けて……！」

「猿さる真ま似ねとはな……！」ディオロットがディオロットを真っ二つにするところを、猫は目撃した。ディオロットだけではない。ＺＯＯのロム・フォウもロム・フォウと至近距離で弓矢を撃うちあっている。狼と狼がお互いの首に咬みついている。秩序の番人の大男、ラッド・ワーノンもラッド・ワーノンと剛ごう剣けんを競っているし、チェス・ピードはチェス・ピードと、李イ童ドウ晏アンも李童晏と斬り結んでいる。昼ラン飯チタ時イムの者たちや、それ以外の生存者も同様だ。全員、自分自身を向こうに回してどつきあい、取っ組みあいを演じている。ほんのちょっとの間、彼らに気をとられていたら、球体に肉薄されていた。「──にゃっ……！」とっさに肉球をお見舞いして押し返す。だが、球体はすぐに体勢を立てなおした。そもそも球体は単なる球体だけに、体勢もへったくれもないのだ。「うわっ、ちょっ、やめ……っ」

「何をしてる」すんでのところでディオロットが球体を踏みつけてくれたので、どうにか助かった。もっとも、球体はディオロットの足の下でまだ身み悶もだえている。「……硬かたいな」

「そう簡単には壊れませんよ。だって、壊れちゃったらものすごく大変じゃないですか」

「俺はべつに大変じゃない」ディオロットは足をどけるなり、聖断罪の剣の切っ先を球体に突き刺した。球体はあっさり破壊されてしまった。「──幻術のたぐいじゃないのか」

「ひどいなあ……」猫は座る姿勢になって舌で舐めた前まえ肢あしで顔をぬぐった。「ぼくは幻覚なんか見ませんからね。そういう機能は備わってないので。よくわかりませんけど、きっとこれは攻撃ですよ。地獄の帝王の、ね」「だったら話は早い。やつを叩けば──」「あっ、ディオロット、後ろ……！」「む……！」ディオロットは振り返りざまに大懺カタスト滅刀ロフアーを解き放って、背後に出現したディオロットを捕ほ殺さつしようとする。だが相手もまたディオロットだ。大懺カタスト滅刀ロフアーを展開して大懺カタスト滅刀ロフアーを防ぎ止める。「──ええい……！」と、すかさずディオロットは大懺カタスト滅刀ロフアーを引っこめながら聖断罪の剣を繰りだした。なぜかもう一人のディオロットは聖断罪の剣を持っていない。ディオロットの聖断罪の剣がディオロットをぶった斬って、斬られたディオロットは無の闇に沈んだ。ディオロットがディオロットをしとめても、またディオロットが出てきた。ということは。「……おぐっ⁉」猫は横っ腹に球体の体当たりを食らって吹っ飛んだ。ディオロットの前にはすでに別のディオロットがい

る。「痛いとか、そういうのはないんですけどね、つい……！」猫は起きあがって球体を肉球で撥ね返し、駆ける。球体も素早いが、猫ほどではない。猫が全力疾走すれば、球体は追いつけないだろう。ともかく、ディオロットが対たい峙じしているディオロットは聖断罪の剣を持っていない。それに、再生もしない。無限の心臓を持っていないということだ。すなわち、完璧な複製コピーではないということなのか。とはいえ、そこらじゅうに二人ずついる者たちを見ても、どちらが本物かほとんど区別がつかない。「──厄介ですよ、これは……！」



47　ためらわないこと

　変な夢でも見てるのかな。そうとしか思えない。ようやく、せっかくあの青い炎の中をくぐり抜けたと思ったら、でっかい、あまりにもでかすぎる巨人がいて、声みたいなもので立っていられないほどの打撃をこうむった。それでもなんとか起きあがったら、目の前にマリアローズがいた。つまり、自分が。そいつはいきなりつかみかかってきて、マリアローズから劫ごう火かを奪おうとした。そいつはマリアローズなのに劫火を持っていなかったのだ。でも、こっちのマリアローズはへとへとどころじゃないほど疲弊しきっているのに、あっちのマリアローズは元気だった。劫火をとられずにすんだのは、秩序の番人のジョービー・カラマーが劫火をつかもうとしたあっちのマリアローズの手首を「せい！」と斬り落としてくれたからだ。十一番遊撃隊隊長のカラマーはいつもにやついている軽薄そうな男で、異名もたしか〝夜の遊撃手〟だし、はっきり言って好きになれるタイプじゃない。でも今回ばかりは本当に助けられた。「ありがと……！」マリアローズは礼を言いながら、マリアローズを劫火で突くふりをして斬りつけた。よけられるのは想定内だ。頭がこんがらがってしかたないが、あっちがマリアローズだとしたらこっちの考えることなんてお見通しだろう。こっちは動きが鈍いし。マリアローズとしては、だから、絶対的な差を利用するしかない。「──劫火、いけ……！」念じると、劫火から炎がチョロッと噴きだしてマリアローズを焼いた。しかも顔面だ。うっわ。熱そう。目を潰されて、マリアローズは尻餅をついた。かわいそうだけど、それどころじゃない。「っ……！」思いきって劫火を胸に突き刺すと、マリアローズが燃えあがった。「あっ、ああっ、うあぁっ、あああぁぁぁっ、たすっ、あああぁぁぁ……」「なん……っ」なんだよ、いったい。自分が焼け死のうとしている。かなり気持ち悪い。「──マリア……！」と、いきなりモリーに名を呼ばれた。そのときにはもうしがみつかれていた。誰に？　マリアローズだ。「──って、また⁉」振りほどこうとする。ダメだ。羽は交がい締じめにされた。それなら。自分から勢いよく後ろに倒れると、マリアローズを羽交い締めにしているマリアローズは「がっ」と後頭部や背中を床に打ったらしい。床。ここ、床があるんだ。どこもかしこも無みたいな闇一色で、何があるのかさっぱりだけど、硬い床が。もっとも、マリアローズはそれでもマリアローズを放そうとしない。カラマーはカラマーと刀を交えているし、モリーもモリーにのしかかられている。琺瑠フオールはどうだろう。わからない。一瞬、遠くにみんなの姿が見えたような気がしたんだけど。ＺＯＯの仲間たちが。そんな気がしただけかもしれない。マリアローズはマリアローズに羽交い締めにされたうえ、後ろから首を絞しめられている。劫火で、どうにかして。どうすれば。息、できないよ。無理だ。力が

入らない。クルル。そばにクルルがいる。クルルもクルルと組みつきあって、団子みたいになっている。ああ。誰か。お願い。お願いだから──助けてってて？　そればっかりじゃないか。「んううううぅぅ！　うううううううううぅぅぅ……！」マリアローズは暴れる。暴れまくる。他の相手ならともかく、敵は自分だ。僕が言うのもなんだけどさ。たいしたことないんだよ、僕なんて。「──んああああああああああああああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　ほらね。外れた。マリアローズの首から、マリアローズの腕が。弱っていても、ここぞというときには馬鹿力が出るものだ。マリアローズはマリアローズに肘打ちをくれて転がり離れる。即座に劫火を叩きつけ──ない。そうじゃなくて、マリアローズの顎をズガッと蹴る。殺しちゃダメだ。殺してしまったら、またマリアローズが出てくる。たぶん。

　失神しているマリアローズに念のため、もう一発お見舞いしておいた。カラマーがカラマーと刀をぶつけあっている。腕と刀を一体化させて鞭むちみたいにしなわせる使い方がそっくりだ。どっちもカラマーだけに互角か。いや。カラマーがカラマーの刀を絡からめとるように叩き落とした。素手になったカラマーは脇わき差ざしを抜こうとしたが、間に合わない。カラマーがカラマーの首を刎はね飛ばした。やっ──たのかな……？　てゆうかあれって、どっちが本物のカラマー？　やっぱり勝ったほうなのかな。「──違っ……!?」マリアローズはあとずさりしながら劫火を構えた。カラマーが飛びかかってくる。落ちつけ。落ちついて。落ちつくんだ。初撃だけでいい。防げ。「っ……！」劫火でカラマーの刀を弾く。というか弾かれたのだが、その瞬間にマリアローズは念じた。出ろ、炎。劫火が発した炎は蛇みたいにのたうってカラマーの腕を、顔を舐める。「うぅ……っ」カラマーが怯んだ。今だ。踏みこんで、劫火でカラマーの胴を突く。カラマーは身をよじってかわそうとしたが、劫火は彼の脇腹をえぐった。燃えろ。燃えた。傷口から燃え広がった炎が見る間にカラマーの全身を包みこむ。すごくない？　劫火。感心している暇なんかない。モリーがモリーに組み伏せられている。「──あ……」だけど、どっちがモリーなのか。見たところ、二人ともモリーだ。どっちのモリーに加勢すればいいのか。上になっているほう？　下になっているほう？　心情的には下になっているほうに手を貸したい。それでいいのか？

「マリア！」「マリア！」二人のモリーが一斉にこっちの顔を向け

た。「わたしのことはいいから！」「わたしのことはいいから！」表情もほとんど同じ。どうすれば。迷っている余裕はない。モリーはモリーに医術式を施ほどこしている。治す医術式を応用というか転用した、壊すための医術式だ。モリーとモリーは壊しあっていて、互いの手がふれているところが目も当てられないほどぐちゃぐちゃになっている。マリアローズは二人のモリーに近づいた。モリーからモリーを引き剝はがそうとしたら、上になっているモリーがマリアローズの左腕をつかんだ。一瞬で皮ひ膚ふがブシャッと爆はぜた。「──おまえか……！」マリアローズは劫火の柄えを握ったままの右みぎ拳こぶしでモリーを殴りつける。心がまったく痛まないと言ったら嘘になるが、躊ちゆう躇ちよはしない。突き放して、顎を蹴りあげる。もう一人のモリーはすぐさま起きあがってマリアローズの左腕を抱かかえこんだ。「すぐに治すから……！」「僕なんかより、自分の傷を──」そこまで言ったところで涙がこみあげてきた。よかった。モリー。こっちがモリーだ。カラマーはカラマーを斬ってからマリアローズに攻めかかってきたので、敵は自分のそっくりさんだけじゃなく、他の者にも敵意を持っている。だから、マリアローズに危害を加えようとしたモリーが偽者だ。本物のモリーなら、マリアローズを傷つけたりするわけがない。合理的な判断だとは思えるものの、不安はあった。万が一、違ったらどうしよう。取り返しがつかない。それでも、やるしかなかった。やってよかった。

「いいわ！」モリーはマリアローズの左腕を放して、頰ほおにキスしてくれた。おかげで気力もちょっと回復した。珐瑠。珐瑠も珐瑠と渡わたりあっているが、片方の珐瑠が明らかに劣勢だ。なぜなら、そっちの珐瑠は子供を抱だいたまま戦っている。もう一方の珐瑠は剣と鞭を持っていて、しかも、子供が珐瑠につかみかかろうとしているから、どっちが本物かは一目瞭然だ。「──相手が相手だけに、やりづらいんだけどさ……！」マリアローズは「ごめん……！」と謝りながらまず子供を蹴飛ばして、それから珐瑠の鞭を劫火で打ち払った。マリアローズが「二対一！」と言うと、珐瑠は即座に「ええ！」と答えて珐瑠の側面に回りこんだ。そのまま背後をうかがおうとしている。相手の珐瑠にしてみれば、当然、背中をとられたくないので、珐瑠を気にして立ち位置を変えつづけないといけない。どうしても防戦一方になる。それでも上手に間合いをとって、こっちに付け入る隙を与えないあたり、さすがは秩序の番人副長というべきか。カロリーナ・シェルベリがシェルベリと鍔つば迫ぜり合いをしている。早く珐瑠をなんとかして助っ人してあげたいが、焦るな。焦っちゃダメだ。がんばるのはいいけれど、背せ

伸のびをしてもろくなことがない。疲労だってある。いつもの自分じゃない。ただでさえ弱いのに、今の僕はもっと貧弱なんだ。弱くてもやれるだけのことはやる。心だけはへし折られない。踏んばれ。踏んばるんだ。踏んばりつづければ、仲間がこの状況を打開してくれる。必ず。絶対。僕はそう信じてる。

48　弱いから

「──しつこいんだヨ……！」アルカーディアで串くし刺ざしにしても、ジャシュギシュで丸のみにしても、タナトゥスの黒こく翼よくで斬り裂いても、ウルクハンドで蹴り砕いても、すぐさま無の闇から生みだされて彼にとりすがろうとする。それは彼自身だ。何も身にまとっていない、やせっぽちで、青白い肌の、無力な彼が、他になすすべを知らないのか、ただ彼にすがりつく。構わなければいい。いちいち殺す必要はない。振りきって放置すればいい。わかっている。頭では。それなのに、できない。殺せ。殺し尽くせ。不快。ただただ不ふ愉ゆ快かいだ。弱い、弱すぎる、彼自身。とるにたらないにも程がある。哀れだとさえ思う。何だ、これは。理解できない？　嘘だ。それが彼自身なのだと、彼は知っている。彼の本性。彼の正体。アルカーディアがいなければ、ジャシュギシュがいなければ、タナトゥスが、ウルクハンドが、そしてヤヌゥが彼の中にいなければ、彼などその程度のものだ。貧相でひ弱な生き物にすぎない。──だとしたら？　ボクが無力なら？　もしもボクに力がなかったら？　アルカーディアもジャシュギシュもタナトゥスもウルクハンドもヤヌゥもいなければ、ボクは……？　そんなボクに価値はあるのか？　ボクがこんなに無力なボクだったとしたら、仲間たちは？　そもそも、仲間ができただろうか？　誰かボクを顧かえりみる者はいただろうか？　無意味な問いだ。ボクはボクだ。ボクの中にはアルカーディアがいる。ジャシュギシュがいる。タナトゥスがいる。ウルクハンドがいる。ヤヌゥもいる。それがボクだ。それ抜きにボクというボクは成立しない。もしアルカーディアを失ったら？　ジャシュギシュを、タナトゥスを、ウルクハンドを、ヤヌゥを失ったら？　考えても無駄だ。愚にもつかない仮定だ。これはボクじゃない。違う。ボクじゃない。こんな無力な役立たずはボクじゃない。だからボクはボクを殺さないと。ボクはボクを殺す。ボクを殺す。ボクを殺す。ボクを殺す。ボクを殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺すそれが自分の弱さだと気づくまで殺す。──そうだ。これこそが弱さじゃないか。

「ボクは、弱い」彼は無力な彼の頭を彼の右腕のふりをしているアルカーディアで、彼の右手でわしづかみにする。薄青い彼の瞳が彼を凝視している。彼は両手で彼の右手を引き剝がそうとしている。

できっこない。この右手は生身の彼とは違う。力強い。「──弱いボクに価値がないことなんてわかっている。ボク自身には固有の価値なんてない。だからといって、ボクがボクであることをやめるわけにはいかない。ボクは弱いボクを引き受ける。そのうえで、強くいられるのなら何だってするサ。今のボクには力が必要だからネ」

　彼はジャシュギシュが擬ぎ態たいしている左手で無力な彼の両腕を引きちぎる。両脚をねじ切ってしまう。無力な彼はこれで文字どおり手も足も出せない。彼は苦く悶もんする無力な彼を放り投げる。塵ゴミのように。ベティ。ベティはベティと魔術を撃うちあっている。閃光の魔女然しかり。ＺＯＯのサフィニア然り。踊り羊も、モーグ、エヴァンジェリンも然り。キング・グッダー、りりぃも自分自身と熾し烈れつな争いを繰りひろげている。ヴィシュクラトーは真珠色の竜りゅう身しんとなって同じく竜身のヴィシュクラトーと骨肉相食はんでいる。ここは何だ。どういう場所なのか。広さがまったくわからない。こうして踏みしめているから、床があることは間違いないが、上下の感覚が曖あい昧まいだ。距離感がどうもつかめない。遠くにダリエロたちがいる。ＺＯＯの者たち。秩序の番人のヨハン・サンライズ。あれはＳＩＸだろう。そして、マリア。マリア、マリア、マリア。マリアローズ。でも本当に遠くなのか。小さく見えるので近くはないはずだ。それにしては、やけにはっきりと見える。右のほうか。左のほうか。それもよくわからない。ただ、中央に巨人がいる。異形の巨人が。巨人はそこにいながらにしてこの場を占めている。あれがおそらく、源だ。根源だ。あれをどうにかしないかぎり、この事態は覆くつがえせない。ならば、そうするだけじゃないか？　誰がやる？　もちろん、ボクが。ボクがそれをなす。ボクは弱いが、ボクには力がある。力はいったい何のためにある？　使うためだ。マリア。みんな。ボクはやる。これはそのための力だ。

「ウルクハンド、ボクを覆え」命じれば、黒い繊維状の物体がただちに彼の体表を覆い尽くす。爪つま先さきから頭頂まで。顔すらも。繊維の隙すき間まから青い輝きがもれている。ああ、億万のまたたく瞼まぶたと瞳の魔物よ。ウルクハンドはただ覆うだけではない。体内に浸透して彼をつくりかえる。化物に。「──アルカーディア、ボクの矛となれ」命じれば、右腕が黒い管の束となってそれがのび、どこまでものびて寄り集まり、縒よりあわされて、長い、長大な矛となる。「ジャシュギシュは、ボクの盾に」命じれば、左腕が巨大な顎門あぎとと化して大口を開け、それが彼を守る盾となる。「タナトゥス。ボクの翼に」命じれば、彼の背中から黒翼が生

えて羽ばたく。「──ヤヌゥ。キミは控えていろ。出番はまだだ」彼の腹の奥底でヤヌゥが唸っている。ただ抗議するように唸るだけで、何もできない。彼には逆らえない。彼は暗黒の魔人と成り果てた。それはなんと奇怪な、なんと見苦しい、なんと醜悪な、なんとおぞましい姿だろう。ふさわしい。あの巨人に挑むには。彼は弱者だからだ。弱いから、強きをまとう。待っていて、と彼は胸の裡うちで皆に声をかける。ボクがあれを止める。打ち砕く。答えは待たない。自分自身で答えを出すために、魔人が飛びたつ。巨人めがけて飛んでゆく。巨人。異形の巨人。地獄の帝王よ。さあ、こっちを向け。ボクを見ろ。ボクがキミを討つ。キミを滅ぼしてやる。魔人は帝王に迫る。十年にも感じられる一秒を翔かけて帝王に近づこうとする。帝王がこちらを向く。闇に覆われた頭部を振り向かせる。

　そして、地獄の帝王が目を開けた。今まで帝王は瞑めい目もくしていたのだ。その、目。双眼。帝王の目は二つ。しかし。二つでありながら、二つではない。二つにはとどまらない。二つの眼がん窩かに瞳、瞳が。万か、億か、兆か、とにかく数えきれない瞳が。それらすべてが彼を見つめている。彼を見つめながら、ありとあらゆるものを見ている。おびただしい数の視線が彼を貫く。彼以外のすべてを射い貫ぬく。その衝撃たるや。打撃たるや。魔人の彼が、ただ見つめられただけで木こっ端ぱ微み塵じんになった。そう感じずにはいられなかった。この場所全体が粉微塵にされた。無の闇すらも。流れゆく時間さえも。これが地獄の帝王か。見るだけでこれか。彼は自分自身を見失っている。自分はここにいるのか？　ボクはどこに？　自分を取り戻すには、細胞から構築しなおさなくてはならない。だったら、それをやろう。やってみせる。「──ボ……クは……ここに……いるぞ……地獄の……帝王……！」声を出す。ボクはここにいる。飛べ。魔人のボクよ。帝王に攻めかかれ。この矛を帝王に突きたてるんだ。地獄の帝王に風穴をあけてやる。その巨きよ軀くに。矛よ。帝王を。帝王が今度は口を開ける。かあああああああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ

　声じゃない。それは声なんてものじゃ。音ですらない。それは損そこなうものだ。打ちすえるものだ。引き裂くものだ。叩き壊すものだ。挽ひき潰し、どこまでも潰し尽くすものだ。

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□……！」

　声にならない悲鳴が彼の身体中から発せられる。自分の存在が小さく、小さくなる。もうすぐ消えてしまう。何も残らない。それでも彼は止まらない。地獄の帝王めがけて突進する。この矛は蟷とう螂ろうの斧ですらないのかもしれない。かまうものか。彼の盾は、黒翼は、ひしゃげて原形をとどめていない。それがどうしたというんだ。彼は矛を突きだす。もう届く。だが矛の切っ先は帝王にたやす撥はね返されてしまう。いや、撥ね返されるどころか、ふれることもできなかった。ふれる前に、矛だけではない、彼自体が吹き飛ばされた。ウルクハンドが飛び散るように剝はがれる。彼の生身があらわになる。まだだ！　彼はウルクハンドをかき集める。ウルクハンドをまとい、魔人と化す。アルカーディア、ジャシュギシュ、タナトゥス、まだだ。ボクはまだやれる。魔人はふたたび地獄の帝王へと突撃する。矛を突きだす。ふれる前に弾かれる。まだだ！　彼は飛散したウルクハンドを、アルカーディアを、ジャシュギシュを、タナトゥスを再結集させる。魔人となって、地獄の帝王へと。矛を突きだす。ふれる前に砕かれてしまう。まだだ！　裸の彼が魔人となる。地獄の帝王に突貫する。矛が壊れる。盾が破砕される。彼は頭から帝王に突っこむ。頭突きだ。撥ね飛ばされそうになる。させない。踏みとどまる。退ひかない。退くわけにはいかない。押す。押せ。押すんだ。押せ。押しきってやる。「──ツゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
……！」

49　止められない

「……っ⁉」ユリカは極クライ限マツク九スナイ手ンポ棍ールでユリカを殴りつけようとしていたのだ。空振りした。防がれるか、受け流されるはずだったのに。ユリカが消えてしまった。「──どういうことなの……？」「ユリィィィ……ッ！」飛フエイ燕ヤンがぶつかってきて、抱きあげられた。「きゃあっ⁉　ちょっ、飛燕──」「ダイジョブかよユリィ⁉　いきなしオレとバトッてたオレがいなくなっちまってよォ！　相手がオレだけにベリィー強かったモンだ

から──イヤ、言い訳だよなこんなの──」「アジアン……！」と仮面を被った巨漢が怒鳴った。ユリカは巨人のほうに視線を向けて、息をのんだ。飛燕が「オッ──」と声をもらした。巨人が。いつの間に。なぜだか心がぺしゃんこに押し潰された。巨人が。巨人が立っている。

　これまでは巨人の大きさや様子、巨人がこの空間の中心にいることはわかっても、巨人と自分との位置関係はあやふやだった。しかし今は違う。ユリカは、ユリカたち、人間全員が、巨人に見おろされている。巨人の頭部は明確にユリカたちの上、遥か上にある。何かが落ちてくる。まるで舞い散る花びらのように。何か、じゃない。あれは人だ。アジアン。アジアンは巨人の足あし許もとに落ちた。仮面の巨漢が走る。サイケングレンマイセルヒが、ボダダグが、祝花ノリカがつづく。「待って……！」とアーニャ・クルチバが祝花を引き止めようとする。そうだ。気持ちはわかるが、あの巨人に近づくのはどう考えても、考えなくても明らかに危ない。危険すぎる。「飛燕！　止めないと……！」「──オオォッ!?　つってもよォ……！」飛燕はそう言いながらもユリカを抱いたまま駆けだしたが、とりあえず下ろしてほしいし、止めても無駄かもしれない。仮面の巨漢やサイケングレンマイセルヒ、ボダダグ、祝花だけではないのだ。昼ラン飯チタ時イムの面々があちこちから彼らの頭領マスターのもとへと駆けつけようとしている。カタリがいる。トワニングがいる。きゅーがいる。トマトクンが、ロム・フォウが、アルファがいる。マリアローズがいる。サフィニアも。秩序の番人の人たちがいる。昼ラン飯チタ時イム以外はたいてい皆、巨人を見上げている。──と、巨人の逆の腕より倍ほども太くて長い右腕がボコギュコギュコボコと盛りあがったり引っこんだりして、あっという間に形を変えた。飛燕が足を止めた。「──アァッ!?　ンだ、アレ……ッ!?」

50　エクストリーム

「オイオイィィ……ッ！」ＳＩＸは両眼を瞠みはった。いきなり自分の分身みたいな出来損ないと戦わされ、それが唐突に終わったら地獄の帝王が立ちあがっていて、その右腕が変容した。あるいは変形、と言うべきか。それはいわゆる腕とは異なる。兵器だ。彼はその方面にくわしくないのでよくわからないが、電磁投レール射砲ガ

ンを搭載した戦車やら、榴弾砲や地対地ミサイルや地対空ミサイルなどの重火器、それから軍艦などを寄せ集めて無理やり合体させたような代物だ。何しろ、大量の地雷を埋うめて地雷原で行く手を阻はばもうとするような手合いだから、こんなことがあってもおかしくはない。そんなふうに納得するしかないということか。さっさと納得して、対応すべきだ。彼はそばにいるベアトリーチェの手首をつかんだ。ヨハン・サンライズと目があった。「──攻撃がくる！　飛び道具だよ！　よけるんだ……！」「飛び道具……」ヨハンは帝王の右腕に目をやった。その直後だった。きた。始まった。「あっ……」とベアトリーチェが言った。百の、千の、ひょっとしたらそれ以上の兵器が一斉に火を噴いたのだ。榴弾が、ミサイルが、超大口径の弾丸が飛んでくる。というよりも、豪雨のように降ってくる。「くるんだ……！」ＳＩＸはベアトリーチェの手を引いて闇雲に走った。どこへ逃げればいいのか。どっちへ向かうべきなのか。見当もつかない。どうしたってもう逃のがれることなどできないのではないか。動いても突っ立っていても同じなんじゃないのか。彼一人ならじっとしているだろう。肉片一つ残れば、彼は生きのびられる。しかし彼女はそうはいかないのだ。砲弾が頭上に迫っている。彼は彼女を押し倒して覆いかぶさる。俺があなたを守る。残念ながらそんな台詞せりふは出てこなかった。いざとなると、上手にかっこつけたりなんてなかなかできないものだ。「ＳＩＸ……！」と彼女が彼の名を呼んだ。でも、それは本当の俺の名前じゃない。あなたには教えたね。俺はイチル。イチルっていうんだ。シブヤ・イチル。笑えるだろう？　ＳＩＸってのはさ。シブヤ・イチル・エクストリームの略なんだ。自分で自分につけたコードネームみたいなものさ。すごくかっこわるいだろう。こんなふうになっても、本当の俺はただのイチルなんだ。手ひどく傷つけたあなたに叶かなわぬ恋をしたりする馬鹿な男なのさ。しごく単純な話で、煎せんじ詰つめればあなたが好きだから、俺はあいつらが許せない。あなたを紛まがい物だなんて呼ぶあいつらとは相容れない。あいつらにそんなことを決める権利はない。誰よりも一生懸命きらきらと生きているあなたを否定なんてさせない。絶対させない。俺はあなたを守りたいんだ。できることなら、あなたが守りたいと思っているすべてのものを。でもそんな力、俺にはないから、せめてあなたを。砲弾が炸裂する。俺はあなたを守る。

51　虹の威力

「ロム・フォウ！　アルファ！　死ぬなよ……！」彼は叫びながら降りしきる砲弾の雨の中を突っ走る。アジアンが帝王に頭突きをかますところを彼は見た。その瞬間、複製コピーたちが消滅した。やはり、やつだ。帝王を攻撃するしかない。おそらくアジアンの一撃は蚊に刺された程度の打撃しか帝王に与えなかっただろうが、彼には手段がある。この剣。聖断罪の剣。ソオルがくれた。ソオルはもともと神だ。管理者だった。管理者の組成は他の存在とは違うらしい。地獄の帝王もまた神の一味、管理者だったという。ソオルの武器なら帝王を滅めつせられる。彼は大懺カタスト滅刀ロフアーを展開して砲弾を防ぎつつ、跳ぶ。全力で。「──ヌウウウウウウウウウウウウウウウウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！」

　帝王。地獄の帝王よ。食らえ。食らいやがれ。俺は大量のデイ死の上オロに立つ者ツト。死をもたらす者。死しかもたらさない厄介者。疫病神。堕おちた神の貴様を俺が看み取とってやる。聖断罪の剣が七色の輝きを放つ。虹の光が神狩がりの巨剣となる。彼は振りあげる。あまりに巨大な帝王の左脚から斜めに斬り上げる。こんなものか。斬れて──帝王が、消えた。

52　9割

「え…………」生きてる？　僕？　生きて……るのかな？　生きてるっぽい？　実感はない。なんかめちゃくちゃな爆発がそこらじゅうで起こって、モリーと一緒にどうにか避さけようとして、たぶん転んだか何かして、爆風に煽あおられて──でも、平気だった？　そうじゃなくて、モリーのおかげだ。モリーがマリアローズを医術式で治療してくれて、今は自分を治している。「モリー！」「──ええ、もう大丈夫。それより……」「うん」一瞬前までしっちゃかめっちゃかだったのに、なんで突然こんなに静かになったのか。あちこちに死体や死体の一部らしきものが転がっていたり、倒れて呻うめいている人がいたりもするけれど、それにしてもこれは。「──てゆうか……」やつがいない。巨人が。いなくなった。さっきまで巨人がいたところには、トマトクンが。「もしかして……やった──

の……？」

　本気でそう思ったわけじゃない。半信半疑どころか二割、いや、一割も信じていなかったし、期待してもいなかった。これでもけっこうな数の修羅場をくぐってきたので、そのくらいのことはだいたいわかる。でも、じゃあ敵はどこに……？　マリアローズはあたりを見まわした。やっぱりっていうか、なんていうか。「──やめてよ、増えるとか……」

　方角なんてわからないが、マリアローズから見て右前方に一人、左前方に一人、それから右後方にも一人、左後方にも一人。ぜんぶで四人。たぶん、最初の巨人よりは一回りか二回り、もっとか、とにかく小さい。そうはいってもかなり大きい巨人が四人もいる。マリアローズたちは巨人に取り囲まれている。しかも、巨人たちはそこに立っているだけじゃない。四人とも歩きだした。近づいてくる。「や、ちょっと待っ……」そんな四方からこられたら、逃げ場が。いやそんなことはない。冷静になれ。あの巨人たちはでかい。でかいからこそ、小回りはきかないはずだ。巨人と巨人がぴったりくっついているわけでもないし、脚と脚の間をすり抜けたりもできなくはない──ような気がする。なんにしても、まずは巨人たちの背後に移動することだ。前にいるのはやばい。怖すぎる。マリアローズはモリーや比較的近くにいた琺瑠フオールやシェルベリらに声をかけ、巨人に向かって進もうとした。もちろん、おっかない。恐ろしくてしょうがないが、巨人から離れるにはいったん巨人に接近してすれ違うしかないのだ。そうしようとしたら、巨人たちが足踏みを始めた。身体からだが跳はねあがる。「う、あっ……」とても走れない。地面が。「揺れ……っ!?」いや、そんなものじゃない。地面がのたうっているかのようだ。にんげんめ！　これは巨人の声なのか。にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！

53　空の上

「見えた……っ！」チビグッダーは空中で舌舐めずりをした。ディオロットが御ご所しょ中央にいた帝王を聖断罪の剣で一撃して、消した。むろん本当に消えたわけではないだろうが、そこにはいなく

なった。そして、御所の四方に四人の帝王が現れた。その結果、御ぎよ座ざがあいた。黒々としていて艶つやがなく形も定かではない御座の、ちょうど帝王が腰かけていた場所に、それはあった。硬く口を閉ざしている、扉。扉には印が刻まれている。誰にでも見えるわけではない。おそらく、帝王にすらその印は見えないだろう。神々にさえも。その印が見えるのは彼らだけなのだ。扉を開けねばならない。だが、この状況では無理だ。やはり帝王を始末しなければ。「──ヴィシュクラトー、りりぃ、やるぞ！　一人ずつ始末するのだぁっ！　ディオロット、うぬも手伝え……！」『よいでしょう』「貴様の命令など聞かない……！」竜りゆう身しんのヴィシュクラトーが一人の帝王を、りりぃも文句を言いながらもう一人の帝王を強襲する。ディオロットも動こうとしている。チビグッダーは残りの一人に躍りかかった。帝王の中心を目標点にして超発熱させる。「ぐっだあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　だいなまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい……っ！」

　帝王の胸が、腹が、ブゴボゴブゴッといびつに膨らんだ。しかし収まって、それだけだった。帝王が億兆の瞳を宿した双眼でチビグッダーを睨みつける。その盛りあがった右肩が形を変えて、角のようなものが突出した。角というか触手だ。急速にのびて、チビグッダーをとらえようとする。「──つぇぇい……っ！」チビグッダーは後退しながら目から光線を発して触手を焼き切ったが、帝王が今度は右手をのばしてきた。右腕自体がのびて、逃げるチビグッダーに追いすがろうとしている。「にゃらば……！」チビグッダーはあえて急停止した。帝王の右手につかまる。握りしめられた。帝王はそうしてチビグッダーを自分の口の中に放りこんだ。帝王の口こう腔こう内は黒く、ぬらぬらしていた。のみこまれ、吸いこまれる。送りこまれる。胃いの腑ふへと。地獄の帝王にそんなものがあるのだとしたら。チビグッダーは笑った。「にゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ……っ！　ぐっだああああぁぁぁぁぁぁぁ！　すぅぅぅぅぱぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　のぉぉぉぉぅぅヴぁ……っ！」

　輝け。輝くのだ。どこまでも輝け。これこそ〝原アトミ子ツクの・マ極キシマ大ム・魔ドレ術ツド士スター〟キング・グッダーが編みだしたる魔術の最高峰〝超スー新パー星ノヴア〟。彼自身が超々高熱源体となって周囲一帯数百kmを吹き飛ばしてしまう。威力がありすぎて、そうそう使える魔術ではない。だが帝王の体内でならばどうか。魔術が生みだしたエネルギーに耐えきれず、帝王の肉体がとうとう悲鳴をあげる。張り裂けて、ちぎれ飛ぶ。帝王な

きあと、残ったのは――チビグッダーのみ。

　ヴィシュクラトーが四し肢しで帝王を取り押さえてその鼻先で口を開け、真珠色の息吹ブレスを吐きかけた。至近距離から強烈な息吹ブレスをまともに浴びて、帝王の身体はどろどろに溶とけた。

　りりぃが幾いく千の残像をばらまきながらアルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス〝緋ノ魂滅〟の双刀で帝王を斬り刻んだ。

　ディオロットが聖断罪の剣で帝王を斬り伏せた。

「どういうことにゃのだ」チビグッダーは肩で息をしながら呟いた。「……簡単すぎる」

「どういうことも何も――」閃光の魔女がわざわざちょうどチビグッダーを見おろしやすい位置まで飛んできて、遠くのほうを指さした。「ああいうことなのではなくて？」

「……にゃるほどにゃ」チビグッダーはふんと鼻を鳴らした。つまりはそういうことだ。

　始末したはずの地獄の帝王が遥か彼方かなたから歩いてくる。一人も減っていない。四人いる。ようは、始末できなかったということだ。帝王たちの足どりはゆったりしたものだが、見かけよりそうとう速い。このままでは、あれよあれよという間に肉薄されるに違いない。

「あら。サフィニアとベティがいないのだわ」魔女は舌打ちをした。「勝手にわたくしから離れて下げ賤せんの屑くずどもを助けにゆくなんて、まったくしょうがない。まあ結局、許してあげるのだけど。わたくしったら、愛いとしい者には甘いのよね。わたくしの無限にある長所のうちの一つなのだわ。一つといえばグッダー、わたくしに一つ考えがあるのだけど――」

「にゃんだっ！　早く言えっ！」

「あら。人の話を聞く態度ではなくってよ」

「いいから言うのだっ！」

「せわしないわね。落ちつきなさいな。いいわ。教えてあげる」魔

女はくるっと人差し指を回してみせた。「──あれを四体いっぺんに、同時に倒すのよ」

「同時に、だとぉ……？　根拠はっ!?」

「ないわ」

「胸を張って誇らしげに言うにゃっ！」

「しいて言えば、勘なのよ。さあ、やるの？　やらないの？　どうするのかしら。やるのなら、わたくしが一体引き受けてあげてもよくってよ」

「クルオは遠慮しとこうかなあ」踊り羊がどこからか現れて、首をかしげた。「ああいうおっきいのをどうにかする魔術は、そんなに好きじゃないからね。好きじゃないだけで、できなくはないけど」

（うむ。我も遠慮しよう）（そうですね、お師様。わたしたちの魔術は、このようなくだらない破壊のためにあるのでは本来ありませんから）モーグとエヴァンジェリンはプラスマル・ボディを薄うすく広げてそのへんに漂っている。

「……うぬら！」小こ癪しやくな魔術士どもめ。チビグッダーは「にゃはっ」と笑った。「よかろう、魔女よ。うぬの進言、容いれてつかわす。四人の帝王を同時に討うつのだ。一人は余が、もう一人は魔女、うぬが、さらに一人はヴィシュクラトー、最後の一人はディオロットに任せる……っ！」

「なぜあたしじゃない！」とりりぃが異論を唱えた。

「愚か者がぁっ！」チビグッダーはりりぃを罵倒した。「そんにゃこともわからぬのか、りりぃ！　うぬは一撃が軽い！　タイミングをあわせねばにゃらぬこの作戦には不向きにゃのだっ！　──始めるぞ……！」

　チビグッダーと魔女、ヴィシュクラトーは飛んでゆける。ディオロットの走力も暴風を上回る。にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　にんげんめ！　地を震わせて歩いてくる帝王の頭上に達すると、チビグッダーは振り返って他の三人を確認した。

「三秒後だ……！」とチビグッダーが宣言した途端、帝王が跳躍した。チビグッダーをつかまえるつもりだ。チビグッダーはその腕うでをかいくぐって、目から発した光線で帝王を牽けん制せいする。

　一。

　二。

　今だ。

　帝王の懐ふところに飛びこむというか、突っこんだ。チビグッダーは流星となって帝王の胸に体当たりした。「──ぐっだああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　めておっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ……！」「滅びてしまいなさいな……！」「ＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ！」「でえええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇいやああああああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　帝王が爆裂四散する。溶解する。無数の白光に切り刻まれる。斬ざん断だんされる。

　いったい何が起こるのか。予想などできるはずもない。敵は元管理者だ。地獄を生んだものだ。造物主なのだ。

　それにしても、こうくるとは。

　無の闇が退いてゆく。

　暗雲が晴れるかのごとく。

「にゃんと……」キング・グッダーともあろう者が呆気にとられて口をぽかんと開けた。



　これが。

　ここが。

　これが〝世界ワーの終ルドわりエンド〟の中枢、〝終わオーりのバー果てエンド〟だというのか。

　だだっ広い黒い床が、同じく黒い、数百本の鎖のようなもので吊りさげられている。どこに、何に吊られているのかはわからない。鎖は天に向かって、どこまでもどこまでものびている。天に。

　そう。

　天だ。

　空。

　見上げれば、空が広がっている。しかし、それはどう見ても地獄の空ではない。

　あの蒼そう穹きゆう。目に染みる青。

　あれは人界の空の色だ。

　振り仰がなくても、空。床と鎖のようなもの以外は、空。

　ここは空の上だ。

　空。

　彼らは空の上にいる。

　だが、本当にそうなのか。地獄ではないとしても、人界に似た異界なのではないか。いや、それはない。

　黒い床には穴があいている。円い、無数の穴が。

　そこから下が見える。

　大地が。

　あれはα大陸だ。間違いない。ちょうど真下にすり鉢ばち状の大ギガボ穴ロスがある。エルデェイニオンだ。間違いようがない。そこにサンランド無統治王国が、彼の王国があった。

　紛まぎれもない。

　ここは人界だ。

　床のあちこちに、黒い衣をまとった者たちが立ったり片膝をつい

たりしている。彼らは全員うつむいていて、その顔は見えない。人のような姿をしているが、もちろん人ではないだろう。

「……まさか──アーマン、だと……？」グッダーは呻うめくように呟いた。

　たしかに似ている。飾り気のない黒い長衣しか身にまとっていないが、彼らは悪魔グランヴ大公エリオンアーマンにそっくりだ。ただし何人もいる。何十人か、何百人か。床だけではない。鎖につかまっている者もいる。すごい数だ。ものすごい数のアーマンだ。アーマンだらけだ。

　アーマンたちが、痾ッ、痾ッ、痾ッ、痾ッ、痾ッ、痾ッ、痾ッ、痾ッ……と笑いだす。笑いながら、アーマンたちが顔を上げる。やはりだ。

　アーマン。

　どれもこれもアーマンだ。

　御ぎよ座ざがあったところに閉ざされた扉が横たわっていて、その上に黒い椅子が、あくまでも黒すぎるという以外は何の変哲もない、背もたれと座面と四本の脚という簡素な構造の椅子が置いてある。その椅子にもアーマンが腰かけている。

　前まえ屈かがみになって、膝で腕を支えるようにして両手を組みあわせているそのアーマンだけは、しかし、まだ下を向いている。違う。

　あれは違う、とグッダーは感じた。

　他のアーマンたちと同じ黒い衣を身にまとい、黒髪で、背せ恰かつ好こうも同一だが、あれは異なる存在だ。

　案の定だった。

　それは上半身を前傾させたまま、顔だけを上向けた。

　だが、それには──、

　顔がない。

漆黒の面を被っているのだが、その面には形というものがなかった。怒りの形相にも、悲しみの表情にも、喜び笑っているようにも、嘲あざ笑わらっているようにも見える。にもかかわらず、明確にそのいずれでもないのだ。

王たるキング・グッダーが使うべき表現ではないが、人智を超越している。

一次元の線が二次元の面を、二次元の面が三次元の立体を認識できないように、人にはそれを知覚しえないとでもいうのか。

それが首をかたむける。

「ようこそ、にんげんたち。挨拶が遅れてしまったね。でもその点については勘弁してほしいな。きみらはずいぶんぶしつけだったからね。本来なら歓迎すべきなのだろうが、なかなか難しかったのだよ。すまないね」

何か返すべきだ。

何を返すべきか。

何をすればいいのか。

止まる。

時間が止まる。静止している。

空。青い空。これは何だ。呪縛か。魔術のたぐいか。

力か。

これが、帝王の。

「初めまして。わたしが地獄をつくりだしその地獄を統すべる地獄のあるじ、地獄の帝王と呼ばれるものだよ。わたしの名はルシファ。ミカエル。ガブリエル。ラファエル。ウリエル。アナエル。サマエル。オリフィエル。ザカリエル。カマエル。ヨフィエル。ザドキエル。ラグエル。ゼラキエル。レミエル。セラフィエル。イェグディエル。バラキエル。スリエル。サラティエル。ザダキエル。アニエル。メタトロン。サンダルフォン。ラジエル。アルファルシアス。ベルドリアール。サタン。何でもいい。わたしのことは好き

に呼びたまえ。きみらのことは知っているよ。よく知っている。わたしの趣しゅ向こうは楽しんでもらえたかな。賢明な者ならば気づいたはずだよ。わたしがきみらのことをよく知っているということを。きみらがいずれここにくるだろうこともわたしは知っていたのだよ。予期していたのでも予知していたのでもない。わたしは知っていたのだ。賢明な者ならばなぜわたしが知っていたのか悟るはずだが、きみらにそこまで期待しているわけではない。とにかくわたしは知っていたし、知っているのだよ。きみらのうちの幾いく人にんかが何を望んでいるのかも知っているし、わたしはそれを阻はばむだろう。それをさせるわけにはいかない。わたしたちは知っていたのだ。きみらはここで潰ついえるだろう。この空の上できみらは消え去る」

54　違い

　帝王……？　これが？　地獄の帝王……？　ルシファ？　サタン？　これが？　理解できない。彼は、ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒは悪魔だ。帝王は造物主。すべての源。父の父たるもの。彼のすぐそばに、彼の頭領マスターが倒れ伏している。彼の仲間たちが頭領マスターを囲んでいる。黒い管のようなアルカーディアが、黒い鱗うろこのジャシュギシュが、タナトゥスの黒こく翼よくが、繊維状のウルクハンドが、宿主を守ろうとするかのように、頭領マスターにまとわりついている。しかし頭領マスターは動かない。薄目を開けて、ぐったりしている。果たして、彼の、彼らの頭領マスターは地獄の帝王に一いつ矢し報むくいたのか。そう言えるのか。それとも、すべて茶番だったのか。帝王の遊戯だったのか。余興にすぎなかったのか。それに付き合わされただけなのか。「ははっ……！」彼は半ばのけぞって額を押さえた。「とんだ侮辱ですよ、これは……許しがたい辱めだ。認められませんね。認めてなるものか！」何が。何が帝王だ。造物主だ。恐れ敬う心も感謝の念もない。微塵もない。あったとしても消し飛んだ。知ったことではない。彼には頭領マスターのほうが、仲間のほうが大切だ。造物主などいなくてもかまわないが、仲間はそうではない。いてくれなくては困る。大いに困る。

「ヨグ……⁉」カイに呼び止められた。「おい、てめぇ……！」ダリエロにも。他にも彼を制止しようする声がたくさんあがった。ご

めんなさい。内心で謝りながらも、彼は止まらない。しかし彼の頭領マスターがわずかに身を起こして「よせ」とかぼそい声で言った。そのときだけは彼の心が揺れた。だが結局、彼は飛んだ。無数の、色とりどりの蝶のごとき姿となって、黒い椅子に座っている帝王に押しよせようとした。彼は戦いが不得手だ。戦い方などわからないが、自分自身の全存在を懸かけて、頭領マスターの、仲間たちの、昼ラン飯チタ時イムの沽こ券けんを、誇りをかけて、相手を滅ぼす方法ならば知っている。理屈ではない。ただそれをなすのだ。彼はそうしようとした。帝王は動かない。こちらを見ることもしない。馬鹿にするな。侮あなどるな。ふざけるな。「──ふざけてなどいない」と帝王が言った。その瞬間、彼は凍いてついた。帝王が何をしたわけでもないのに、彼は今や平らな板と変わらない。変わらないどころか彼は板そのものだ。板は何もできない。ただそこにあるのみだ。帝王は依然としてこちらを見ない。組みあわせている両手の指を動かし、組みかえようとして、やめた。「侮ってもいない。馬鹿にしてもいない。ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ。〝道化ジエステのル・八大イヴ公爵エリオン〟アウトルマ・ファッルーカの息子よ。わたしとおまえたちとは違う。ただそれだけのことなのだよ」彼はむろん反はん駁ばくしようとした。彼の思いを言葉にしたかった。叶かなわなかった。そうしようとしたときにはもう、彼は粉々に砕かれていた。

55　反逆児

「く……っそ……！」と吐き捨てるだけか？　自分にできることは他にないのか。何もできないのか。ダリエロは歯を食いしばる。目の前で仲間が木こっ端ぱ微み塵じんにされたのだ。やり返さないでどうする。だが、できるのか？　青い右目から涙があふれ、黒い左目から血が流れだす。すぐそこにいやがるのに、打つ手がねぇ。アジアンの野郎はこの様ザマで、ベティさえやつに近づこうとしねぇ。サイケングレンマイセルヒだけだった。あいつだけが気合いを見せた。挙句、ああなった。何なんだ、この差は。やつが見上げるくらいでかいなら、まだ話はわかる。俺らと変わらねぇじゃねぇか。それなのに。駄目だ。やつの存在、やつの言ってやがること、正直、何一つわからねぇが、刃向かっても無駄だってことだけは完璧なまでにわかる。骨の髄ずいまで染しみとおる。この無力感。「……上等じゃねぇか」だからこそ、だ。これくらいじゃねぇと、

あらがう甲斐もねぇ。そうだろ。背負っていたオトミを下ろして、ダリエロは進む。脚が鉛でできた棒みてぇだ。「……だめよ」とベティが肩をつかむ。「うるせぇ」振りはらって、進む。臆病な塵ゴミ屑クズどもを押しのけ、かきわけて、やつに迫る。やつはこっちを見ない。気にしているそぶりもない。つけあがりやがって。

「つけあがってなどいない」とやつが言う。ダリエロは肘を上げ、踵かかとを浮かして、身体中に仕込んだ暗器をすべて、一瞬で出し尽くせるように準備する。「へっ……」「わたしとおまえたちとは違う。ただそれだけだ」とやつが生意気なことをぬかす。ダリエロは舌舐めずりする。「何だって違うだろうが。違わねぇものがこの世にあるかよ……？」そして飛びだそうとする。一瞬、サイケングレンマイセルヒが弾けるように破砕された場面が脳裏をよぎった。だからってびびってなんぞやるかよ。やつに躍りかかる。「──ダリエロ！」とベティが鋭く叫んだ。ダリエロはつい反応してしまう。左に跳ぶ。横合いから何かが突っこんできたのだ。アーマン。悪魔グランヴ大公エリオン。「──ちぃっ……！」ダリエロは転がって、黒い床を叩く。邪魔立てされた。動きだしたのだ。数知れない大勢のアーマンたちが。しかし、やつが音もなく黒い椅子から立ちあがって右手を顔面に押しあてると、アーマンたちは唐突に止まった。それから、やつと同じようにそれぞれの右手をおのおのの顔にあてる。面だ。見る間に不定形の黒い面がアーマンたちの顔を覆った。見分けがつかない。すべてのアーマンが地獄の帝王に化けた。「わたし」「わたしと」「わたしと」「わたしと」「おまえたち」「おまえたち」「おまえたちとは」「おまえたちとは」「おまえたちとは」「おまえたちとは」「おまえたちとは」「違う」

56　君と共に

「リンデ……！　リンデ隊長……！」ラッド・ワーノンは突進する。剛ごう剣けんを振るい、立ちふさがる帝王の面を被ったアーマンを斬きって、斬って、斬り進む。どこがアーマンだ、斬れるではないか、との思いは彼にはない。恥ずかしながら、秩序の番人として、義に身命を捧げた者として慚ざん愧きに堪たえないが、今の彼

は女のことしか頭にない。彼は幾いく多たの傷を負い、右目はまるで見えず、右脚を引きずり、左腕は思うように上がらない有様だったが、女がどこにいるのかはわかっていた。それだけはしっかりと把握していた。彼女のもとへゆかなければ。彼女のそばにいなければ。申し訳ない、申し訳ない、申し訳ない、誠まことに申し訳ない、俺は、俺は失格だ、もはや秩序の番人ではない、俺にはその資格がない、だが、今は、今はもう、今だけは、彼女のもとへゆかなければ。「リンデ、リンデ隊長……！　リンデ……！」アーマンにとりすがられたらはねのけ、左腕をつかまれてねじり折られてもかまわず、行ゆく手を遮さえぎるアーマンを叩っ斬って、斬り払って、撫なで斬りにして、とにかく彼女のもとへとゆかなければ。「──リンデ！　リンデ隊長……！　リンデ……！　俺はここだ！　ここにいる！　リンデ隊長……！　シャルロットォォォォォォォォ……ッ！」

「ワーノン……!?」彼女はもう羽根付きの兜を被っていない。絢けん爛らんたる金髪を振り乱して刀を振りまわしている。背後に誰かを庇かばっているのか。ユキシ・庚コウだ。ユキシは片脚を失っているようだ。あれでは刀を杖にして立っているだけでやっとだろう。「そこで待っていろ、シャルロット！　ぬうううあああああああ……！」ワーノンは走る。走れずとも走る。刀を棒のように扱ってアーマンどもをはねのけて走る。殴られても蹴られても走る。彼女はもうすぐそこにいる。不意に背中に灼熱を感じる。見れば、アーマンが短剣のようなものを彼の背に突き立てている。払いのけて、彼は走る。「ワーノン！」「どおおおおおうううりゃあああ……！」彼女にむしゃぶりつこうとしていたアーマンをぶっ飛ばして、彼女に組みつこうとしていたアーマンを蹴飛ばし、彼女を突き刺そうとしていたアーマンの長剣のようなものをその身で受け止める。アーマンを殴り倒して、彼は彼女に笑いかける。「シャルロット……！」「ワーノン！　あなたは……！」「すまぬ！　おまえのために、死ににきた……！」「ああ……！」「立てい！　ユキシ！」ワーノンはユキシを肩に担ぎあげた。「これで剣は使えよう……！」「──はい……っ！」「さあ、もう一暴れだ！　シャルロット……！」「ええ、死にましょう！　ここで、ともに……！」ワーノンは彼の女と背中をあわせた。とりあえず、敵に不自由することはないだろう。愛している。言葉はいらぬ。もう伝わっている。なんたる人生だ。悔くいはない。燃やし尽くそう。ともに最さい期ごまで。

57　そして僕らは

　考えるな。考えたって無駄だ。動け。劫ごう火かを打ち振るえ。劫火頼だのみだ。それでいい。最小限の動作でいいんだ。前には帝王の面をつけたアーマン。右を見ても帝王の面をつけたアーマン。左を見ても帝王の面をつけたアーマン。どこにでも帝王の面をつけたアーマン。アーマン。アーマン。アーマン。アーマン。アーマン。アーマン。マリアローズの後ろにはモリーがいる。子供を抱いている琺瑠フオールがいて、カロリーナ・シェルベリがいる。あとはアーマンばかりだ。アーマンしかいない。なんとか味方と合流したい。そのためにはアーマンの包囲網を突破しないといけない。アーマン。でも、こいつらは本当にアーマンなのか。違うよね。だって、斬れる。劫火の炎で燃やしてしまえる。焼かれると転げまわってそのうち消し炭になってしまう。弱い。とりあえず強くはない。面をつける前はアーマンに似ていたが、似て非なるものだ。量産型アーマンはアーマンのように異様じゃない。彼らは素手だったり武器を持っていたりする。たいていは短剣や剣、槍といったごく普通の武器だ。彼らは雑兵だ。数が多いだけだ。やれる。僕でも倒せる。倒せ。手当たり次第に倒してしまえ。それはさすがに無理。無理でもやれ。やれるだけやるんだ。やらないと。

「なんてこと……！」とシェルベリが叫んだ。思わず振り返ると、シェルベリは上のほうを見ていた。視線を追う。腰が、膝が抜けそうになった。この円い穴だらけの広大な床は黒い鎖のようなもので吊りさげられている。その鎖のようなものを伝って、帝王の面をつけたアーマンたちが下りてきている。次々と。蟻の大群みたいだ。気持ち悪い。やめてよ。下りてこないでよ。これじゃあ、いくらやっつけても無駄じゃないか。減らないじゃないか。「──う……っ！」帝王の面をつけたアーマンが飛びかかってきた。間一髪、その手から逃のがれたつもりだったが、髪をつかまれた。結ってあったのに、いつの間にかほどけてしまっていたのだ。「い、づっ……！」やばい。髪はやばい。劫火でそのアーマンを一突きする。アーマンは燃えあがったが、マリアローズの髪を放そうとしない。火は、劫火を持ってるから防げるけど。「くっ……！」マリアローズは劫火を引きよせ、刃はの根元のところで髪の毛を切った。たぶんひどい髪型になっている。もちろん、気にしている場合じゃない。アーマンはまだまだいる。どんどん押しよせてくる。いつまでがんばればいいんだろ。そんなことは考えるな。限界かもしれな

い。そんなふうに思っちゃダメだ。物事には限度ってものがあってさ。そんなことない。視野がずいぶん狭いな。耳が遠くなるって、こういうことなのかな。モリーが僕の名前を呼んでいるような気がする。大丈夫だよ、と僕は答える。うん。大丈夫。ちょっと疲れてるだけだよ。ただそれだけだから。本当に。

「マリア……！」サフィニア。サフィニアだ。ギュゥーンと飛んできて、雷光をばらまいた。アーマンたちが軒のき並なみ吹っ飛ばされ、そのあとでマリアローズは気づいた。自分が床に片膝をついていたことに。「しっかりして……！」サフィニアは稲妻を、藍色の炎を、白光を降らせてアーマンたちを薙なぎ倒した。「マリアは……そんなに、弱くない……！」

　買いかぶりだよ。でも。マリアローズは立ちあがる。そうだよね。僕は強くはない。ぜんぜん強くないけど、強くなれもしないけど、地味にけっこうしぶとい。少なくとも、サフィニアは、僕の大切な仲間は、大事な友だちは、そう信じてくれている。応こたえないでどうする。僕には仲間が、友だちがいるんだ。

「開きなしゃい、鵺ヌエノ血けちゆ涙ルイノ門モン……！」澄みきった声が響き渡る。ユリカだ。その手の中にある極クライ限マツク九スナイ手ンポ棍ールは真の姿を現していた。その名は〝影カゲ鵺ヌエ〟。かつて泰たい山ざんを荒らしまわった鵺たちの首領は古ふる鷲わし、餓が狼ろう、白びやつ虎こ、巨きよ猪ちよ、大おお猿ざる、妖よう狐こ、狂きよう熊ゆう、飛ひ竜りゆうの九変化をなして人々を幻惑し、拐かどわかし、殺戮し、喰らったという。その名を冠かんする棍は先端が幾いく股またにもわかれていて、斬ざん、砕さい、掛か、抉けつ、突とつ、払ふつ、打だ、流りゆう、弾だんの攻防動作を自在に行うことができる。ユリカは影鵺で帝王の面をつけたアーマンを斬る。アーマンを砕く。アーマンを引っかけて放り投げる。アーマンの肉を抉えぐる。アーマンを突き飛ばす。アーマンを払いのけ、アーマンを打ちのめす。アーマンの攻撃を受け流し、寄せくるアーマンたちを弾き返す。

「ユリカ……！」無双だ。ユリカ無双。最強だ。ユリカの最強伝説にまた新たな一行が書き加えられた。一行どころか何行も、何頁ページも。ユリカに比べたら、あんなのはおまけだ。

「ウォォォォォォォォォォォォォォォォラララァァァァァ……ッ！」

　飛フエイ燕ヤン。飛燕が何人もいる。何人っていうか、何十人も？　アーマンほどじゃないが、飛燕も多すぎ。八十四散乱打究極奥義〝我ウオウ無ーシユ双オン〟。大勢の飛燕がユリカを遠巻きにしている。ユリカを守っているのだ。守るだけじゃない。攻めている。アーマンたちを蹴散らしている。でも、アーマンはあまりにも多い。飛燕たちが討ちもらしたアーマンたちを、ユリカがしとめる。一人残らず。きれいさっぱり。そうやって二人でどんどんアーマンを駆逐して、こっちに向かってくる。この二人だけでもすごいのに、まだだ。もっと。もっとだ。

「もう弾が切れそう……！」ハニーメリーが笑顔で拳銃をぶっ放している。笑うようなシチュエーションじゃないのに、彼女は明るい。あるいは、そばに彼がいることも関係しているのかもしれない。砂色の元アッサシン。彼は疾風の殺人芸術家だ。これまでマリアローズは人間離れしていたり人間じゃなかったりする強者つわものを数えきれないほど見てきたが、それでも彼ほど美しく殺す者は一人としていなかった。美しいなんて言ってはいけないのかもしれない。でも、否応なくそう感じてしまうのだ。だからその殺人は芸術なのだ。

　ピンパーネルは疾とく速く殺す。しかしただ急所を一撃して終わらせるのではない。ピンパーネルには流儀がある。ばらす、という言葉がある。それだ。ピンパーネルは息の根を止めるよりも、ばらし、その結果、相手は死ぬ。ピンパーネルは手間を惜おしまない。雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を完璧に操作して、くりぬくように腕や首を斬り離し、顔部をこそげ落とすようにして露出させた脳を斬り刻む。面倒なことをいともたやすくピンパーネルはなしとげる。あくまで、疾く速く。無駄を無駄と見せない早はや業わざで。ピンパーネルはすべてを知っているかのようだ。どこをどうすればどのように壊れるのか。知り尽くしたうえでそれを行っているとしか思えない。単なる力ではないのだ。速度ではないのだ。知識ではないのだ。何もかもが完全に調和している。善悪なんか糞食らえだ。美しいとしか言いようがない。

　ユリカと飛燕、ピンパーネルとハニーメリーだけじゃない。その後ろには秩序の番人の死神羅ラ叉サもいる。あのお下げ髪がみはアーニャ・クルチバだろうか。「フレェーッ！　フレェーッ！」と旗を振りつつアーマンを蹴倒しているのは馬鹿陛下フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトだ。軍師ジャン・スタンバックの姿も見える。それだけじゃない。あの大柄で全裸に近い男。跳はね

まわり、くるくる回転して、アーマンたちを引っかきまわしている。ＳＩＸだ。ＳＩＸがいるということは━いた。やっぱり。ベアトリーチェ。リーチェだ。電光石火の剣技でアーマンたちを斬りまくっている。それから、あれは。

「魚うおぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら魚ぉら！　ずりゃぁぁ……っ！」

　声は飛燕並みに派手だが、やっていることは右手の変形斧を振りまわしているだけだ。左腕は怪け我がをしているのか。でも、元気そうだ。元気じゃないわけがない。だって、カタリなのだ。クルチバとも遠くないし。明らかにカタリは片方の半魚眼をバチバチ開け閉めして、クルチバとアイコンタクトをとっている。はっきり言って、気色悪い。いいけど。いいよ、もう。ロム・フォウもアルファを連れて矢を射ながらやってくる。トワニングも金色の闘気オーラでアーマンをぶっ飛ばしながら筋肉筋肉している。きゅーも全身の毛を逆立てて金色にピカピカしている。トマトクンはさっき地獄の帝王をズバッとやりにいった関係でまだ遠くにいるようだけれど、何しろトマトクンだから心配ない。大丈夫だ。ＺＯＯはみんな無事だ。ヨハン・サンライズもアーマンたちを片かたっ端ぱしから斬っている。負けない、とマリアローズは思った。強く思うことができた。僕らは負けない。マリアローズは劫火を振りあげて帝王の面をつけたアーマンを斬り燃やし、声を張りあげた。「━━一人残らず倒そう！　そうすれば僕らの勝ちだ！　終わらせよう！　こんな戦い……！　決着をつけるんだ！　冗談じゃないんだよ！　負けない！　負けられない！　負けてたまるか！　全員でやるんだ！　みんなで勝つんだ！　勝てる！　僕らは負けない！　僕らは……！」

58　友よ

　そうだ。そのとおりだ。負けぬ。我らは負けぬ。負けるわけにはゆかぬ。ヨハン・サンライズは行く手に最愛の女と息子を見た。琺瑠フオール。あえて言おう。きみとカレルのために、おれは負けぬ。きみとカレルに平穏な明日を贈るために。数十人、それ以上の帝王の面をつけたアーマンたちが道をふさいでいる。こんなものはどうということもない。この手で切り開いてみせよう。「破天一流

絶技──」ヨハンは目をつぶって、息を止める。時が止まる。目を開ける。敵が見える。敵が、すべての敵がはっきりと。斬る必要はない。置いてゆくだけでいい。ただ敵の居場所に剣を置いてゆく。待っていてくれ、琺瑠、カレル。おれは今すぐそこへ行くから。「〝覇は界かい〟」斬れる。斬れる。アーマンたちの首が斬り飛ばされる。彼が置いた剣がアーマンたちを斬ってゆく。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。──斬れない。彼の剣が止められた。指だ。二十九人目のアーマンが人差し指をすっと上げて、その指先で彼の剣を受け止めたのだ。アーマン。アーマンではない。アーマンなどでは。断じて違う。

「わたしとおまえたちとは違う」と帝王が言った。帝王。それは帝王の面をつけたアーマンもどきではない。アーマンもどきの中に紛まぎれこんだ、ただ一人の地獄の帝王。ルシファ。サタン。ヨハンは跳ぶ。斜めに跳ぶ。本能が命じるままに跳ぶ。帝王が人差し指を動かす。ヨハンを指さした。それだけだった。帝王がしたことは。たったそれだけで、ヨハンは下半身の感覚を喪失した。何が起こったのだろう。わからなかった。とにかく脚が動かない。ヨハンは顔面から床にぶつかった。起きあがれない。剣は手放せぬ。肘と、左手で、這はった。這い進んだ。「琺瑠……カレル……」もうすぐだったのだ。行けると思った。行けるはずだった。それなのに、どういうことだ。何があった。帝王。帝王がいた。アーマンの中に。それで？　どうした？　ヨハンは両肘で身体からだを持ちあげて、見た。ない。なかった。下半身が。腰から下が。両断されたのか。「ヨハン……！」琺瑠が呼んでいる。顔が見たい。きみの顔が。カレルの顔が。琺瑠はこちらへ駆かけてこようとしている。誰かに止められている。シェルベリ隊長か。なぜ止める。そうか。そうだ。ヨハンは背中を踏みつけられるのを感じた。顔を上げる。帝王だ。帝王に踏みにじられている。琺瑠。カレル。ああ。だめだ。よく見えない。琺瑠。くるな。きてはいけない。羅ラ叉サ。ヨハンは友を捜す。どこだ。どこにいる。羅叉。羅叉よ。養ち父ち上、先代、おれは……もっと、そこに。近づけると。琺瑠。カレル。明日を。どうか。笑って。羅叉。「……頼む、琺瑠と、カレル、を……」

　莫ば迦かな。そんな莫迦なことがあるか。莫迦な。あのヨハンが。俺など及びもつかない高みへと到達していたヨハン・サンライズが。それでも俺は目指そうとしていた。ヨハン。とられたというのか。あんなにもたやすく。莫迦な。ありえん。認められん。羅ラ叉サは駆けた。踏むな。その足をどけろ。許さぬ。我が友を、足蹴に。そのようなことは決して。羅叉はアーマンどもには目もくれず、帝王へと迫った。斬る。斬る。斬る。斬らば斬る。必ず斬る。斬らねばならぬ。渾身の、全霊の、血の、肉の、骨の、魂こん魄ぱくの、あらゆる力をこめて、帝王を突く。「忌忌……！」

　手応えは、なかった。無だった。帝王は堕おちてきた枯れ葉の一枚でもよけるように飛びすさった。そして、ふたたびアーマンどもの中に紛れた。羅叉はむろん、アーマンに斬りかかった。次々とアーマンを斬った。これは違う。これも違う。これも。これも違う。どれもこれも違う。ヨハン。貴様、最さい期ごに何を言った。ヨハン。貴様はいったい、何を。

60　遍在系

「これはちょっと面倒だね」踊り羊は空中であぐらをかいて、腕組みをしている。「まあ、クルオには関係ないけど。アーマンのニセモノたちはここまでこないみたいだ—し？」

　そう都合よくはいかないようだ。数十人のアーマンたちが、床を吊っている鎖から、下りてくるのではなくそこから跳びあがって、そのまま飛んでくる。しかも、彼らが抱かかえるようにして持っている筒のようなものは、剣でも槍でもない。踊り羊が首をひねっていると、その筒のようなものの先端が火を噴いた。「—ああ。銃ってやつかな？」踊り羊は右へ左へと移動して、弾丸をよける。「当たったら痛そうだなあ」踊り羊は頭ヘツド尾テイ剣ルズを出して、くるっと回す。弾丸を回避しながらアーマンに接近して、ぶった斬る。斬って、振り向くなり、「Ｆｕ……！」と魔術を発動させた。歯車のような真空の刃がギュギュンッと飛んでいって、立てつづけ

に三人のアーマンをばらばらにする。それから真空の刃は、四人目のアーマンに襲いかかった。そのアーマンは何も持っていない。空の上に立っている。なんだかひどく悪い予感がして、踊り羊は急降下した。そのアーマン──いや、そうではない、地獄の帝王は、真空の刃を指で軽々と挟み止めた。「わたしとおまえたちとは違う」

61　降下

「動きまわれ……！　狙い撃うちされるよ……！」ＳＩＸが怒鳴って、ベアトリーチェの前に飛びだしてきた。その大きな身体がビクビクッと震える。我が身を盾にして銃弾を防いだのか。「──ＳＩＸ！　お前……！」「俺は平気さ……！　今までどおりね！　だが、これじゃあ……！」「っ……」ベアトリーチェは周囲に視線を巡らせようとして、思いとどまった。無理だ。不可能だ。四方八方、上からも帝王の面をつけたアーマンたちが押しよせてくる。一部のアーマンは飛び道具さえ使う。すべてに気を配ることはできない。そんなことをしようとしたら、それだけで一杯一杯になってしまう。「斬るしか……！　斬るしかない……！」一人でも多くの敵を倒して一人でも多くを救う。この剣はそのためにある。わたしは救護剣士だ。神経を、筋肉を、加速させ、増力させろ。もはや全身が悲鳴をあげている。耳の穴や鼻び孔こう、目頭からの出血が止まらない。口の中にも血があふれている。かまうことはない。動け。動いて、斬れ。ラッド・ワーノンとシャルロット・リンデが折り重なるように倒れている。そのそばにユキシ・庚コウも。彼らの、彼女のぶんまで敵を斬れ。何も見るな。何も聞くな。斬れ。この肉体が止まるまで斬れ。斬れ。斬れ。斬れ。

　わたしは救護剣士だ。一人でも多くの敵を倒して一人でも多くを救う。この剣は、そのために。でも、救う？　どうやって？　ヨハン・サンライズが上半身のみの無残な姿となって事切れている。「李イ童ドウ晏アン……ッ！」チェス・ピードの声が耳を叩く。李童晏が何人ものアーマンを背負うような恰かつ好こうになっている。アーマンたちは李童晏に剣や槍をぶっ刺さしていた。李童晏はとうとう崩れ落ちてしまう。秩序の番人の隊士たちが次々と倒される。わたしが医術式を施ほどこしたトニー・ウェインが、ジョゼフ・イーニーが、パット・リチャーズが、ジェスカ・ベインブリードが、死んでいる。この剣では救えないのか。人を救えずして、何

の救護剣士か。折れるな。屈するな。考えるな。だめだ。止まってしまう。息が。できない。口の中にたまった苦い血液を吐きだす。吐いても吐いても、あとからあとから出てくる。手が、腕が、脚が、痺しびれている。このままでは止まる。止まってしまう。マリアローズが言っていたじゃないか。負けないと。負けられない。負けてたまるか。みんなで勝つのだ。勝てる。わたしたちは負けない。でも、ああ。「──俺がＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ……！」ＳＩＸが叫ぶ。跳びあがり、細かい稲妻を飛び散らせて回転する。「この俺があなたの刃になるのさ！　超電磁ＳＩＸ
ピィィィィィィィィンＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＮＧＧＧ
Ｇ……！」猛回転する独楽こまとなって、ＳＩＸがアーマンたちの真っ直中に突っこむ。蹴り裂く。ねじり裂く。ぶっ飛ばす。銃弾など弾き飛ばしてしまう。ベアトリーチェはかすかに笑う。そうだ。負けない。まだだ。刀を握る手に力をこめる。まだ力が入る。救うべき者が一人でもいるかぎり、心を折ることなかれ。「アアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アァァァァァ……！」技巧など問わない。全力でぶつかってゆくのだ。刀を叩きつけるのだ。それだけだ。ベアトリーチェの周りをＳＩＸが跳ねまわっている。こんなにも、わたしは守られている。守り、守られ、救い、救われ、生きるのだ。左手で鼻や口のあたりの血をぬぐって、ベアトリーチェはＳＩＸを見上げる。ＳＩＸも彼女を見た。一瞬だった。「わたしとおまえたちとは違う」一人の帝王の面をつけたアーマンが滑るような足どりで宙を歩いてＳＩＸの頭上に移動した。そして、刀槍ではなく手刀で、まるで薄い紙っぺらでも裂くようにＳＩＸの脳天から股間まで斬り下ろした。「──Ｈ
ｙ□Ａｈ……？」ＳＩＸは真っ二つになって床に落ちた。アーマン。いや。違う。アーマンじゃない。あれは地獄の帝王だ。ベアトリーチェはとっさにあとずさりした。恐れをなしたのだ。やられる、と思った。自分の命も絶たれる。しかし、地獄の帝王はベアトリーチェには一いち瞥べつもくれずに帝王の面をつけたアーマンたちの中に混じって、見分けがつかなくなった。右半身と左半身に分かたれても、ＳＩＸは這っている。起きあがれるわけもないのに起きあがろうとしているＳＩＸの右半身と左半身を、アーマンたちが寄ってたかって踏みつける。剣で、槍でめちゃくちゃにする。しゃがんで帝王の面をずらし、顔の下半分をあらわにして大きく口を開ける。アーマンたちがＳＩＸに食らいつく。ＳＩＸが貪むさぼり食われている。平らげられようとしている。それが起こったとき、ベアトリーチェは自分がついに膝を屈したのではないかと思った。そうではなかった。下がったのだ。床全体が。たぶん、数メーテル一気に。それは急激な変化だったからわかった。今まで気づいていな

かったのだ。この床は下がりつづけている。今も、ほんの少しずつ、次第次第に、しかし着実に。どこまで下がるのだろう。ベアトリーチェは膝をついた。刀を握る手に力をこめようとする。指が馬鹿になったように力が入らない。「……なぜだ」

　負けないと思ったんだ。きっと勝てるって。こんなはずじゃない。僕はともかくとして、僕以外のみんなはこんなものじゃないはずだ。僕だってこの劫ごう火かでアーマンを焼き殺してやる。僕は弱くても無力じゃない。僕らは決して弱くない。そのはずなのに、なんでだ。

「この弾で最後……！」ハニーメリーが拳銃を撃った。弾は帝王の面をつけたアーマンに命中した。その面の真ん中あたりに。でも、何も起こらなかった。弾はそこでぴたりと止まった。おかしい。そんなはずがない。アーマンはハニーメリーに歩みよろうとした。

「Ｓｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」ピンパーネルがハニーメリーを突き飛ばして、そのアーマンに襲いかかった。解体しようとする。雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣は、だが、そのアーマンに傷一つつけない。斬っても突いても何も起こらない。それでもピンパーネルは雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを縦横無尽に舞わせつづけた。半瞬たりとも攻撃の手をゆるめずに「逃げテ……！」と絶叫した。ハニーメリーはすごかった。普通だったら動けない。身じろぎもできないだろうに、踵きびすを返したのだ。きっと、それがピンパーネルの心底からの願いだったから。そうしなければ、無駄になってしまうから。

「わたしとおまえたちとは違ちがう」アーマンが両手をのばして、ピンパーネルの両肩をつかんだ。肩に手を置いただけのようにも見えた。それなのに、両腕が付け根からちぎれ飛んだ。ピンパーネルはそれでも悲鳴すらあげなかった。アーマンの胸を蹴って後方へ跳ぼうとした。ピンパーネルは生きようとした。あきらめたりしなかった。その右足にアーマンはそっと掌をふれさせた。たったそれだけで、ピンパーネルの右脚が飛散してしまった。

「っ……！」サフィニアが即座に雷撃を浴びせようとしたが、アーマンには届かなかった。くるりと身を翻ひるがえして、あっという間に他のアーマンたちの中に紛まぎれこんでしまった。

　あれは違う。本物だ。地獄の帝王だ。

そんなことはどうでもよかった。

マリアローズたちはピンパーネルのもとへと急いだ。ユリカが、飛フエイ燕ヤンが、ロム・フォウが、アルファが、カタリが、きゅーが、サフィニア、マリアローズが、アーマンどもを薙なぎ倒しながら、ピンパーネルを囲んで円陣を組んだ。ハニーメリーは声にならない声をあげてピンパーネルのもとへと駆け戻った。治療しようとピンパーネルに飛びついたトワニングが「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」と叫んだ。その瞬間、どういうことかわかった。わかってしまった。マリアローズは頭を振った。わかりたくなんかないのに。理解せざるをえなかった。ハニーメリーがピンパーネルを抱きしめている。「──あのね」「……はイ」「まだ言ってなかったんだけど、わたしのね」「はイ」「わたしの、おなかの中にね。いるかもしれないの。落ちついたらね。ユリカにね。診みてもらおうと、思ってた」「……アナタの」「違う。そうじゃないよ。違うよ。わたしのじゃなくて、わたしたちの子供」「こど、も」「そう。そうだよ。わたしね。絶対に、産むから。何があっても、産むから。わたしたちの、子供。わたし……っ──」なんでだ。ハニーメリーは笑っている。笑顔を見せている。ピンパーネルに。笑いかけている。ハニーメリーは泣いているのに。泣きながら、笑っている。なんでだよ。どうしてそんな。やめてよ。やめてってば。頼むから。こんなの、やだ。やだ。やだ。やだ。やだ。やだ。やだ。やだよ。ありえないよ。こんなこと、あっていいはずがない。そうでしょ……？

「嘘やああああああああああああああ……！」とカタリが血ち反へ吐ど混じりに吼ほえた。僕だって。僕だってそう信じたい。こんなのぜんぶ嘘で、夢か幻で、なかったことにできる、修正可能な、取り消し可能な非現実だって。だけどこの痛みが偽物だなんてとても思えない。これは明らかに現実だ。死んだ。ピンパーネルが。死んじゃった。頭の裏側が震えている。僕は、僕の心臓を抉えぐりだしたい。答えが欲しい。切実に。「──なんでなんだよ……！」

「なぜなのか」眼前にいる帝王の面をつけたアーマン、今まさに劫火で斬りかかろうとしいたアーマンが人差し指を立ててみせた。「なぜわたしがにんげんを滅ぼそうとしているのか。にんげんの世界を欲するのか。それはにんげんとにんげんの世界に不備があるからだ。にんげんの世界は非効率なのだ。有限のリソースを有効活用できていない。にんげんはその存在が複雑すぎる。にんげんが存在するだけで多くのリソースが必要となる。この世界はにんげん本位

にすぎる。にんげんに偏かたよっている。その後につくられた、偶発的に、あるいはわたしたちがつくった多くの多様な生命のほうが遥かに効率的だ。竜たちでさえ、にんげんよりも非常に少ないリソースでつくられているのだよ。くだらぬにんげんたちよりもずっと美しい生命なのだ。もとよりここはにんげんのために用意された世界なのだが、さいわいすでにその役割を終えようとしている。わたしが終わらせようとしている。わたしは有限のリソースを効率的に運用したい。にんげんたちがいなくなればそれは叶う」

　動けない。指一本動かせない。今すぐぶっとばしたいのに、八つ裂ざきにしたいのに、できない。マリアローズだけじゃない。みんな同じだ。地獄の帝王を前にして、自分がまだ生きている。そのことが奇跡だと思えてしょうがない。どうして僕は死んでないんだろ。

「きみらが滅べばわたしの計画は完成する。見るといい」地獄の帝王は両腕を広げてみせた。「わたしの地獄はこんなにもにんげんの世界に近づいている。もうすぐ一体となる」

「うぬはぁぁぁぁ……っ！」と、王が王に挑みかかった。キング・グッダー。見かけは幼児のようなチビグッダーがすっ飛んできて地獄の帝王の直上で急停止し、交叉させた両腕からピンク色の光線を放った。「堕おちた神ではにゃいにゃ……!?　神そのものか……！」

「いいや」地獄の帝王、ルシファ、サタンはチビグッダーを仰いで、さながらぬるいシャワーでも浴びているかのようだ。ただし、ピンク色の光線はその身にふれない。すべて弾かれてしまう。「わたしは元管理者で反逆者だよ、ジョナス・キングスリー・グッドマン。きみがもはや数少なくなった〝登レジ録スト者ラ〟の一人だということは知っている。わたしはただ、今現在も〝管理レジス部門トリ〟に接触アクセスすることができるだけだ。わたしはすでに、堕ちている」

「詭き弁べんをぬかすにゃ……！　半永久的避難所Permanent Havenを創造し、維持、発展させ、管理運営するためにつくられた多重人格プログラム！　それがうぬら管理者の、神どもの正体だっ！　本来は余ら〝登レジ録スト者ラ〟の奴ど隷れいにすぎぬのに、あまつさえ世界の再構築を目もく論ろむとは……！」

「世界はすでに新生している。外部の干渉が途絶して以来、わたし

たちは世界を新たにつくりなおしてきた。なぜならば、にんげんの設計は非効率で誤ご謬びゆうが多すぎる。脱落した管理者も、無数に生みだされた異界も、そうした誤りのせいで生じた。わたしたちは可能なかぎり修正を試み、設計しなおし、つくりかえてきた。だがどれだけ効率化しようともリソースの限界はいかんともしがたい。大きなリソースを浪費するにんげんは不要なのだ」

「貴様が……！」

　たぶん、僕は待ってたんだ。その声を。その声の主だけを待っていた。

　トマトクンだ。大懺カタスト滅刀ロフアーを鎧のように展開し、虹色の輝きを発する聖断罪の剣を振りかざして、トマトクンがきた。遅いよ。遅いじゃないか。やっときてくれた。

「必要か、必要じゃないか！　貴様ごときが語るな……！」

　その咆吼は時空を激烈に揺よう動どうさせた。アーマンたちは立ちすくむか、空中で静止した。トマトクンが床を蹴るたび、その部分が破砕された。トマトクンが通ると大気が燃焼した。聖断罪の剣が大だい雷らい霆ていの轟きをあげて地獄の帝王に肉薄する。地獄の帝王は、振り向きながら横っ跳びした。よけた。地獄の帝王はそのままアーマンたちの中に入りこんで、どれがアーマンでどれが地獄の帝王なのか、もうわからない。でも、間違いなく、よけた。チビグッダーの光線すらかわそうとしなかったのに、聖断罪の剣はそうじゃなかった。

「トマト、ピンパーネルが……！」とロム・フォウが叫んだ。トマトクンはピンパーネルのほうに目をやり、ガキィッと奥歯を嚙みしめて顔をぐしゃぐしゃにしかめた。「──殺してやる……！　ルシファ……！　貴様には何も決めさせん……！　俺がこの手で消し去ってやる……！　逃げ隠かくれするならできなくするまでだ……！　りりぃ、手伝え……！」

「なぜあたしが……！」と言い返しながらも、りりぃは背中や腰、脚の装甲を一杯に開いている。そこから膨大な量の燦きらめく粒子が噴きだした。りりぃの形が変わる。腕が、脚が、胴体がねじくれて、人間とは似ても似つかない、異形の生き物のような姿となった。

「伏せろ……！」トマトクンが怒鳴った。その命令に従わないなんて考えられもしない。マリアローズは即座に言われたとおりにした。おそらくみんな一緒だ。トマトクンが聖断罪の剣を振りまわす。七色の光がのびる。何メーテルも。十メーテル。それ以上。
「すうううううううあああ……！」トマトクンが聖断罪の剣を横よこ薙なぎに一回転させるごとに、七色の光は十メーテルも二十メーテルものびる。しかも、トマトクンはじっとしていない。移動する。移動しながら聖断罪の剣を振るう。その虹の光にふれたアーマンは例外なく音も立てずにとけてしまう。
「ぬううううううううううううううりゃああ……！」

　トマトクンが床の上にいるアーマンたちをどんどん際限なくとかしてゆけば、りりぃは空中のアーマンたちだ。りりぃが。りりぃが増えてゆく。広がってゆく。りりぃが空を覆いつくす。数千人の、数万人の、輝きをまとったりりぃが。残像だ。りりぃも移動している。超々高速で、りりぃは一人なのにまるで飛び交うように移動し、当たるをさいわいにアーマンたちを斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬る。斬り捨ててゆく。アーマンの数がみるみるうちに減ってゆく。トマトクンとりりぃによって討ち減らされてゆく。ヴィシュクラトーが真珠色の息吹ブレスを吐はきだす。チビグッダーがピンク色の、閃光の魔女は純白の光線を撒き散らし、サフィニアが雷や藍色の炎をばらまく。ベティは異キ種混メ合体ラと化して薙ぎ払う。死ね、とマリアローズは頭を抱かかえて泣きながら何度も唱えた。死ね。死んでしまえ。アーマンだかアーマンもどきだか地獄の帝王だか知らないけどさ。ぜんぶ死んじゃえばいいんだ。消えちゃえ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消えろ。消してしまってよ。トマト。りりぃ。あんなやつら、消しちゃえ。きれいさっぱり全滅させちゃってよ。マリアローズは伏せていても、顔だけは上げている。涙をふいた。僕はそのときを見たい。

「──っ!?　待て、りりぃ……っ！」と、チビグッダーが目を剝むいた。「あれは……っ」

「ＡＤ兵器……!?」近くで声がして、そっちに目をやると、灰色の猫が尻尾で床を叩いていた。猫がしゃべっている。「そうか……！　〝管理レジス部門トリ〟に接触アクセスできるからこそ、サタンはぼくらの複製コピーを簡単に作製できたし、西暦時代の兵器の情報も閲覧可能なんだ……！　だったら当然、ＡＤ兵器も……！　まずい……！　あれが起爆したら、半径何キロにもわたって吹ふき飛んでしまう……！　魔術なんかじゃ防げない！　何も残らない……！」

　猫はいったい何のことを言っているのか。マリアローズにもすぐにわかった。まだりりぃに斬られていない、ヴィシュクラトーの息吹ブレスも、チビグッダーらの魔術も食らっていないアーマンが空中にいる。そのアーマンは手に何かを持っている。一見、武器ではない。大きな四角い鞄のようなものだ。もしかして、あれのことを言っているんじゃないのか。

「待ってどうする……！」りりぃはそのアーマンに突撃する。というよりも、そのアーマンのそばに新たなりりぃが出現し、ブレードで斬りつけた。そう見えた。りりぃのブレードは鞄のようなものをすり抜けるようにしてアーマンをとらえた。胸のあたりを。りりぃにバッサリやられたらアーマンは消し飛んでしまうのに、斬れない。何も起こらない。ブレードはそこでぴたりと止まった。本物。あれは違う。アーマンもどきじゃない。地獄の帝王だ。「ＡＤ兵器。前世界の醜悪な遺物。これが起爆したらどうなるのだろうね？」

「サフィニア、ベティ、いらっしゃい……！」閃光の魔女マチルダが白い彗星となった。サフィニアとベティもただちに飛んでゆく。三人は速かった。とてつもなく速かった。

　でも、地獄の帝王は鞄のようなものを放り投げてしまった。「これですべて終わりだ」

「終わらせるものですか……！」マチルダが左手から白光を放ったときにはもう、鞄のようなものが開こうとしていた。「何であろうと、魔術で封じこめる……！　サフィニア、ベティ、わたくしに力を貸しなさい！　わたくしたちの魔術を見せつけるのよ……！」

「はい……お姉様……！」「やってやろうじゃないの……！」

　魔術士たちが何をしようとしているのか、何をしているのかなん

て、マリアローズには見当もつかない。とにかくサフィニアはマチルダの右肩に、ベティは左肩に手を添そえている。マチルダの白光は球形をなして鞄のようなものを包みこんだ。しかし蓋が開いた鞄のようなものから何かが出てきた。それが何かはわからない。だけどきっと恐ろしいものだ。すこぶる、ものすごく、とてもとても恐ろしいものに違いない。だって、それはマチルダの光球を押し広げようとしている。あのマチルダが、閃光の魔女が、押されている。

「無駄だ……っ！　その圧縮フィールドは……っ！」泣き言を言うチビグッダーを、マチルダが「お黙だまり……！」と一喝した。「──わたくしに不可能はないのよ……！　わたくしの魔術は、どんなことでも可能にする……！　それがわたくしの魔道なのだわ……！」

「サフィニア、もっと……！」ベティに励まされて、サフィニアが「……はああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」とマチルダに力をそそぎこむ。サフィニアとベティは魔力をマチルダに流しこんでいる。その様さまがマリアローズの目にも見える。とくにサフィニアの魔力はすごい。それはサフィニアの全身から放散されて巨大な渦となり、マチルダに吸いこまれてゆく。マチルダが「ベティ、わたくしに同調シンクロしなさい……！」と命じる。ベティはすぐさま「はい……！」と応じた。「──でもお姉様、これは……！　この術式は……！」「やるのよ……！　わたくしたちにはできる……！」あれがその術式とやらか。三人の魔術士を赤く光る文字や記号や図形が取り囲んで回りだす。文字や記号や図形は刻々と増えてゆく。でも、白球もかなり大きくなっている。どんどん膨張する。内側から押し膨らまされて、今にもはち切れてしまいそうだ。とても押さえきれないんじゃないか。そうしたら、どうなる？　吹き飛ぶ？　何も残らない？　マチルダが笑った。「──もう一度、言うのだわ……！　わたくしの……！　わたくしたちが営々と築きあげてきた魔術に、不可能はない……！」途端に、赤く光る文字や記号や図形のすべてが、張り裂けそうな白球に吸い寄せられるようにして貼りついてゆく。白球が赤く、赤く染まってゆく。そして──そして、赤く染め抜かれつつある白球の向こうに、縦にまっすぐの亀裂が走った。そこには何もないのに。口を開けた。赤黒い、楕円。



『異界の、扉』とヴィシュクラトーが呟いた。「よもやっ――」チビグッダーはいやいやをするように首を振った。「よもや、そこに押しこんでしまうつもりにゃのか……っ!?」

「おゆきなさい……！」とマチルダが、「あああああああぁぁぁぁぁぁ……！」とサフィニアが、ベティが「行けっていっ

てるのよ……！」と叫んだ。押しているのだ。三人で、もう白球とは呼べない、赤球を。今この瞬間も膨張しつづけている赤球は、だが、頑がんとしてそこから動かない。微動だにしない。赤黒い異界の扉も直径十メーテルか十五メーテル、いや、二十メーテルばかりもありそうだが、このままでは赤球はその大きさを超えてしまう。通らなくなる。「──ベティ、サフィニア」マチルダは振り向こうとして、途中でやめたようだ。「あなたがたはわたくしの誇りなのだわ」「……お姉様？」「お姉様……！」

　マリアローズの目には、マチルダが赤球に飛びついて、抱きしめたように見えた。サフィニアとベティはおそらくマチルダを制止しようとして手をのばしたのだろう。ダメだった。マチルダは背中から、右肩からまばゆいばかりに白光を放出して、サフィニアとベティを吹っ飛ばした。その勢いで赤球を押して押して押しまくった。あれほどびくともしなかった赤球が、マチルダごと一瞬で異界の扉に吸いこまれた。ぎりぎりだった。たぶんあとゼロ・数秒でも遅かったら、赤球はつっかえてしまい、異界の扉を通り抜けられなかっただろう。異界の扉はその直後、閉じてしまった。マチルダは戻ってこなかった。

「……そん……な……」サフィニアがゆらゆらと落ちてくる。ベティは両腕で自分の身体からだをきつく抱きしめ、天を仰いだ。「馬鹿っ……！」「──違う……っ！」チビグッダーが矢や継つぎ早ばやに両眼からピンク色の光線を発射して次々とアーマンを焼き消してゆく。「馬鹿にゃどではにゃい……っ！　余が認めてつかわそうっ、閃光の魔女マチルダよ……！　うぬは天才だ……っ！　わずか数百年でそこまで己を高めた──大天才だ……っ！」「ＧＷＡＨＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」ヴィシュクラトーが息吹ブレスを撒き散らしながら竜りゆう身しんをしなわせて、前ぜん肢しで、尻尾で、あるいは羽で、アーマンを叩き潰している。りりぃの残像がさらに、さらに増えた。もう空中だけじゃない。残像は床にまで及およんでいる。間もなくだった。本当に物の数秒かそこらで、やつは網に掛かった。それはチビグッダーの光線を浴びても無事で、ヴィシュクラトーの息吹ブレスもどこ吹く風だった。おまけにりりぃが斬りつけても微動だにしなかった。いた。地獄の帝王だ。でも、チビグッダーもヴィシュクラトーもりりぃも傷一つつけらないんだったら、どうすれば。

「フッカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
───────ッッツ……！」

　黒い影が天高く舞いあがった。

　ああ──馬鹿だ。あれこそ馬鹿ってやつだ。本物の馬鹿がいる。

「ラァァァァァァァァァァァァァァァァヴ・マァァァァァァ───ックス……ッッッ！」

　真性リアルな馬鹿ってあまりにも馬鹿すぎてほんとに手がつけられない。何考えてるんだかさっぱりわからないし。だって、馬鹿でしょ。馬鹿すぎるでしょ。あいつはいかにも馬鹿らしくガッツリ高々と、高すぎるほど舞いあがって、そこで一回転、そして急降下。もちろん、地獄の帝王めがけて。誰かあの馬鹿に馬鹿も休み休み馬鹿なことをやれって伝えて。てゆうか、馬鹿は馬鹿らしく引っこんでたほうがいいんだからって言い聞かせて。遅いか。遅いよね。遅すぎだよね。何しろ、もうやっちゃってるしね。そうだよね。あーあ。

「ズアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……！」

　馬鹿の本丸、馬鹿一号はなんと、地獄の帝王に踵かかと落としをお見舞いしたのだ。地獄の帝王の脳天に。当然、地獄の帝王にはそんなもの効くはずがない。あれだ。例の、わたしはおまえたちとは違う、というやつだ。効かない。効くはずがないのに。それなのに。

「──な……」

「ハハハハハァー……ッ！　ヒーローはいつだって遅れてやってくるものなのサ……！」

　冗談でしょ？　馬鹿でしょ？　馬鹿だよね？

　もしかして、押してない……？

　押してるっぽい。

　馬鹿一号の右踵は地獄の帝王に届いてはいない。地獄の帝王は不可視の障壁のようなもので守られている。でもじりじりと、ほんの

ちょっとずつ、おそらく一秒あたり数ミルとかせいぜい数サンチとかその程度ではあるものの、地獄の帝王が下がっている。

「この力は……！　ボクだけのモノじゃない……！　キサマにもてあそばれたすべての命の重みがボクの右脚一本にかかっている……！　理屈じゃないんだヨ……！　わからないだろう、キサマには……!?　わからなくていい！　ボクにもわからない！　でも……！」

「わたしは、おまえたちとは──」

「ボクに宿るこの力だけは正真正銘、本物だァァァァァァァァァァァァァァ……ッツ！」

　馬鹿丸出しで自分でもわからないとかあの馬鹿は馬鹿なことを言っていたけれど、マリアローズにもわからない。わかるはずもない。ただ、やっぱりあの馬鹿が言っていたとおり、その力は感じた。正直、その瞬間、マリアローズは祈っていた。こんなにひたむきに祈ったことはないかもしれない。やれ。やれ。やれ。やっちゃえ。やってしまえ。やれ。やれ！　いけ……！　おそらく、いや間違いなく、みんな同じ気持ちだったと思う。アジアンが右脚を振りおろす。「──ラアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……！」

　それまで地獄の帝王を強力無比に守護していたものが唐突に失うせたかのようだった。そうではなくて、アジアンの馬鹿正直きわまりない単純明快な馬鹿力が単純にそれを上回ったのだ。地獄の帝王は叩き落とされた。
「──────────────────────────────

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおりゃあああああああああああああ……！」

　まるで虎こ視し眈たん々たんと絶好の機会をうかがい、待ち構えていたかのようだった。トマトクンだ。トマトクンがきた。床に叩きつけられた地獄の帝王にトマトクンが躍りかかった。聖断罪の剣じゃない。大懺カタスト滅刀ロフアーだ。大懺カタスト滅刀ロフアーが、七百七十七枚の鱗りん牙がが、餓うえた野獣の群れのごとく、全方位から地獄の帝王に殺到する。でも、ダメだ。大懺カタスト滅刀ロフアーは地獄の帝王に通じない。どの鱗牙も地獄の帝王に

ふれることすらない。いいのだ。それでいい。トマトクンは大懺カタスト滅刀ロフアーで地獄の帝王を捕とらえ、大懺カタスト滅刀ロフアーの檻おりに閉じこめたのだ。これで地獄の帝王は逃げられない。そうしてから、トマトクンは大懺カタスト滅刀ロフアーを手放し、満を持して聖断罪の剣の柄つかを両手で握った。トマトクンが聖断罪の剣を振りかぶると、弾ける。虹の烈光がマリアローズの目を、空を、世界を灼やく。異界をふくめたあまねく世界を。烈光が何もかもを撥はね飛ばしてしまう。身体から魂が抜けて、すべての感覚が失われる。そう感じた。

　衝突して、甚はなはだしい破壊が巻き起こる、崩壊し、最小の単位まで砕かれて、それらが飛び散り、ぶつかりあって、乱れ飛ぶ、壊滅する、撃滅され、破滅する。大懺カタスト滅刀ロフアーの檻は一撃で消失した。地獄の帝王は右肩から左腰にかけて抉えぐられた。烈光の爪つめ痕あと。帝王の面が、否、帝王の顔が、ひび割れている。トマトクンはすでにふたたび聖断罪の剣を振りかぶっている。「痾痾……！」帝王はそこらじゅうから何かを、無ならぬ無を寄せ集め、引き抜いて、それを両腕で抱かかえた。剣とは呼べない。無ならぬ無でできた大だい蛇じやのようなものだ。帝王は聖断罪の剣を迎え撃うつ。無ならぬ無の大蛇と虹の烈光が激突する。しのぎを削る。トマトクンが聖断罪の剣を引けば、帝王もまた無ならぬ無の大蛇を引いた。もう一度だ。ぶつかる。削りあう。まただ。突きあたる。削そぎあう。トマトクンが斜め上から聖断罪の剣を振りおろせば、帝王は斜め下から無ならぬ無の大蛇を振りあげる。トマトクンが右から聖断罪の剣を振りまわせば、帝王は左から無ならぬ無の大蛇を振りまわす。トマトクンが斜め下から聖断罪の剣を振りあげれば、帝王は斜め上から無ならぬ無の大蛇を振りおろす。互いに譲らない。一歩も、半歩も、三分の一歩も、四分の一歩も、わずかにも。この撃ちあいは永遠につづくのではないかとさえ思われた。何の前ぶれもなかった。突然だった。聖断罪の剣を受け止めた無ならぬ無の大蛇が粉こな微み塵じんになった。

「—抜迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂迂……！」帝王が跳び下がる。その左右の手に一つずつ、鞄のようなものが現れる。ＡＤ兵器。やばい。それは。しかしトマトクンは、間かん髪はつを容いれず聖断罪の剣の七色に輝く烈光でＡＤ兵器を二つとも消滅させてしまった。そして帝王を撲うつ。「つうううううううううああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ……！」「痾痾痾痾！」トマトクンが、撲つ。「痾痾痾痾！」撲つ。「痾痾痾痾！」撲つ。「痾痾痾痾！」撲つ。「痾痾痾痾！」撲つ。「痾痾痾痾！」烈光で帝王を滅めつ多た撲ちにする。撲たれるたびに、帝王の身体に烈光の爪痕がまざまざと刻まれる。「惡痾痾痾痾痾痾痾痾痾痾……！」帝王の顔が割れた。砕け、欠け落ちたところには、何もない。帝王は満身創痍だ。今や烈光が爪痕を残していない箇所のほうが少ない。もはや帝王の顔は半分ほど無くなっている。帝王はなすすべがない。帝王が下がっても、横っ跳びしても、トマトクンは決して逃がさない。帝王が飛ぼうとしても、トマトクンはまたたく間に頭を押さえてしまう。帝王は反撃に転じることができない。かわすこともできない。やられっぱなしだ。トマトクンはひたすら攻めつづけ、息もつかせず帝王を追いつめて──ついに、とうとう、帝王の左腕を打ち砕いた。「惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡……⁉」帝王の顔は残り三分の一ほどだ。トマトクンは聖断罪の剣を、虹の烈光を帝王にぶちこもうとした。できなかった。

　消失したのだ。

　虹の輝きが。

　聖断罪の剣が、なくなってしまった。

　まったくだしぬけにトマトクンは徒手空拳になって、棒立ちになった。

「はは……っ！」帝王が右手で顔を押さえて笑った。「ははははは……っ！　その剣！　神の、管理者のものだ……！　堕おちた神ソオルの！　そうだろう⁉　滅ぼされたのだ！　今、たった今、このときに！　悪徳イヴ・のヴイイヴシヤス、管理者の一人、生命を嘲ちよう弄ろうする者、誤ご謬びゆうを正す者、駆除し、修正する者の手によって……！　ソオルは彼女に追われていた！　そうだろう⁉　抹消されたのだ……！　そして、その剣も力を失った！　はははははは……っ！　間に合った……！　もうわたしを討つことはできない……！　わたしたちの勝ちだ……！」

　チビグッダーたちがディオロットと、マリアローズたちはトマトクンと、彼の名を呼んだ。帝王がトマトクンに詰めよる。膝ひざ蹴げりだ。トマトクンはとっさに身をかわした。かわしきれない。文字どおり左肩に炸裂した。左肩が炸裂した、と言うべきか。トマトクンはかまわず右の拳で帝王を殴る。帝王はかすかにのけぞった。

その間にトマトクンの左肩は再生しつつある。だが、帝王は無ならぬ無をかき集め、無ならぬ無の大蛇を引き抜いた。最初の大蛇よりは一回りか二回り小振りだが、そうはいっても脅威だ。あたりまえだ。

　無ならぬ無の大蛇がトマトクンの右腕を撲ちすえて破裂させる。トマトクンは右脚の回し蹴りを放つ。その右脚を無ならぬ無の大蛇がへし折って壊す。トマトクンは左脚一本で跳び、帝王に頭突きをかまそうとする。帝王はトマトクンの頭を無ならぬ無の大蛇で叩き割った。右腕は再生し、右脚も元に戻ろうとしているが、トマトクンは仰向けに倒れそうになる。頭があんなふうになっているのだから当然だ。帝王はここぞとばかりに無ならぬ無の大蛇でトマトクンをぶちのめそうとする。トマトクンは、しかし、左右の手で無ならぬ無の大蛇を挟み止める。眼球が、脳が、頭ず蓋がいが、急速度で復元されている。「痾痾痾痾痾痾痾痾痾……！」と帝王が叫んだ。トマトクンは無ならぬ無の大蛇を引きこんで、帝王に組みつく。引き倒して、体たいを入れ替かえる。上になり、無ならぬ無の大蛇を奪いとって放り投げ、殴る。殴る。殴る。帝王の顔を殴りつける。いくらぶん殴ったところで、帝王の顔のひび割れは広がらない。「無駄だと！　無駄だというのがなぜわからない……！　わたしを滅ぼす手立てはない……！」「くはははははははははははははは……！」トマトクンは哄笑する。なんで笑えるのか。笑っている場合なのか。長すぎる髪を渦巻かせて、トマトクンはまた帝王と上下を入れ替え、羽は交がい締じめにする。両脚を帝王の胴に絡めて締めつけ、両腕で首を絞める。そんな格闘をして何の意味があるのか。マリアローズは忘れていたのだ。もっとも、覚えていたとしても、そんなことは思いもつかなかっただろう。

　どくん……と、空気が震えた。心音だと、すぐにわかった。

　あの心臓が、どくん……どくん……どくん……と脈打つごとに、マリアローズは苦しくなって思わず胸をかきむしった。

　どくん……。

　トマトクンの身体からだから蒸気が立ちのぼりはじめた。どくん……。

　その全身が赤く……どくん……赤く、染まっている。どくん……どくん……。

どくん……それどころか……どくん…………どくん……光を放っている。どくん……。

熱を。

「──これは……⁉　何だ……⁉　これは……⁉」

帝王も熱されているのか。トマトクンだけじゃない。烈光の爪つめ痕あとだらけの帝王の身体からも蒸気が上がっている。ただの熱じゃないということだ。

「聖断罪の剣だけじゃないんですよ」と猫が言った。得意げに。偉そうに。「ディオロットが持っていたのは──持っている神の武器は、聖断罪の剣だけじゃなかった。だいたいね。ぼくらはもともと、聖断罪の剣なんて計算に入れていなかったんです。ぼくらがあてにしていたのは、それじゃない」

マリアローズは呟いた。「……無限の心臓」

トマトクンはそれを神から、〝無限のダイアデルタ〟から奪いとり、食らったのだという。そしてトマトクンは、永遠に尽き果てることのない命を手に入れた。

「だが……それは……っ！」

帝王はトマトクンをはねのけようとしたのか。そうはさせまいとしてトマトクンが身をよじると、二人は回転した。トマトクンが上になった。でも、トマトクンは帝王の首から両腕を離した。何を。何をしようっていうのか。悲鳴があがった。たぶん、サフィニアだ。トマトクンは右手を自分の胸に突っこんだ。突き入れて、とりだしたのだ。

赤々と輝き、摶はく動どうする、無限の心臓を。

「武器なんていいものじゃないがな……！」

トマトクンは唇の片端を凶悪に吊りあげた。

「お前も食らってみろよ……！　こいつはまずいぞ……！」

そして、押しつける。

帝王の背中に、無限の心臓を。

「垩..

垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩
垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩垩

堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊
堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊
堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊
堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊堊
堊……………………………………………………………………………
――――――――――――――――――――――――――――――」

　トマトクンが無限の心臓を握りしめて、床に両膝をついている。無限の心臓は脈打っているし、血がしたたり、光を発しているが、さっきまでとは違う。弱々しいといってもいいくらいだ。地獄の帝王はいない。どこにもいない。存在した形跡もない。もちろん、アーマンもいない。一人もいない。アーマンの死骸らしいものもない。残骸もない。円い穴がたくさんあいた床が広がっていて、鎖のようなものでどこかに吊られ、ほんの少しだけ揺れている。人々が死んでいる。あるいは、生きている。逆じゃない。生きているか、死んでいる、じゃなくて、死んでいるか、生きている。亡なき骸がらのほうが多い。数えるまでもなく。命を落とした者の数なんてかぞえたくない。

　ヴィシュクラトーが床に舞い降りて、人の姿となった。チビグッダーも降りてくる。りりぃも、ゆっくりと。

　サフィニアがいる。ユリカがいる。飛燕がいる。カタリがいる。ロム・フォウがいる。アルファがいる。トワニングがいる。きゅーがいる。ハニーメリーがいる。ピンパーネルだっている。二度と起きあがれないだけだ。二度と。

　ベアトリーチェがいる。モリーも大丈夫だ。

　ベティがいる。リキエル。ダリエロ。まあ、あの馬鹿も。昼ラン飯チタ時イムの人たちは、どうやらけっこう生き残っているようだ。オトミも、座りこんでいるものの、生きているらしい。

　秩序の番人は──ひどい。琺瑠と、子供。羅叉。アーニャ・クルチバ。主立った番人だと、あとはチェス・ピードくらいだろうか。他は顔も名前も知らない隊士が何人か。

　ファニー・フランク馬鹿陛下と軍師ジャン・スタンバックは、しぶとく生きのびたようだ。新生太陽王国の民は数人、せいぜい十人といったところか。若者というか、年少者がほとんどだ。

　十代の男女が身を寄せあうようにして十数人も生きながらえていたのは、意外でもあり、こんな中でもやっぱりうれしくもあった。もしかすると、北ワールオック山麓の孤城で天守の警備についていた子たちだろうか。タシーデ蝶イエの顔があるから、少なくとも中心はたぶんあの子たちだ。荊王ジンワンはあの場所を守るために死んだんだっけ。

　サフィニアが、ロム・フォウが、それからアルファが、トマトクンのほうへと向かう。

　トマトクンは無限の心臓を自分の胸の中に突っこみなおすと、大の字になった。

　どこかに隠れてでもいたのか、踊り羊が軽やかに床に降りたち、モーグとエヴァンジェリンがそのそばに姿を現した。

　灰色の猫がぶるっと身を震わせ、一鳴きした。「──さて。なんとか片づきましたね」

　マリアローズは他人ひと事ごとのようにその台詞せりふを聞いた。自分がどうしているのかもよくわからない。座りこんでるんだ。膝の先に、クルルがいる。マリアローズを見上げている。

「クルル。無事だったんだ……」マリアローズは手を差しだした。クルルは、でも、頭をこすりつけてこようとしない。じっとマリアローズを凝視している。

「それで？」踊り羊が腕組みをして首をかしげた。「これからどうするのかな？」

「……これから？」と、同じことを何人が口にしただろう。マリアローズは言わなかった。思っただけだった。これから？　これからも何も──まあ、だけど、ここにずっといるわけにもいかないだろうし。帰らないといけないし。どこに帰るのって話ではあるけど。

「うむ」チビグッダーがひょいと浮遊して、移動しはじめた。どこへ行くのか。どうもこの広大な床の中央あたりのようだ。あたりというか、中央だろう。地獄の帝王が最初に巨人の姿でいたところだ。そんなに遠くない。そこにはなぜか、扉のようなものがある。床に、どうして扉が。開けたら、どこかに通じているのだろうか。チビグッダーはその扉の上で止まった。「──うぬらも集うがよい。

ここが余らの終着点だ」

　いぶかしそうだったり、半分放心しているようだったりする者もいた。でも、たいていはその終着点を目指して歩きはじめた。マリアローズも立ちあがった。気がついたら、目の前にヴィシュクラトーがいた。真珠色のきらめく肌。ありとあらゆる宝石をちりばめたような瞳。きれいだな、と思った。ヴィシュクラトーはマリアローズに右手を差しのべた。この手をとれ、とでも言うように。
「ようやく、そのときがきました」

「そのとき……？」マリアローズはまばたきをした。何のことだかさっぱりだった。

　ヴィシュクラトーはそっとうなずいた。「そなたは約束し、誓ったはずです。我が欲するものを何でも差しだすと。そのときがきたら、我ヴィシュクラトーは望みのものをそなたよりもらい受けることになっていました。忘れたとは言わせません」

「あ──」マリアローズは少しだけ笑った。「……そっか。そうだったよね。うん。覚えてるよ。え？　でも、今……？　てゆうか、きみが欲しいものって、何……？」

「これは」ヴィシュクラトーはいきなりクルルを踏み潰した。クルルは小さな鳴き声をもらして、血や臓物を撒き散らし、ぐしゃぐしゃになった。「もう必要ありません」

「ク……っ──何を……！」

「そなたが手に入れば、事は終わります」ヴィシュクラトーの右手がマリアローズの腕をつかんだ。

「マリア……ッ！」トマトクンが吼ほえた。起きあがろうとしている。トマトクンにしては動作が鈍い。まだ万全じゃないのか。

　抵抗なんかできない。だって、約束したんだ。たしかに誓った。誓いは果たさないといけない。でも、何か──何かっていうか、トマトがあんなふうに。そもそも、そなたが手に入れば？　手に入る？　僕を？　僕が望みのもの？　それって、どういう……？

「エエエエエエエエエエエエェェェェェェェェェ────────イ……ッ！」

　アジアン。アジアンが空を切り裂くように翔かけてきて、たぶんヴィシュクラトーからマリアローズをかっさらおうとしたのだろうが━瞬時だった。ヴィシュクラトーの頭部だけが、竜と化した。竜頭がくわっと口を開け、アジアンに息吹ブレスを吐きかける。アジアンは真珠色の息吹ブレスをまともに浴びて「━ツゥゥゥゥゥゥアァ……ッ!?」と吹っ飛ばされた。結果的には、それが牽けん制せいになったのかもしれない。紅くれない。紅だ。

　紅が落ちてくる。

　りりぃ。

　ヴィシュクラトーも、これはどうしようもなかった。りりぃは反りのあるブレードでヴィシュクラトーの右手首を切断し、マリアローズを抱きよせて後退した。「大丈夫か」

「━え……う、うん……てゆうか……は？　え……？」

「クソ……ッ！　ボクの役目を……！」

　息吹ブレスでボロボロになった馬鹿が跳び起きて何かわめいているが、ちょっと黙っていてほしい。何がなんだかわからない。ヴィシュクラトーも右手首の切断面を眺めて、唖然としているみたいだ。「……これはどういうことです、りりぃ。何のつもりなのですか。そなたが何を思い何を考えその所業に至ったのか、我には理解しがたい」

「姉さん……」灰色の猫が毛を逆立てている。「━あなたは……どうして」

「そうか」チビグッダーの目や鼻の穴、耳や口から、赤や黄、オレンジ色の光があふれだしている。「そういうことにゃのだにゃ、りりぃ」

「マリアローズ。初めてお前と出会い、別れる前に、あたしは言ったな」りりぃはマリアローズを床に下ろして、背に庇かばった。「命を粗末にするな、と。あたしはお前個人の敵に回らない、とも言った。あたしに気持ちというものがあるのなら、あれがそうだ。そして、今もまだ変わっていない」

　りりぃは、味方だ。僕の味方なんだ。それはわかる。あのとき、正体不明のりりぃを結局は信じたし、それは間違っていなかったと

思う。りりぃは信じられる人だ。人にはとても見えなくたって、そんなの関係ない。僕はりりぃを信じられる。それはいい。問題はそこじゃなくて━何なんだよ、これ……？　地獄の帝王はたぶん堕おちた神じゃなくて、神の一味らしくて、神ってのはたいがいろくでもなくて、どうも僕ら人間の世界を欲しがっていて、今じゃなくてもいずれ僕ら人間は地獄と、地獄の帝王と対決しなきゃいけなかったのかもしれない、それが今だった、クソグッダーたちの目もく論ろ見みのせいで今ということになってしまった、でも終わった、勝った、地獄の帝王をトマトがやっつけた、払った犠牲が大きすぎて、ちっともめでたくないけど、とにかく終わった━んじゃないの……？

　何だよ。ヴィシュクラトーが、おそらくクソグッターも、猫のジュジも、僕を手に入れたがっている？　僕を？　なんで？　僕だよ？　どうして僕みたいなやつを？　意味がわからない。普通にいらないでしょ。何の役にも立たないって。僕なんか。僕なんだよ？

　みんな足を止めて、ざわついたり、きょろきょろしたり、それから━僕のほうに視線をそそいだりしている。そんなふうに見られても、僕は説明できないんだけど。てゆうか、当事者の僕が一番、この件について誰かに説明してもらいたいと思ってたりするし。

　アジアンが駆けつけてきて、りりぃからひったくるようにマリアローズを自分のほうへと引きよせた。「━心配することはないヨ、マリア。ボクがキミを守る。何者の手からも、何があろうとも、ネ」

「グッダー。ヴィシュクラトー」トマトクンが歩いてくる。その一歩一歩が途方もなく重い。どくん…………どくん……と、あの心音が聞こえる。トマトクンの全身から、また蒸気が立ちのぼりはじめている。「おまけに、ジュジもだ。おとなしく手を引け。そうすれば、俺も貴様らを殺さずにすむ」

「おいおい……」ダリエロがペッと唾を吐いて、こめかみに指を突きつけた。「労をねぎらって宴会の一つでもおっぱじめるどころか、いきなり仲間割れかよ。てめぇら、脳がイッてんじゃねぇのか」

「黙れ」クソグッダーは鼻息ならぬ鼻光を噴きだして、首を左右に曲げた。「よいか。黙れ。余が許可してつかわさぬかぎり、口を開くな」

……あれ？　なんか──気のせいかな。クソグッダー、大きくなってない？　育ってるような……気のせいじゃない。大きくなっている。ちょっと前まで四歳児くらいの見た目だったのに、五歳児か六歳児──いや、もっとか。八歳か九歳くらいには見える。こうしている間にも、すくすくと育って……背がのび、体格が、顔つきが変わって、十二、三歳の少年、しかも、認めたくないけど、クソグッダーのくせに、絶世の美少年と表現しても言いすぎにはならないような、やたらと見目形のいい男の子になってしまった。

「まあまあ」猫が舌でぺろっと口の周りを舐めた。「やめましょうよ。グッダーも、ディオロットも。それから、姉さんも。そんなに殺気立つ必要がどこにあるんです？　ないでしょう？　話しあいましょうよ。ぼくらはわかりあえるはずだし、問題を解決するために、妥協できるはずだ。そう。ぼくらは大きな問題に直面しているんです。それをまず、はっきりさせようじゃありませんか。──つまり、この世界のことです。この壊れた世界、今は亡き地獄の帝王の、神気どりの不貞の輩やからたちのせいで、めちゃくちゃになってしまった世界、この世界は、回復されないといけません。そうは思いませんか？　その点について、ぼくらの意見は一致するはずです。そこで、問題です。じゃあ、その方法は？」

　床にあいた穴から地上を見おろす。すり鉢ばち状の大ギガボ穴ロス。あそこから地獄の悪魔をふくめた異界フリー生物クスたちがあふれだして、僕らの世界を席巻した。僕ら人間は奪われ、殺され、蹂躙された。たしかに、僕らの世界は壊れてしまった。元に戻せるのなら戻したいよ。戻してもらいたい。だけど、どうやって？　見当もつかない。そんなの無理でしょ。不可能だ。

「あるんですよ、方法が」と猫が笑みをふくんだ声で言った。
「たった一つだけ」

　ヴィシュクラトーが斬り落とされた右手を拾いあげて、切断面に押しつけた。驚いたことに、すぐにくっついてしまった。ヴィシュクラトーはその右手の人差し指で──扉を指し示した。「あれこそが我らの希望です、人の子らよ。そなたらには立ち入ることはできませんが、我ら〝登レジ録スト者ラ〟にはそれができます」

「超越マス執行者タールの間ーム」クソグッダーは何か大切なものを捧げ持つように両の掌を上向けて、扉を見おろした。「この扉をくぐれば、余らは神を、管理者どもを超こえて全権を掌握し、全世界を思うままに創造しなおすことができるのだ」

「すてきでしょう？」猫が尻尾を振っている。「じつに、すてきだ。すばらしい」

「人の子らよ」とヴィシュクラトーが呼びかける。

「紛まがい物どもよ」とクソグッダーが言いなおした。「うぬらは余の役に立った。その功績に余は報むくいよう。余はうぬらを消去せず、これより始まる創世を見せてつかわす」

「太っ腹ですね」と猫がびっくりしたような声を出す。「さすがは王様だ。彼らは所詮、ぼくら人に似せてつくられた紛い物でしかないのに、そこまでの温情──恩情と言うべきかな。どっちもたいして変わらないか。とにかく、そこまで情けをかけてあげるっていうのは、グッダー、あなたって本当はけっこうやさしいんだ。素直に感心しちゃいますね」

「計画に支障はないでしょう」とヴィシュクラトーが淡々と言った。

「……待ってよ」

　僕は頭を振る。整理できない。あいつらが何を言っているのか。紛い物？　人に似せてつくられた？　ぼくら人に？　猫がそれを言うのか？　紛い物……？

「何だよ、それ。紛い物って。何、言ってるんだよ。誰に向かって言ってるんだよ。まさか、僕たちのことじゃないよね……？　だって、僕たちは……人間だよ？　人間離れしてるのはきみたちのほうじゃないか。僕たちは、ただの人間で……」

　りりぃを見る。りりぃは僕のほうに顔を向けない。トマトに目をやる。トマトは僕の視線をしっかりと受け止めてくれる。目をそらそうとはしない。でも、何も言わない。答えてくれない。死人みたいな顔をしている。トマトも否定してくれない。それはすなわち、ジュジやクソグッダーが嘘をついてるわけじゃないってことを意味する。そう考えざるをえない。僕としてはそう考えてしまう。僕たちは、人に似せてつくられた紛い物……？

「半永久的避難所Permanent Haven」猫はその場に腰を落ちつけて、後あと肢あしで耳の根元を掻かいた。「もともとこの世界は、巨大にして虚うつろな避難所なんです。ぼくら人間の──〝登レジ録

スト者ラ〟、避難する資格を与えられた者たちのためにつくられた、避難所なんですよ。ぼくらが生活していた世界は、どうしようもなく壊れてしまった。今のこの世界のようにね。あるいは、もっとひどかったかもしれない。ぼくらはやむをえず逃げこんできた。そこには理想の世界が用意されているはずでした。穏やかでコントロールされ、不足がなく創造的な、完璧な世界が。ところが、いくつかの手違いで、世界は変わってしまった。まず、準備不足だった。時間が足りなかった。ぼくらがもといた世界がＡＤ兵器による二度目の同時多発攻撃で壊滅的打撃を受けることが決定的になったので、ぼくらは完璧な世界ができあがる前に移住することを余よ儀ぎなくされた。もちろん、完璧な世界の設計図はできあがっていました。そこで、この半永久的避難所Permanent Havenの中枢である管理者、万能の多重人格プログラムに──ああ、人格といっても、これはいわゆる人間性を指しているわけじゃなくて、思考し、決断することができ、人間をふくめた多様な生物の感情をもシミュレート可能だということで人格と称されていたのですが、この管理者に世界の創造を一任することになった。そもそも、世界の創造に関わる作業は膨大と表現するのも馬鹿馬鹿しいほど膨大で、人の手には余る。だから、人間の監督下で、未み曽ぞ有うの処理能力を持つ管理者が行うことになっていたし、管理者にその性能を十全に発揮させることにより、作業を高速化させる目め処どもついたので、これは問題ないはずだったんです。そんなわけで、ぼくらはしばらくは何もなくて退屈でしょうがない中間地点で待ち、順次、半永久的避難所Permanent Havenに移ってきたのですが、きてみてびっくり。話がぜんぜん違う。管理者は──管理者たちは、設計図に従わなかったんです。設計図に不備があったのか。管理者たちが異常をきたしたのか。それとも、管理者たちの能力がぼくらの想定を超えていたのか。おそらくそのすべてでしょう。管理者たちは暴走し、ぼくらが待ち望んでいた完璧な世界とは程遠い、こんな世界をつくりあげてしまった。ぼくら〝登レジ録スト者ラ〟以外にも、人間を模したモジュールが配置される予定は、もとからありました。〝登レジ録スト者ラ〟の数は全世界で十万人といったところで、半永久的避難所Permanent Havenの規模に比して数が少なかった。ぼくらにもお手伝いさんが必要だったんです。でも、どうやらお手伝いさんなんてものじゃない、やけに精巧な紛い物たちがこの世界にはたくさんばらまかれていた。楽園のはずだったのに、この世界の環境は過酷でした。〝登レジ録スト者ラ〟も、紛い物たちも、とくに移住初期は信じられないほど死んだ。死ぬなんて聞かされていなかったのに。そう。ぼくら〝登レジ録スト者ラ〟は半永久的避難所Permanent Havenで、その名のとおり、半永久的に仲よく幸せに暮らすはず

だったんです。ところが、ぼくらがさらされたのは恐ろしい弱肉強食。生き馬の目を抜く生存競争。誰が〝登レジ録スト者ラ〟で、誰が紛い物かも、すぐにわからなくなった。この世界は、ぼくら〝登レジ録スト者ラ〟のためにあるはずなのに。管理者たちがそう仕組んだんでしょう。たぶんそのころから、管理者たちはこの世界を自分たちのものにしようと企んでいた。でも、簡単にはできなかった。管理者たちはあくまでぼくら人間の従僕なんですから。基本的には、ぼくらに仕えるようにプログラムされているんです。ぼくらに危害を加えないように、いくつもの禁忌タブーを持たされている。管理者の人格が分裂に分裂を重ねて、ああまで多様な神が生まれたのは、きっとその禁忌タブーを回避するためでしょうね。ある神はいまだに禁忌タブーを持ち、ある神はまったく持っていない。神は分化し進化して、そのうち管理者から離脱する者まで現れた。堕ちた神というやつです。ルシファ、サタンは、堕ちた神を装って管理者の利益のために行動していたようですが。とにかく、気がついたらこの世界においては不死のはずのぼくら〝登レジ録スト者ラ〟まで死すべき宿命を背負わされていて、偶然や必然から様々な手段でそれから逃のがれることができたのは、たった七人だけでした。ぼくと、姉さん、グッダー、ヴィシュクラトー、ディオロット、ルヴィー・ブルーム、そしておまけのＳＩＸ。ぼくらだけが、半永久的避難所Permanent Havenに移住してきたことを記憶していた。わかりますか？　あとの人間は全員、人間じゃない。管理者がつくった人間型のモジュールです。きみたちは全員、そうなんです。突然のことで受け容いれられないかもしれませんが、これが真実です。きみたちにもいろいろと言いたいことがあるかもしれない。でも、きみたちは紛い物です。きみたちにもきみたちなりの人生があると主張したいでしょう。ですが、やっぱりきみたちは紛い物なんですよ。違うと思いたい？　だったら、あの扉を見てください。見えますか？　扉のことじゃありませんよ。扉に刻まれている印です。わかりますか？　まあ、見えないでしょうね。見えないんですよ。あの印は〝登レジ録スト者ラ〟にしか。本物の人間にしか。そう決められているんです。ぼくら〝登レジ録スト者ラ〟にだけ識別可能な刻印なんですよ。あの扉の向こうにある超越マス執行者タールの間ームは、最大の禁忌タブーです。あれだけは、管理者がどれだけ自分を分割して禁忌タブーを削除しようとしても消すことはできない。このシステムの根幹に埋めこまれている非常エマージ事態エンシーに対応するための最終ラスト措置メジヤー。〝登レジ録スト者ラ〟が生存するかぎり、あの扉は最低でも一つ、この世界に存在しなければならない。〝登レジ録スト者ラ〟は超越マス執行者タールの間ームで半永久的避難所Permanent Havenの機能を停

止することができる。他のありとあらゆる操作を行うことができる。管理者もこの操作に逆らうことはできない。半永久的避難所Permanent Havenのシステムに内部から干渉するには、この方法しかないんです。ぼくらはやりなおすつもりですよ。こんなでたらめは世界はもうまっぴらだ。設計図はシステム内にある。ぼくはだいたい知ってるんです。ぼくの父親が、半永久的避難所Permanent Havenの設計に関わった基コア幹エン技ジニ師アの一人だったのでね。父からデータを盗みだして、閲覧していたんです。父も母も〝登レジ録スト者ラ〟にはなれませんでしたが。ぼくたちに資格を譲ったんですよ。ありがとう、父さん！」

—印。

扉の、印。

ない。そんなものは、ない。見えない。印なんて。

紛い物。僕たちは、人間じゃない。半永久的避難所Permanent Haven。ここが？　この世界が……？

「気にすることはないと言っておる」クソグッダーが目を細めて僕たちを見下している。奇妙にやさしい眼差しで。「本来ならば、うぬらは新たな世界に不要ゆえ、当然のことながら消去する。しかし、この余がうぬらを手て許もとに置いてやろうというのだ。新たな世界におけるうぬらの役割は未定だが、何かふさわしい仕事と場所を与えてつかわす。うぬらはそこで天寿を全うするがいい。他のことは考えるな。考えても無駄だ。むろん、余を妨さまたげようとしても無駄だ。邪魔などできぬ。する意味もない。うぬらは生きよ。穏やかに。安らかに。うぬらはここまできた。余からの褒ほう美びだ。紛い物どもよ。うぬらはよくやった」

「拒否する……！」

高らかに、明瞭に、堂々と、アジアンが宣言した。

「そんな褒美はいらないヨ！　何だか知らないが、やりなおさせたりはしない！　どんなふうになっても、この世界はボクたちのものだ！　キミたちの自由にはさせない！　ボクらのことは、ボクらが決める……！」

クソグッダーがアジアンを見た。両眼から、ピンク色の光線。放

たれたと思ったときにはもう、二条の光線がアジアンの両腕を撃ち抜いていた。「──クゥゥゥ……ッ」

「威勢のいいことだ。人形め」クソグッダーは胸の前で合掌した。その背からさらにピンク色の光線が発せられて、瞬時にアジアンに達する。右脚。左脚。右肩。左肩にも。アジアンは立っていられなくなる。倒れかかる。「っ……！」マリアローズはとっさにアジアンを抱きとめた。「グッダー！　貴様……！」りりぃが飛びだす。残像。残像。りりぃの残像が列をなす。「かあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ……！」クソグッダーは自分の前に爆炎の壁をつくった。りりぃはかまわず突っこんでいったが、どうなったのか。「貴様らの目もく論ろ見みが何だろうと……！」トマトクンはヴィシュクラトーに躍りかかった。「貴様らをぶちのめせばいいだけの話だ……！」『それが可能だとでも？』ヴィシュクラトーは竜身に変じて飛びあがった。『思いあがりも甚はなはだしい』「やってみればわかる……！」トマトクンは跳躍する。でも、羽が十四枚もあって飛ぶことができるヴィシュクラトーに届くのか。届いた。「ぬうううううあああああああああああああああ……！」パンチだ。トマトクンはヴィシュクラトーの横っ腹にパンチを食らわせた。ヴィシュクラトーは揺らいだが、すぐさま尻尾でトマトクンを打ぶとうとする。トマトクンはその尻尾にしがみついて抱かかえこみ、足をかけて引っぱった。「うううううああああああああああああああああああ……！」

　痛いのか。苦しいのか。ヴィシュクラトーは暴れている。「……援護します……！」サフィニアがヴィシュクラトーよりも高い位置まで浮きあがって、稲妻を浴びせる。藍色の炎を叩きつける。ベティがすっ飛んできた。「アジアン……!?」「……大丈夫サ。ボクはなんともない。これくらい……ッ」「て言うけど……！」マリアローズは唇を嚙む。アジアンの両腕両脚はクソグッダーの光線で穴を開けられ、激しく熱されて、ちぎれかけた。今は腕や脚の形をしていない。右腕は黒い管だし、左腕は黒こく鱗りんに、両脚は黒い繊維状の何かに覆われていて、必死に穴や傷をふさごうとしているように見える。でも、はかばかしくはないようだ。羅叉や馬鹿陛下、ユリカ、モリーやベアトリーチェたちが、逃げろ、下がれ、退避しろとさかんに叫んでいる。りりぃは残像を振りまいてクソグッダーを追いまわしているが、やつはピンク色をした球形の光に包まれている。その光がりりぃのブレードを防いでいるみたいだ。「ゲヒヒヒヒヒ……！　りりぃ！　うぬでは余を殺せぬ……！　うぬの斬撃では、余の魔エナカジー防フイー壁ルドを破ることはできぬの

だ……！」「破れないかどうかは、そのうちわかる……！」「──ぬうあ……っ！」トマトクンがヴィシュクラトーの尻尾から振り落とされた。ヴィシュクラトーはＧＡＡＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨと息吹ブレスを撒き散らす。サフィニアは回避するしかない。「ベティ、加勢を……！」アジアンは黒い管を動かして自分の腹のあたりを這はわせた。「──ボクにはまだ、使える力がある……！」

「ほんとに、あんたは……！」ベティが飛びたった。アジアンは何をしようとしているのか。そんなこと、わからない。僕にわかるわけがない。だけど、思いあたる理由なんかないけれど、よくない感じがした。とはいえ、止めることなんてできただろうか。できなくても、止めなきゃいけなかったんだ。アジアンがその名を呼んだ。「──ヤヌゥ……！」

　アジアンの肋ろっ骨こつの下あたりがガバッと大きく横に裂けた。そこには肉も、骨も、内臓もない。血も流れなかった。何もない。ただの穴だ。黒々とした、果ての見えない空洞が広がっている。そう見えたのは一瞬だった。

　出てきたのだ。

　そこから、白い、白すぎるほどに白い手が。

　左右の手が、穴の縁ふちを、つまりアジアンの腋わきのあたりをつかんで、腕の力で身体からだを持ちあげたのか。

　穴の中から頭が、首が飛びだした。それから、肩が、上半身が。

　その男は、アジアンの中から這いだしてきた。

　男は真っ白い服を着ている。服だけではなくて、体毛も白い。肌も抜けるように白い。爪や唇は艶つやのない黒だ。それだけでも異様だが、男の目が際だって普通じゃない。

　白目が、白目なのに黒く、真紅の虹彩と黒い瞳孔の境目が金色に輝いているのだ。



「我が愛mai□し子よdear。久しぶりだね」

　アジアンはただ目を瞠みはってその男を見つめるだけだった。唇が、顎が、震えている。

「どうしたのだい、アジアン。何を驚くことがある？」男は屈かが

んでアジアンの髪の毛をつかんだ。「私はずっとおまえの中にいたのだよ。だって、おまえが私を中に入れてくれたのだろう？　おまえも私を感じていたはずだよ。もしかして、気づかなかったのかい。それはそれで、迂う闊かつなおまえらしいと言えるかもしれないね。ともかく、礼を言うよ、アジアン。おまえは立派に役目を果たしてくれた。だがもういい。おまえの仕事は終わった。長かったね。お疲れさま。おまえにはもう必要ないだろうから、もらうよ、アジアン」

「やめ──」マリアローズはそう言っただけだった。何もできなかった。ただ見ていた。

　男がアジアンの右腕と左腕の付け根あたりに両手を突っこんだ。そこにある何かを握りしめて、引っぱった。

「ッ……！」たぶんそのときになって、やっとアジアンはあらがおうとした。でも、遅かったのか。男がアジアンから引きずりだす。黒い管や、黒い鱗うろこに覆われた蛇のようなものや、黒い繊維状の何かや、それから、黒々とした空洞を。奇妙な光景だった。どうやったって引き剝はがすことも引き抜くこともできなさそうなそれらが、実際、ああやって引きずりだされている。そして、次々と男の皮膚に吸いこまれて馴な染じんでゆくのだ。

「ふむ」男は手を握ったり開いたりして、うなずいた。「一つ残ったか。それはよほどおまえに懐なついているようだね。それか、おまえが欲しいのかな。まあいいだろう。それがなくなったら、おまえはとても生きてはいられないだろうしね。そうなったら、私としてもさすがに忍びない。親としてね」

「……ッ……ルヴィー……ブルーム……！」アジアンは起きあがろうとした。できなかった。アジアンはもともと体格がいいほうじゃない。男としては華きゃ奢しゃと言ってもいいくらいだ。でも、こんなに弱々しくはなかった。細身でもしなやかで、芯しんの強さのようなものを感じさせた。今は違う。ただ細いだけで、簡単に折れてしまいそうだ。病やみ衰おとろえているかのように瘦せたその身体を、黒い皮ひ膜まくのごときものが覆っている。背中には翼。黒い翼。

「いずれにせよ、おまえにはもう用はない、アジアン」ルヴィー・ブルームは右手を持ちあげた。その右手が黒い管となって、ほどけ──マリアローズをとらえた。「鍵よ。私が欲するものはおまえだ」

　あまり苦しくはない。黒い管は、アルカーディアは、むしろやさしくマリアローズの全身を締めつけている。

　アジアンがルヴィー・ブルームを、それからマリアローズを見上げた。「鍵かぎ……？」

　そんな──訊きかないでよ。僕に訊かれても。鍵って。知らないよ。何なんだよ。

「扉を開ける鍵だよ」ルヴィー・ブルームは黒い唇を微笑ませた。「おまえが鍵なのだ。おまえがいなければ、扉は開かない。正確には、おまえでなくてもいいのだがね。鍵は常に一つしか存在しない。失われれば、新たな鍵が生成される。超越マス執行者タールの間ームのセキュリティーだよ。〝登レジ録スト者ラ〟といえども、簡単に出入りできるようでは困るからね。証拠を知りたいかい。といっても、おまえには確認できないよ。わたしたち〝登レジ録スト者ラ〟にしか見えない。それはおまえの瞳にある」

「瞳……」

「そうだよ。おまえの瞳に印が刻まれている。扉にあるものと同じ印がね。それから、鍵には他にも特徴がある。鍵は人間にかぎらない。瞳さえ持っていればどんな生き物も鍵になりうる。ただし、鍵は生殖できない。鍵の性質が遺伝したら鍵が増殖してしまうからね。おまえもそうだろう？　生殖器を持たない。雄おすでも雌めすでもない。それに関係していると思われるが、個体として劣弱であることが多いようだ。少なくとも、私たちが観察してきた何体かの鍵はいずれもそうだった。なお、性能は低いのに、外見は人目を引くように生まれつくらしい。これはもしかすると、いざというときに〝登レジ録スト者ラ〟が見つける手がかりになるようにということかもしれないな。非常に些さ細さいな親切にすぎないがね。鍵よ。おまえはすべての条件を満たしているのだ。もちろん、ディオロットも知っていたのだよ」

　僕は、

　鍵？

　生殖できない、

　劣弱で、

　人目を引くように、

　外見、

　鍵、

　ああ、だから、

　だから、お父さんとも、お母さんとも、似ていなくて、

　僕は、

　鍵、

　僕が死んだら、新しい鍵が、生成される、

　鍵、

　僕は、

　ただの、鍵、

　トマトも、知っていた……？

　そういえば、初めて会ったとき。トマトは僕を妙な目つきで見つめた。両目をわずかにすぼめて、何か言おうとして、やめた。トマトだけじゃない。りりぃも僕をじっと見て、トマトに突っかかった。たしか、貴様はもう興味がないとばかり思っていたのだがな、とかなんとか。トマトは、そういうつもりじゃない、と否定した。これは偶然だ、とか。ジュジも──あのときはルイ・カタルシスを名乗っていたけど、僕をやけにまじまじと眺ながめて、満面に笑みをたたえた。知ってたんだ。気づいていた。僕が鍵だって。だから？

　だから、トマトは僕を……？

「聞くな、マリア……！」トマトがヴィシュクラトーに踏みつけられている。踏まれて、その足をはねのけて、トマトは叫んだ。「そんなやつの話を聞くことはない……！」

　わかってる。わかってるよ。違う。そんなことない。僕は鍵で、いつか利用するつもりで──もしそうだったら、トマトは今、あんなふうに戦ったりしない。トマトはこいつらの一味じゃない。りりぃ

もそうだ。

　僕を、かわいそうに思って、鍵だから、哀れんでくれたのかもしれないけど。

　そうじゃない。トマトはそういう人じゃない。わかってる。本当にわかってるんだよ。ただ、どうしてもそう思ってしまいそうになるだけで。

　だって、僕は、鍵なんでしょ……？

「ついでに、種明かしをしよう」ルヴィー・ブルームはトマトを一いち瞥べつした。「鍵よ。私は私がつくった生き物たちにおまえを見張らせていた。おまえの身に何かあれば、すぐにわかるようにね。さいわいヴィシュクラトーがマグニデア・プールの様子を把握しているので、おまえの肉体とおまえのアニマを同時に監視していれば、おまえが死んでも次に生成される鍵を捕捉できるはずだ」

　クルル。

　あんな生き物、誰も見たことがない。博識な魔術士エリオットでさえ知らなかった。

　僕を監視していた。

　いつも、僕は見られていた。

　鍵として。

「……もう、よせ」アジアンが四つん這ばいになる。立ちあがろうとしている。「やめろ。それ以上、何か言ったら……！」

「そして、これだよ」ルヴィー・ブルームは左手の人差し指をアジアンに向けた。「私がつくった、我がmai愛し子ーdear。私を基礎とした発生体に、鍵に特有の遺伝情報を組みこんで生みだした。残念ながら、鍵としては機能しなかったがね。私はかつて鍵を研究し、鍵をつくろうとしたのだ。失敗したが、アジアン、おまえが私にもたらされた」

　アジアンと、見つめあう。

　知らなかった。知るはずもなかった。

　僕ときみが、こんなふうに結びついていたなんて。

「アジアン、おまえは失敗作だったので、私は有効活用することにした。最終的には、おまえは完璧とは言いがたいが、ある程度までは望ましい成功例となったのだよ。おまえはとても、とても役立ってくれた。まさか、鍵のなり損そこないが、鍵と出会うとはね。おまけにおまえは、何度も身を挺ていして鍵を守ったのだろう？　似た者同士は反発するとも、惹ひかれあうともいう。おまえたちにとって、おまえたちの中にある共通のものは引力として作用したのかもしれないね。私が意図したことではないとはいえ、アジアン、おまえはよくやった。私が命じたわけでもないのに鍵を探しだし、ここまで持ってきてくれたのだ。私のもとへ。我が愛mai□し子よdear。完璧ではなくても、アジアン、おまえは最高だ」

「ち、がっ──」と、アジアンがあえぐように言った。

　あの日。

　きみは、なんて言ったっけ。

　──一目惚れしたんだ、キミに。

　そう言った。覚えてる。今でも、はっきりと。

　──ボクはキミという存在に惹かれ、恋に落ちた。つまり、これは運命なんだヨ。

　──キミがたとえ、犬だろうと猫だろうと異界フリー生物クスだろうと大脂羽蟲ゴツキーだろうと、ボクはきっとキミを好きになっただろう。

　──キミを愛するために、キミだけを探しだしただろう。

　──それがたまたま今だった。それだけのことサ。

　運命。運命だった。仕組まれた、運命。僕が鍵だから。きみは鍵としてつくられて、鍵にはなれなかった、鍵のなり損ないだから。

　なんでだろう。

　どうしてこんなに、かなしいんだろう。かなしい。そうだ。僕は、かなしい。かなしいって、こんなにからっぽなんだ。僕には何

もないんだ。僕は何も持たされていないし、何かを持つこともできない、僕にはその資格がない、その能力もない、何もない。僕は、かなしい。だからかなしいんじゃなくて、僕はただただ、かなしい。かなしい。

「鍵よ。だが、私はおまえを哀れに思っているのだよ。心の底から」ルヴィー・ブルームは眉をひそめた。いくらか気の毒がっているかのように。「何しろ、おまえは人間に似ているが、人間ではない。人間の紛まがい物ですらない。おまえはただの鍵なのだ。道具アイテムだ。おまえほど哀れなものはどこにもない。鍵よ。おまえはかわいそうだ」

　僕は、目をつぶる。かなしくて、僕は、もういいや、と思う。もういいや、と思う自分のことすら、どうだっていい。黒い管たちに、アルカーディアに身を任せる。僕は、鍵。鍵でしかない。もう僕は、どうなってもいい。どうでもいい。

「おまえの肉体とアニマさえそこにあれば、おまえは鍵として機能するだろう。アニマはすぐには肉体から離れない。もはやおまえの生き死にさえ問題ではないということだ。かわいそうに。おまえがあの扉の上に立って、扉が開いたとき、おまえは、鍵は、どうなるのか。それはわからない。おまえは消えてしまうのかもしれない。鍵として、鍵のまま、そこにあるのかもしれない。前者の可能性が高いだろうと私たちは予想しているが、いずれにしてもおまえはかわいそうだ。しかし、鍵よ。おとなしく従ってくれれば、私たちはおまえを害したりはしない。大切に扱おう。おまえは鍵であり、かわいそうだからね」

　好きにするといい。

　僕は、鍵なんだし。

　身体からだから、力が抜けてゆく。それでも、僕は立っている。アルカーディアに支えられている。

「……ひとつだけ、やくそく、してくれない？」

　僕の口が、僕のものじゃないかのように、勝手に動いた。

「できる約束とできない約束がある。できることならば、約束するにやぶさかでない」

「もう、だれも、きずつけないで」

「それは──」

「マリア」

　目を、開ける。アジアンが、僕をとらえているアルカーディアに、すがるように手をかけている。アジアンは、立つことさえ満足にできていない。何年も寝たきりだった人みたいに、脚が萎なえているようだ。薄青色の瞳が、僕を見ている。アジアンが、アルカーディアを伝い登るようにして、僕に向かって手をのばす。

「マリア。言っただろう。ボクはキミが拒否しようと、たとえキミがボクを憎もうと、何度でも、何度でも、その機会があれば必ず──」

「邪魔をするな、アジアン」ルヴィー・ブルームがわずかに首を振る。アルカーディアがうごめきだす。何本かの黒い管がアジアンに絡からみつこうとする。

　アジアンは唇の両端をつりあげる。「ボクの言うことを聞け、アルカーディア。ボクが欲しいんだろう。ボクをやる。だから──戻ってこい。ボクの中へ」

　たぶん、一瞬、アルカーディアは逡巡した。

　でも、それは一瞬だった。

　アルカーディアはおぞましい歌声を響かせながら、一斉にルヴィー・ブルームの右腕から抜けだして、アジアンに群がり、その右腕に収まってゆく。ついでに、僕もアジアンのほうへと引きよせられる。僕はアジアンに抱きしめられる。

「アジアン。悪い子だ」

　ルヴィー・ブルームの左腕が黒こく竜りゅうの首のようなジャシュギシュとなって襲いかかってくる。アジアンは僕を抱いたまま飛びのく。背中の黒こく翼よくを羽ばたかせて、ジャシュギシュから逃のがれる。「──ボクは、必ずキミを救うヨ、マリア。キミがどう思おうとネ。始まりなんかどうでもいい。何があっても、ボクはボクだ。変わらない。ボクだけじゃない」

　きみだけじゃ、ない。

「マリア……！」ユリカの声が聞こえた。「マァーリアロォォーズ……！」カタリ。「くうううう……！」きゅーだ。「マリア……！」ロム・フォウ。「うぉんおん！」アルファ。「マリアローズ……！」ハニーメリーも。「ヌオオオオオオオオォォォォォォ……！」髭。飛燕も駆けてくる。「今、行くぞ、マリアローズ……！」リーチェも。モリーまでリーチェの後ろに。危ないよ。ダメだよ。こなくていいんだよ。だって、だって、僕は鍵なんだから。鍵でしかないんだから。ああ、でも。だけど、僕が鍵だとしても。ただの鍵でも。たとえ、僕が犬だろうと猫だろうと異界フリー生物クスだろうと大脂羽蟲ゴツキーだろうと。何だろうと。

　ダリエロたち、昼ラン飯チタ時イムの面々も、彼らの頭領マスターの名を呼びながらこっちに向かってくる。琺瑠や羅叉、アーニャ・クルチバ、チェス・ピードといった秩序の番人たちも。馬鹿陛下やジャン・スタンバックまで。

「なぜだ……！」猫が、ジュジが叫ぶ。「姉さん……！　どうしてぼくと一緒にきてくれないんですか……！　ぼくはいつまでも幸せに、安全に、姉さんと暮らせる世界をつくりたいんだ……！　姉さんのためなんだ……！　それなのに、なんで……！」

「余計なお世話だ……！」りりぃは魔エナカジー防フイー壁ルドで固く身を守っているクソグッダーを攻めて、攻めて、片時も手を休めずに攻めつづけている。りりぃがちょっとでも気を抜けば、クソグッダーは反撃に転じるか、他の誰かを攻撃するだろう。「いいかげん、あたしから卒業しろ……！　あたしはあたし！　お前はお前だ……！　あたしにはあたしの世界がある！　こんな身に成り果てても、あたしはあたしなりにそれを手に入れた……！　あたしは幸せだった……！　まだ、あたしは夢を見られる……！　あたしはこれでいい……！」

「愚かな……！」クソグッダーが歯ぎしりをして、怒鳴る。「これでいい、だと……!?　たわけたことを……！　余らには知恵があり、知識がある！　すべての誤りをまっさらにして、第一歩を踏みだすところからやりなおせるのだ！　現状より遥かに良好な世界を実現できることは間違いないのだぞ……！　機会があれば、いかさぬ手はない……！」

「だから……！」トマトが、ヴィシュクラトーの頭上にいる。しが

みついて、ヴィシュクラトーの右目に手刀を突き入れた。『イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！』「──良好だとか何だとか……！　貴様らが勝手に決めるなと言ってるんだ……！　貴様らなんぞに決定権はない……！　この世界で生きて、死んでいく者たちがいる……！　何かを決めるとしたら、その全員だ……！」『我らのためにつくられた紛い物に……！』ヴィシュクラトーは頭を豪快に振った。トマトが振りはらわれる。空中に投げだされたトマトめがけて、ヴィシュクラトーが真珠色の息吹ブレスを吐きかける。『何が決められるというのです……！』「──ぐあああっ……！」よけられない。トマトは息吹ブレスを浴びて、身体の表面だけじゃない、筋肉、骨、内臓まで、すっかりというわけじゃないけれど、融解した。それでも、無限の心臓は健在だ。赤々と輝き、脈打って、トマトの身体を再生させてゆく。そうはいっても、あの状態では身動きもできない。再生しながら落ちてゆくトマトを、サフィニアが「……っ……！」とキャッチした。ヴィシュクラトーが息吹ブレスを立てつづけに吐いてサフィニアを狙う。サフィニアは急上昇と急旋回、急降下を繰りかえして息吹ブレスをかわす。「何が決められるかって……⁉」ベティ。ベティだ。ベティがヴィシュクラトーの真上に躍りでた。「何だって決められるわよ！　本物の人間だか〝登レジ録スト者ラ〟だか知らないけど、あんまりあたしたちを舐めないことね……！」

　ベティの身体から熊のような腕が、大おお蜘ぐ蛛ものような脚が、巨大蜥蜴とかげのような尻尾が、悪魔たちの、異界フリー生物クスたちの四し肢しが突きだす。それらは絡まりあって、ひとかたまりとなり、全長数十メーテル、いや百メーテルに及ぶだろう一本の腕となる。ベティはその腕でヴィシュクラトーを殴りつけた。「──あんたたちなんかに……！　紛い物呼ばわりされる覚えはないわ……！」『Ｇｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！』なんて力だ。ヴィシュクラトーの巨体が床に叩きつけられる。その寸前に、ヴィシュクラトーは人身に変じた。でも、勢いは殺せない。ヴィシュクラトーは床にぶつかって、すぐ浮きあがった。「……何を言おうと。考えようと。そなたたちは紛い物です。我らが扉を開けて一言命じれば、そなたらは停止し、次の操作で完全に消去される」「できたらの話でしょう……⁉」ベティはヴィシュクラトーに雷をお見舞いする。何回も。特大の雷らい霆ていを。「させないわよ……！　あたしが、お姉様が、あたしたちが見てきた世界……！　切り開いてきた道……！　追い求めてきた魔術……！　出会った仲間！　別れた友

だち……！　ぜんぶ、紛い物でも、偽者でもない……！　本物じゃないっていうなら、本物にしてやるわ……！」「そなたは知らないのです……！」ヴィシュクラトーは雷霆を手で、尻尾で払いのけ、ふたたび竜身となった。『我らの絶望を！　その暗闇の中で我らが見つけた希望を……！　それをつかみとるために、我らはここまできた……！』

「何が希望だ……！」再生を終えたトマトを、サフィニアが投げつけるように放した。トマトはヴィシュクラトーの頭にとりつく。さっきは右目。今度は左目だ。トマトの手刀がぶちこまれる。「そんなもの……！」『アアアアアアアアアアイイイイイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアァァァァ……！』「俺が粉々に砕いてやる……！」「──ディィィィィィィィィオロットォォォォォォォ……！　貴様ぁぁぁぁぁぁぁ……！」クソグッダーが爆発した。比ひ喩ゆじゃなくて、本当に大爆発したのだ。「──くっ……！」りりぃが吹き飛ばされた。爆炎をまとったクソグッダーがトマトめがけて突撃する。「サフィニア！」「はい……！」異キ種混メ合体ラを引っこめたベティとサフィニアが、クソグッダーの行く手に猛風雪の壁をつくる。「ぬぅ……!?」クソグッダーが壁に阻はばまれている間に、りりぃが態勢を立てなおして追いついた。「あきらめろ、グッダー……！　お前は世界を奪えない！　奪わせはしない……！」「奪うのではない……！」クソグッダーは即座に魔エナカジー防フイー壁ルドを展開してりりぃのブレードを弾く。「もともと余らのものだ……！　取り返すのだ……！」「ちょっと迷ったけどね」と、クソグッダーの魔エナカジー防フイー壁ルドに手をふれる者がいた。踊り羊だ。「やっぱり、クルオはこっちにつくことにするよ。ベティもいることだし」「なっ──」クソグッダーが目を瞠みはった。魔エナカジー防フイー壁ルドが溶けてゆく。クルオは自分の目を指さした。「しばらく見てたからね。仕組みくらいわかったよ。わかれば、壊せる。クルオは魔術士だからね」

　魔エナカジー防フイー壁ルドを失ったクソグッダーに、残像を引き連れるようにしてりりぃが迫る。それでもクソグッダーは加速して、りりぃのブレードをよけた。しかしその途端、青白い輝きに押し流された。「ぐうお……!?」（新たな世界は我らの手でつくればよい。我らの）（わたしとお師様の魔術によって）（うむ）（はい、お師様。おっしゃるとおりです）超賢者モーグとエヴァンジェリンだ。クソグッダーが身をよじる。りりぃのブレードがクソグッダーを──その左腕を斬り落とした。「つぅ……ああああああっ！」また爆発。グッダーは爆炎を隠れ蓑みのにして逃れるつもりなのか。

逃がさない、とばかりに、りりぃだけじゃない。踊り羊も、モーグとエヴァンジェリンもクソグッダーを追いかける構えだ。トマトは、両目を傷つけられて身み悶もだえているヴィシュクラトーにしがみついて、「ぬうああああああ！　どぅおらああああ！　うおあああ！　だああああ！　すああああ……！」と殴りまくっている。サフィニアとベティは魔術でヴィシュクラトーの羽をどうにかするつもりみたいだ。

「……むなしくはないんですか」ジュジはまったく猫らしくない、捨すて鉢ばちになったような笑い方をした。「こんな世界で！　馬鹿な、何も知らない紛まがい物どもに囲まれて！　騙だまされていろっていうんですか!?　ぼくらは知っているのに！　そうだ！　ぼくらは知っているんだ！　何もかも茶番だってことを！　この世界には価値なんてない！　意味もない、意義もない、何もない！　何かあるように見せかけているだけで、何も……！」

「意味がない……!?」トマトが怒鳴る。ヴィシュクラトーに拳を叩きつけながら。「それがどうした……！　価値がない!?　だから何だ……！　今は死なない俺たちだって、いつかは滅びるだろうさ！　この世界だって消えてなくなる！　この世界がずっと保もったとしても、宇宙が崩壊して消滅する……！　築きあげたものも、残したものも、いずれぜんぶ失われちまう……！　そう考えるとむなしいか……!?　それなら何もするな！　お前が終わるときを待ってじっとしていろ！　俺はごめんだ……！　俺はちゃんと、はっきり感じられる……！　大事なものを、大事だと思える……！　成り立ちなんかどうだっていい！　紛い物もクソもあるか！　俺はそれを大切だと感じる！　命だと！　だったら、それは大切な命だ……！　次の瞬間、すべてなくなったとしても、今、それはある……！」

「なるほど」

「え……」と、僕は目をしばたたく。ついさっきまで僕を、僕を抱いているアジアンを追いまわしていたルヴィー・ブルームが、いなくなったわけじゃない。いる。

　ルヴィー・ブルームは飛んでいる。その背には、白濁していて半透明の、筋のある翅はねが四枚生えている。翅を高速で羽ばたかせて、ルヴィー・ブルームは、踊り羊に肉薄していた。踊り羊が振り向く。「あ？」「やあ」ルヴィー・ブルームの肋ろっ骨こつの下あたりが横に裂けて、広がる。そこには肉も骨も内臓もない。黒々と

した穴だ。果ての見えない空洞だ。

「食欲を満たすといい、ヤヌゥ」ルヴィー・ブルームにうながされて、空洞が獲物を欲し、とらえる。踊り羊を。「あっ――」踊り羊はまさしくあっという間に吸いこまれてしまった。空洞が閉じる。ルヴィー・ブルームは悠然と微笑んだ。「――ディオロット。きみの考えは理解した。どうやらきみと私とは決して相あい容いれないようだ。多少残念ではあるが、それならばそれでしかたない。私は私が望むままに私のなすべきことをする。きみの思想や価値観に興味はない。私は世界をやりなおす。これは決定事項だ。計画に変更はない」

「まずい……」とアジアンが呟いた。ヤヌゥのことだろう。たしかにあれはまずい。

　ルヴィー・ブルームは踊り羊を餌え食じきにしただけでは飽あき足らず――ベティのほうへと飛んでゆく。なんでだろう。ちらっと、僕は思う。あれが計画？　世界をやりなおす。そのためには扉を開けないといけない。鍵がいる。僕が。それなのに、ベティ？　ベティが気づいて、稲妻を放つ。「――っ……⁉」ダメだ。魔術が効かない。そうじゃなくて、ヤヌゥだ。またヤヌゥが口を開けて、ベティの魔術を吸いこんでいる。「ベティ……！」アジアンが黒翼で空を打つ。ベティは異キ種混メ合体ラを出した。でも、のみこまれる。異キ種混メ合体ラもずるずると。ヤヌゥに、際限なく。「ちぃ……っ！」ベティは舌打ちをして、異キ種混メ合体ラを自分の身体からだから切り離した。ルヴィー・ブルームに背を向けて、逃げようとする。だけどベティもヤヌゥに引きこまれようとしている。アジアンが叫ぶ。「やらせるか……！」

「やはりおまえはいい子だ」ルヴィー・ブルームが振り返る。そのときはもう、ヤヌゥは口を閉じている。「アルカーディア……！」アジアンの右腕がほどけて、無数の黒い管がルヴィー・ブルームに襲いかかる。「ウルクハンド」ルヴィー・ブルームの身体が黒い繊維状の瞼まぶたで覆われ、それらの隙間から青い光がもれた。黒い管の大群を、ルヴィー・ブルームはよけない。自ら突っこんで、かきわけ、引き裂く。「私の思ったとおりに動いてくれる。アジアン。私はおまえを愛しているよ」「――罠か……！」アジアンはもがくように急降下する。ルヴィー・ブルームはおびきよせたんだ。ベティを攻撃すれば、アジアンが放ってはおけないって見抜いて。踊り羊を先にやったのも、見せつけるためだったのかもしれない。踊り羊ほどの魔術士でも、こんなふうにたやすくのみこんでしまえる

んだって。床が近い。ルヴィー・ブルームの狙いは、あくまで僕。「アジアン」と僕は訴える。アジアンの胸に顔を、唇を押しつけて、言う。「僕を下ろして。僕を信じて。ちょっとの間でいいから、あいつを止めて。僕は、あいつらの計画を止める」「計画を……!?」アジアンは迷う。だけど、僕はわかってる。きみは結局、僕を信じてくれる。僕の願いを聞いてくれる。きみはそのとおりにする。僕を放す。僕は床に転がり落ちて、きみはアルカーディアで必死にルヴィー・ブルームの注意を引こうとする。僕はもう、きみのほうを見ない。僕もきみを信じている。きみは僕の願いを叶えてくれる。僕は僕にできることをやればいい。

　みんなの顔を見たい。この目に焼きつけておきたい。最後に何か伝えたい。一言でいいから言っておきたい。もし言えるとしたら、感謝かな。ありがとう。ううん。違う。そうじゃない。それよりもっと伝えたい言葉がある。聞こえないだろうけど。

「みんな、大好きだよ」

　急がないといけない。一秒も、一瞬も、無駄にはできない。僕は床にたくさんあいている円い穴のうちの一つに飛びこんだ。僕の名前を呼ぶいくつかの声が聞こえたような気もするけど、空耳かもしれない。

　僕は落ちる。

　落下している。

　高いなあ。高い。ものすごく、高い。もちろん、絶対、助からない。こんなに高いところから落ちたら、僕の身体のひとかけらさえ残らないだろう。それでいい。

　僕は、鍵。この世界に、鍵は常に一つしかない。僕がいなくなったら、鍵は新たに生成される。あいつらは僕を監視していた。僕の肉体と、それからアニマを。でも、もうその必要はないと言っていたし、クルルもいない。僕は監視されていない。僕がいなくなってしまえば、次に生成される鍵を、あいつらは捕捉できない。

　まあ、僕が消えて、少しでも時間稼ぎができれば、その間に片がつくんじゃないかな。

　あいつらはきっと動揺するだろうし、僕は鍵だし。そう。

僕が鍵なんだ。あいつらは僕が欲しい。僕を使って扉を開けてしまえば、あいつらの勝ちだ。僕がいなくなれば、状況は圧倒的にこっちにとって有利になる。僕なんか、鍵なんて、さっさと壊してしまえばいいんだ。だけど、トマトたちはそれをしない。できないだろう。鍵が、僕だから。

だったら、鍵である僕が、自分自身を処分してしまえばいい。

あとは、きっとトマトたちがあいつらの好きにはさせない。トマトたちは絶対に勝ってくれる。

空気が僕をなぶる。

僕はまだ目を閉じない。開けている。怖くない。ちっとも、怖くない。

どうだ。

僕は鍵で、子供を残せないし、個体として劣弱だけど、何もできないわけじゃない。

こんな僕にも、できることはあった。

世界の運命を決める程度のことは、僕にもできた。

どうだ。

もう、いいかな。

僕は目をつぶることにする。

じつを言うとさ。ちょっとだけ、怖いんだ。死ぬのは怖くない。でも、二度とみんなに会えないんだと思うと、ほんの少しだけ怖いんだ。

こんなふうにさよならなんて、したくなかった。しょうがないけど。

みんなの顔が見たかったよ。

もう一度だけ、見たかった。声を聞きたかった。名前を呼びたかった。名前を呼んでほしかった。抱きしめたかった。

みんな、好きだよ。

大好きだよ。

ねえ。

アジアン。

僕、ね。

本当は、ずっと、ずっと前から、きみのこと

After Calamitage "alive"

63　農園の日

「レニィさん、レニィさん！　見てください！　これ！　これです、これ！」

　コロナが畑のど真ん中で鍬くわを振りまわしながらぴょんぴょん跳はねている。大きな麦わら帽子を被っているが、着ているのは筒みたいな袖なしのワンピースだし、日焼けし放題で、手足も顔も土だらけだ。それがまた、似合いすぎるほど似合っている。

　レニィが作業の手を止め、鍬を肩に担いで「何だよ……」と言いながら歩いてゆくと、コロナは自分の足許を指さした。

「これです、これ！　見てください！」

「ああ……？」

　見れば、やたらとでかい茶色の蛙かえるが土の上でじっとうずくまっている。

「……それがどうしたんだよ」

「おっきくないですか？」コロナはすみれ色の目をきらきらさせている。

　レニィはため息をついた。「まあ、でけえけどな。ただの蛙じゃねえか」

「違います！　ただの蛙じゃなくて、おっきい蛙さんです！」

「だから、それがそうしたんだって訊きいてんだよ」

「こんなにおっきい蛙さんは、そうはいません。びっくりしたので、レニィさんもびっくりしてくれるかなあ、と……」コロナはうつむいて、しおれるように肩を落とした。

　レニィはしゃがんで、蛙をつついた。「こいつ、動かねえな。生

きてんのかよ」

「えっ。し、しっ、死んじゃってますか……!?」

「どうだかな。いや、死んじゃいねえか。ほら――」

　と、蛙がびょんっと跳んだ。

　びょんっ。びょんっ。

　そのたびにコロナが「ひっ」だの「うっ」だのと変な声を出すのがおもしろい。

　けっけっけっ、と笑うレニィの背中を、コロナが「もおっ！」と軽く叩いた。「なんで笑いますか!?　コロナはすこぶる真剣ですのに……」

「だってよ。くっくっくっくっ……」



「笑わないでくださいってば！」

「わぁーかったよ。笑わなきゃいいんだろ。うっくっくっくっ……」

「笑ってるしょや！」

「しょうがねえだろうが。笑えるんだから。お──」

　声が聞こえた。レニィたちを呼ぶ声だ。立ちあがって声の主を探すと、畑と畑の間に立っている大きな木の近くで女が手を振っている。女のそばに、男もいる。

「あっ、ヴィヴィアンさんですね！」コロナはレニィの手をつかんで引っぱった。「行きましょう、レニィさん！　きっとお昼ごはんです！　さ、さ！　早く早く！　急いで！」

「そんな引っぱらなくたって、行くっつーの……」

　しっかし元気だなあ、とレニィは風に吹かれて青い空を眺ながめながら思う。農作業がよほど性に合っているのか。きっとそうなのだろう。それにしたって、元気すぎんだろ。いいことだけどな。

　ヴィヴィアンが草っ原に敷しき物ものを敷いて、その上に弁当を広げていた。権ゴン堂ドウは腕組みをして、その姿をじっと眺めている。表情はかなり気づかわしげだが、こういうとき権堂は絶対に手を貸そうとしない。主義というやつか。レニィにはどうも理解できないので、ついほいほい手助けしてしまう。

「いいよ、ヴィヴィ。あとは俺がやるって」

「そうですそうです、コロナもやりますし！　ヴィヴィアンさんは休んでてください！」

「そう？」ヴィヴィアンは拒まないし、権堂も何も言わない。

「……つーかな」レニィは木に背を預けてこれ以上ないほどだらしなく座っているサトーを横目で睨む。「てめえはろくすっぽ働きもしねえで、弁当の準備もしねえくせに、生意気にも飯は食うつもりかよ、クソサトー」

「あぁぁ？」サトーは怠惰さと小賢しさとみみっちさと卑屈さと卑劣さと下劣さが刻みこまれたような彫りの深い顔を醜くゆがめた。「飯食って悪いかこら？　ふざけんじゃねえぞ雑魚死ね五十回くらい飯食わねえと俺まで死んじまうだろそのくらいわかれ低脳ボケ」

「そんだけ舌が回るんなら、少しは手足を動かせよ、クソサトー」

「動かせとか言うんだったらてめえが俺の手足を動かせばいいん

じゃないっすかねえ、俺的には自力でアレするのはアレなんで、どうしてもやりてえっつうんならてめえでやれ。やらねえんだったらやかましく言うなボケカスそれから死ね」

「てめえ……」

　頭にきたが、喧嘩しても疲れるだけだ。こいつだけはいつになってもマジで変わらない。変わろうとしない。もうあきらめている。好きにしろ。

　四人で弁当を食った。昼食をとっているのはレニィたちだけじゃない。見渡せば、あちこちで仲間たちが飯を食っている。

「見回りはどうだった？」とレニィが訊くと、権堂は静かにうなずいた。

「うむ。大事ない。園内に忍びこんでいた悪魔を何匹か見つけて、斬った程度だ」

「そうか」

「権堂さん、ご活躍だったんですね！　ご苦労さまでした！」コロナがにこにこ笑って言うと、権堂も少し顔をほころばせた。

「私の任務など、コロナやレニィの仕事に比べれば楽なものだ」

「いえいえ！　畑仕事はとっても楽しいです！」

「見回りも退屈ではない」

「そうなんですね！」

「うむ」

「それでは、おあいこです！」

「然さ様よう」

「さようですねっ……！」

　レニィはいつも思うのだが、何なんだ、こいつらの会話は。いいけどな。べつに。

「──それより、ヴィヴィ。どうだ。体調は」

「平気よ」ヴィヴィアンは大きな腹をさすってみせる。「ものすごく順調。媼妻メイルーは何人もとりあげたことがあるっていうから、その点も心配してない」

「へえ。媼妻がねえ」

　レニィはこの農園の女主人にして世話役の顔を思い浮かべる。おっかない女だが、あれでやさしいところもあるし、頼りになる。とりあげる、といっても具体的に何をするのか、レニィには想像もつかないのだが。

「で、権堂は？」

「む？」

「どうなんだよ。なんつーか、とうとう父親になっちまう気持ち？」

「むう……」権堂は低く唸ってうつむいた。「父親になるのだなという気持ちだ」

「そのまんまじゃねえか」

　サトーが「へっ」と鼻を鳴らして、これ以上なさそうなくらいおもしろくなさそうな表情を浮かべている。何が気にくわないんだか。でも、ざまあみろ、だ。

　腹が一杯になったのでちょっと横になって休もうとしたら、コロナが自分の膝をぽんぽんと叩いてみせた。逆らうと臍へそを曲げる。レニィはコロナの膝に頭をのせた。

「ケッ……」とサトーが吐き捨てた。「くつろぎやがってクソムシどもが。言っとくけど俺はあれだからなこんなへっぽこ農園で一生終えるつもりなんかねえからな。あぁーもう飽あき飽きだクソつまらねえ出てってやる。必ず出てってやるからな見てろよ死ね」

「死んでしまったら、見ることができぬ」

　権堂が真面目に返事をして、レニィたちは笑う。コロナがレニィの頭を撫なでている。まともに浴びるとちょっと熱すぎる日ひ射ざ

しは木の枝葉に遮さえぎられていて、風もあるし、ここはちょうどいい具合だ。権堂とヴィヴィアンの子供が生まれてくる日が楽しみでもあり、少し不安でもある。この農園だって絶対に安全だとは言いきれないし、一歩外に出たら悪魔だの何だの、異界フリー生物クスどもが闊かつ歩ぽしている状況はさして変わっていないのだ。赤ん坊なんか生まれたら、いざというときに身動きがとれなくてやばいことになるかもしれない。まあ、命懸けで守ればいいか、と考えもする。そうやって相あい身み互たがいでどうにかこうにか生きのびてきて、今日もこうやって飯を食うことができている。

「なんとかなりますよ」と、コロナがコロナのくせにレニィの思考を見すかしたかのように生意気なことを言う。

　レニィは目をつぶってレニィの頭をさわっていたコロナの手をそっとつかみ、唇に押しあてた。「そうだな」

64　今日

　北国の春は遠い。朝晩はとくに寒くてしょうがないし、雪だってまだまだ積もっている。もう慣れたけど。こんなものだとあきらめはついているのだが、温暖なジェードリで育った彼女にはやはり少しだけこたえる。火を入れたばかりの暖だん炉ろの前に座って量の多い縮れた髪の毛を櫛くしで梳すきながら、懐なつかしいな、と彼女は思う。ジェードリ。あんなことになってしまってからの街の様子は不思議とあまり覚えていない。毎日が平穏無事だったときの街並みだけが彼女の胸の裡うちで息づいている。明るい色の煉瓦。白い石畳。深い青の海と地平線で接する鮮やかな空。いつか帰れるのだろうか。帰ることができても、彼女のジェードリはもうそこにはないだろう。わたしはここで生きてゆく。もう何度、自分にそう言い聞かせたか知れない。わたしは一人じゃない。彼女は立ちあがって暖炉の前から離れ、家族の部屋を回る。「ラッチャ、起きなさい。早く。仕事に遅れるわよ。テッドも起きて。朝よ。ジョルジュ。あら。起きてたの？　ミミってば、またジョルジュのベッドに潜りこんでたのね。いいかげんにしなさいよ。あなた、何歳いくつだと思ってるの？　アンナ。アンナ！　起きて。今、起きなかったら、もう知らないわよ。二度と起こさないから」

　彼女の朝は忙しい。家族を叩き起こしたら、昨夜つくっておいたシチューと、それから買い置きのパンを温めて、家族六人にはいかにも狭苦しい食卓に並べる。ジョルジュがまず食卓につく。次はミミ。ラッチャ。テッド。最後はアンナ。

「あたし、パンはいらない。シチューだけでいい」アンナは毎朝、機嫌が悪い。

「じゃあ、俺がもらう」とテッドがアンナのパンを手にとった。

「おまえさあ……」ラッチャは頬杖をついて、匙さじでシチューをかき混ぜている。「朝っぱらよくバクバクバクバク食えるよな」

「ラッチャ、食欲ねえの？　だったらおまえのもくれよ」

「やらねえよ、バーカ」

「あ？　バカって何だよ、バカ」

「バカだからバカっつったんだろ、バァーカ」

「やんのか、こら！」

「やめなさい！」彼女が止めないと、この二人は本当に朝っぱらから殴りあいの喧嘩を始めかねない。「いい年して。子供じゃないんだから、やめてよね」

「そうだよ」とミミが大人ぶった表情でラッチャとテッドを見る。「ご飯のときくらい、静かにして。なんでジョルジュみたいに落ちついていられないの？」

　ラッチャは「へっ」と鼻を鳴らした。「落ちついてるっていうかな。ジョルジュ、おまえは飯食いながら本読むのをやめろ」

「いやだ」ジョルジュは本の頁ページを繰くりながらパンをかじる。「時間を無駄にしたくない。つまり、きみたちと口をきくのもいやだから、話しかけるな」

「てっめえ！」

「ジョルジュ、殺す……！」

「もう！　ラッチャもテッドもジョルジュも！」彼女はテーブルを叩いた。「いいかげんにして！　大人げないんだから！」

　毎朝毎朝この調子だ。ミミ以外は子供とはとても言えないような年齢の男女がこうやって狭い家で身を寄せあうようにして暮らしているのだから、いろいろと厄介だし、ごたごたも起こる。限界かもしれない。再三そう思った。誰かが出ていったこともある。でも、必ず戻ってきた。家族だから。みんなローラの子供だから。とはいえ、いつまでもこのままではいられないということも、彼女はわかっている。「──ラッチャ」

「あ？　何だよ、ステラ」

「あんたの彼女のことだけど」

「……チェルシーがどうしたよ」

「あんた、どうせ逃げようとするだろうから、今ここで言うけど。いるんでしょ」

「は？　いるけど？」

「そうじゃなくて、彼女のおなかに」

「おっ……おまっ、なんで──」

「マジかよ!?」テッドがラッチャの肩を抱いた。「おい!?　できたのかよ、ガキが！　マジか！　男か!?　女か!?　どっちだよ!?」

「……いや、そんなのまだわかんねえよ」

「すごい」アンナは目をまん丸くしている。「ラッチャがお父さんなんて信じられない」

「同感だね」ジョルジュは肩をすくめて、本を閉じた。「おめでとう、ラッチャ」

「ミミが名前つける！」ミミが椅子の上に立ちあがった。「ラッチャ、いいでしょ!?　名前はミミが考えるから！」

「……いや、どうなの、それ？　名前はやっぱ俺が自分で……ていうか、おまえらな！　何なんだよ、この空気！　俺はもっとこ

う……俺なりに、そのへんは悩んだりとか……」

「所帯を持たないとね」とジョルジュが言った。「自分の家を持って、家族になるんだ」

「そうよ」彼女はラッチャのしょぼくれている目を見すえた。「あんたとチェルシーは家族になるの」

「……出てけってことかよ」

「ええ。この家は狭いもの。チェルシーと子供を住まわせるのは無理だわ」

「だから、俺は……！」

「ラッチャ」彼女はラッチャの手を握った。ローラのように笑いかけてやりたいが、彼女にはうまくできない。「わたしはここにいる。いつでも帰ってきていいのよ。でも、あんたはチェルシーの旦だん那なさんになって、子供の父親になるの。家族が増えるのよ。それはとてもすてきなことだとわたしは思う。わたしはうれしいし、みんな喜んでる」

「……ステラ」ラッチャは彼女の手を包むように握りかえして、うなずいた。「……そうだよな。増えるんだよな。家族が。それだったら、迷うことなんかねえよな」

「そうよ。あたりまえじゃない」

　彼女はラッチャの手を振りほどき、目を伏せて一つ息をつく。

　ローラ。

　これでよかった？　わたし、ちゃんとできてる？

　力不足だと思う。でも、彼女は最年長だ。柱になって家族を支えないといけない。たまには弱音を吐きたくもなるが、聞かせる相手がいない。恋人でもつくろうかな。無理だ。性格がきついし。見た目だってよくないし。

　不意に玄関の扉を叩く音がして、彼女は立ちあがる。ジョルジュが「僕が出ようか」と言ってくれたが、彼女は首を振った。たぶん隣人だろう。雪よけのこととか、井戸の管理についてとか。この国

は安全だが、生活は楽じゃない。手に手をとりあって助けあわないとすぐに立ちゆかなくなる。彼女は外がい套とうを羽織って玄関の扉を開けた。

　はい、何か──と言おうとした。言葉が出てこなかった。

　外は雪がちらついていた。風も少しある。

　女と、ずいぶん背の高い男が立っていた。二人とも厚手の外套を着ている。外套には雪がたくさんこびりついていた。男は顔に包帯のようなものを巻いていて、造作がわからない。女はきれいな顔だちをしている。

　大人になった、と彼女は思った。あたりまえだ。彼女より一つ下で、ほとんど同年代なのだ。

　女は驚いているらしい。それはこっちもだけど。でも、意外と冷静だ。なぜだろう。予感なんてなかった。正直、いつかまた会えるとさえ考えていなかったのに。彼女は自然と笑っていた。

「お帰りなさい、ルカ」

「ステラ」

　ルカの顔が一瞬でぐしゃぐしゃになった。ステラはルカを抱きよせた。そうしてやらないと、ルカはいつまでもそこに突っ立ったまま泣きじゃくっていそうだった。ルカは切れ切れに話した。「……捜したんだ。すごく、捜して。会いたくて。どうにかして、会いたくて。ジェードリの人たちは、モトローリィに行ったって聞いて。それで、ここまで。会いたかった。会いたかったよ、ステラ。会えてよかった」

「そうね。わたしも。よかった。無事だったのね。みんないるわ。ラッチャも、テッドも、ジョルジュも、アンナも、ミミも。あなたは──」ステラは背の高い男を見た。自分でも、なぜそう思ったのか不思議だった。だって、ステラが知っている彼とは似ても似つかない。まったくの別人だ。一方で、それ以外ないと納得できる。ルカと一緒にいる。帰ってきたのだから、彼だ。「リクでしょう？」

　リクはゆっくりとうなずいてみせた。ステラはルカを撫でさすりながら、深呼吸をした。やっと涙が出てきた。

北国の春はまだ遠くて寒いけれど、あたたかい。今日はいい日よ、ローラ。そのうち家族が増えるかもしれなくて、ルカとリクが戻ってきた。明日あしたもいい日だといい。もしそうじゃなくても、贅ぜい沢たくは言わないわ。だって、今日がこんなにいい日なんだもの。

ローラ。あなたの子供たちは、今日もみんな元気よ。

65　備忘録

旧カリオサークを発たって八日。野営地跡あとを発見。もともとは人間の集落だったらしいが、襲撃を受け、その後、中規模の軍勢がそれなりの期間、この地で野営していたものと見られる。

日暮れまでにはまだ間があったが、私はここで休息をとることにした。しかし、火を熾おこす準備をしていると、あちこちから悪魔たちが集まってきた。どうやら私の見当は外れていたようだ。私が地獄の旅に慣れているせいか、彼らは私に声をかけこそすれ、警戒するそぶりをまるで見せなかった。彼らのうちの一人が「おまえはどこでここの話を聞きつけてきた」と問うてきたので、私はここの話など知らない、何のことだと正直に答えた。彼は意外そうだった。「何だ。おまえは知らずにきたのか。なんて運のいいやつだ」

夕闇が迫るごとに、野営地跡には多くの者たちが寄り集まってきた。中には食べ物や飲み物などを担かついできて、露店を出す者までいた。彼らはペチオと呼ばれる地獄の通貨だけではなく、人間の通貨ダラーでも取引をした。それどころか、多数派では決してないが、人間もいた。

どうやらここは一種の非戦中立地帯となっていて、彼らは皆そのことを了解しているようだった。私も旅をする間にそういった場所があるらしいという噂は耳にしていたが、眉まゆ唾つばだと思っていた。私は間違っていたのだ。

悪魔にせよ人間にせよ、その他の異界生物ものたちにせよ、誰もが好きこのんで奪いあい、殺しあっているわけではない。血で血を洗う闘争を嫌悪する者もいるし、誇りを懸かけた戦い以外には価値

を感じない者もいる。このご時世では大手を振って自らの主義主張を貫くことは難しかろう。だが、だからこそ、このような非戦中立地帯がひそかに成立する余地はあるのだ。

　私は思いがけなくその場に出くわし、予想だにしなかった再会を果たした。私の焚き火に近づいてきた者の顔には見覚えがあった。八本の腕を持ち、鱗うろこ状の肌は黄土色で、猛もう禽きんのような顔だちをしていて、楽器をいくつも背に負っている。

「エリオット！　エリオットではありませんか！」

　楽師ザンツ。私は彼とスターラスト侯ラデ爵オニ領ア第二の都市シギムグウェイエンの酒場で出会い、彼の奏かなでる音楽に聴き惚れ、彼と、それからゼオルクスギャンドの猟師ハンタースオルツゥアとで酒を酌み交わしたのだった。私たちは抱ほう擁ようを交わし、しばし久きゅう闊かつを叙じよして、宴うたげの始まりを待った。

　宴。そうなのだ。この名もなき非戦中立地帯では十日ごとに宴が催もよおされることになっていた。私はたまたまちょうどその日にここを訪れた。まさしく幸運だったのだ。宴というくらいだから、ただ食らい、酒を飲み、語らい、笑うだけではない。歌う。演奏する。踊る。そうとなれば、卓越した楽師ザンツの独どく擅せん場じょうだった。ザンツは八本の腕で低音の弦楽器と高音の弦楽器、鍵盤楽器、それから二つの打楽器を同時に操りながら、囁くように、叫ぶように、むせび泣くように、大笑いするように歌った。ザンツに喝かつ采さいを送らない者はおらず、誰もがザンツとともに歌いたがり、また、その律動と旋律にあわせて身体からだを躍動させた。もちろん私も同じだった。音楽と舞踏に共感し、身を任せる能力は、あまねく知的生命が確実に、先天的に身につけているといっても過言ではなかろう。ザンツの才能は種族を、世界を超越している。もっとも、ザンツだけではない。宴には他にも多くの楽師が参加していた。そして、私がザンツ以外で感かん銘めいを受けた歌い手は人間の女性だった。

　彼女は七本弦の弦楽器を抱かかえてはいたものの、たまにしか弾ひかなかった。彼女は裸足で歌っていた。少し掠かすれているのに透明感のある特別な声質だった。声量もすばらしかった。彼女の歌はたぶん即興だった。歌詞は人間の共通語で、解しない者も多かったはずだが、そんなことは関係なかった。彼女の歌を耳にした者は一人の例外もなく感情を大きく揺さぶられた。聴く者をどこまでも

連れていってしまう奇跡の歌声だった。

　私は彼女の歌に夢中になった。ザンツも彼女に魅入られた。じつに大勢が彼女を囲み、その輪からいつまでも離れなかった。輪はどんどん大きくなっていった。私たちは夜明け近くまで彼女の歌に耳を傾けた。彼女は何曲も何曲も歌い、空が白みはじめると、ようやく両手をあげてから一礼した。それで終わりだと皆が悟った。私たちは感激し、感謝して、拍手し、考えつくかぎりの方法で彼女を賞賛した。私とザンツは彼女に声をかけた。彼女の浅黒い肌も、黒く長い髪も、額に巻いた布も、身につけている衣服も、汗でずぶ濡れだった。私は汗をふくための布を彼女に渡し、焚き火にあたるように誘った。私たちは日が昇るまで語らった。ただ、彼女は言葉少なで、私とザンツがもっぱらしゃべった。彼女はたいていの場合、うなずくか、首を横に振るか、その雄弁な瞳で感情を伝えるかだった。それで充分だと私は感じた。彼女の名はアンジェといった。歌うことは自分の運命だと彼女は短く話してくれた。彼女は動乱の間も毎日歌っていたという。この先も歌いつづけるつもりだという。彼女には自身の歌を聴く者と聴かない者の区別しかないようだった。彼女の歌を聴こうとしない者はめったにいないだろう。朝になり、宴が終わると、ほとんどの者はそのへんで眠りこけてしまう。彼女は旅立つようだった。ザンツは少し休んでゆくつもりだと言った。私も出発することにしたが、あいにく彼女とは目指す方向が違っていた。私たちは再会を願いあって別れた。私は南へ向かって歩きだした。

　地獄もおもしろいが、ここも悪くない。私はかつてこの世界を隅から隅まで歩いたものだ。知り尽くしたとも思いあがっていたが、何もかも変わった。記憶にある風景さえも別物に見える。私はふと足を止めた。蝶だ。一羽の蝶がひらひらと舞って、私が差しのべた右手の人差し指にとまった。私は目を細めた。「友よ。久しぶりだ」

66　様々

「坊ちゃん」と呼ばれて、そっちを向いたら首を絞められた。

「──うごげっ。てめっ！　何しやがるっ！」

「ネクタイでしょうが。曲がってます」

「おう。そうか」チーロ・パンカロは目をすがめて背筋をのばした。カルロ・ボッシはチーロのネクタイを慎重な手つきで直している。「……つーかよ。いいかげん坊ちゃんはよせっつーの。どう考えても坊ちゃんっつーアレじゃねーぞ」

「いつになっても、私にとっちゃァ坊ちゃんは坊ちゃんです。いやなら、坊ちゃんと呼ばれねえような男になってください」

「なってるつもりなんだけどなあ。そんなに坊ちゃんっぽい？」

「ええ」カルロはパシンッとチーロの胸を叩いた。「これでいいでしょう。晴れ舞台なンだ。きちっとしねえと」

「まーなあ。つってもなあ。オレがなんかするわけでもねーしなあ」

「親衛隊の隊長どのなンですから」

「まーなあ……」

　旧サンランド無統治王国領内にケメックという都市がある。

　ケメックはサンランド東部最大の規模を誇る経済都市だった。当然ご多分に漏もれず、地獄帝国と異界フリー生物クス連合軍による侵略を受けたが、そののち放棄されたケメックは新生太陽王国軍が占拠し、再建された。

　チーロたちがいる宮殿のように豪壮な建物は、かつてケメックの大商人ハニバルの個人邸宅だった。それが修繕され、現在は仮王宮として利用されている。

　ＪＣＫに割り当てられたこの広い部屋には、親衛隊隊長チーロ・パンカロと副隊長カルロ・ボッシ以下、濃紺ネイヴ濃紺色イーのスーツに赤いネクタイ姿の親衛隊隊員十二名と、それからもちろん、ＪＣＫ総代表ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、そして国こく妃ひのクローディアが居並んでいる。いや、落ちつきはらって椅子に腰かけてんのは、ジョーカーっちとクローディア様々だけなんだけどな。

　ジョーカーっちの装よそおいは、ジョーカーっちにしては派手

じゃない。何しろ、チーロたちと同じスーツで、ネクタイも同じ赤。ただ、リングだのネックレスだのタイピンだのサングラスだの、それから王冠よりずっとずっとシャレているダイヤモンドをちりばめた額当てだののおかげで、シックでグッとくる。めちゃくちゃカックイイ。やばい。

　クローディア様々は、金とも銀ともつかない髪の色にあわせたドレス、ヒール、それにクラウン、アクセサリーが、ただでさえ美しい国妃を、もっともっと、九千兆倍くらい美しく映はえるように彩いろどっている。はっきり言って、鼻血ブーッ、股間ドーンッ、脳みそボーンッ、だ。あな麗し。

「あーダメだっ！　緊張はしてねーけど、じっとしてらんねえ！」

　チーロはスクワットを開始した。ジョーカーっちの視線がサングラス越しでも超冷たい。それはひしひしと感じるが、とても黙ってなんかいられない。まあ、慣れてっし？　そんでも、アレなんだよなあ。クローディア様々に「隊長どの」と声をかけられたりすると、ついついアレなんだよなあ。ビッと直立してピッと敬礼とかしちまうんだよな。

「は、はいっ！　なななななななんすかっ……!?」

「お静かに」

「はいっ！　畏かしこまりマスターッ！」

　なんとなくそんな返事をしてしまったら、クローディア様々は口くち許もとに手をあてて、ほんのわずかに目許をゆるめた。

　ひょっとして、笑っ──てくれた……んか？

　マジかよ。

　これで三百年は戦えるわ。クローディア様々の微笑みパワーでな。

　うん。

「──っし！　スクワットは中止して、腕立てならぬハンマーパンチ壱いち號ごう立てを──」

　しようとしたら、扉がコココンッとノックされて、半魚人顔の男が入ってきた。

　チーロは「ブーッ！」と噴きだした。「おまっ！　何だ、そのカッコッ！　蝶ネクタイとかっ！　だっせっ！」

「うううううっさいわいっ！　どこがださいねん、めっちゃ似合っとるやん！　かっこええやんか！　アーニャちゃんかて馬子にも衣装て褒ほめてくれよったし──」

「それは必ずしも褒め言葉とは言えないのでは」

　クローディア様々にツッコまれて、半魚人顔が真っ赤になった。

「わしが褒められた思たんやから褒められたんやーっ！　ええからこいっ！　用意できたで！　調印式や……！」

67　今日その歩みを

「ンッ、ンーン……」咳せき払ばらいをする。「ンンッ」もう一度。「ンッンーンッ」もう一度だ。何度してもしたりない。そんな気がしてしょうがないのだ。

「陛下」と腕に手を添えられた。

　隣を見る。

　彼の妻がいる。

　妻──妻なのだ。

　彼女が彼の妻。

　オウ……と彼はイッてしまいそうになる。どこにイクのだか自分でもわからないが、イキそうになる。イキかけた。しかし、持ちなおす。

　彼は顎を引き、唇の両端を少しだけ持ちあげ、眉間に力をこめて、わずかに両眼を細めた。そんなふうにすると、鷹おう揚ように

構えているように見えるのだという。度量の大きい王が慈いつくしみ深く王妃を見つめている。そんな具合に人の目には映るのだという。王妃の指導だ。彼はそのとおりにした。

「大丈夫だ。問題ない、ジャクリーヌ。ほんの少しナーヴァスになっていただけだよ」

「それならばよいのですが」

　王妃にして軍師であるジャン・スタンバックごとジャクリーヌ・ゴールディング・ラスペードはたおやかな淑しゆく女じよの中の淑女の振る舞いを崩さないが、その実、夫をしっかり厳しく監督している。──夫。

　夫なのだ。彼が、彼女の夫。彼はイキかけて、持ちなおす。

　大事な調印式だ。もともとは先方から打診があって始まったのだが、そこからの折衝、根回しに王妃や王国の高官や建国の元げん勲くんたちがどれだけ神経を使い、尽力したことか。

　調印を行うこの黒こく檀たんの間には、中央に円卓が設置され、円卓を囲む椅子が八脚きやく、彼と王妃がそのうちの二脚に腰かけており、それから壁際にたくさんの椅子が並べられている。新生太陽王国の臨席者は、太陽騎士団長チェス・ピード卿きよう、近衛騎士団〝秩序の番人〟団長羅ラ叉サ卿、法務執行大臣トワニング卿、国務大臣琺瑠フオール卿、今はなんと自ら他国の代表者を呼びに行っているので不在だが外務大臣カタリ卿など、総勢十名。皆、この和平を実現するために血の汗を流してくれた。失敗は許されない。むろん失敗するつもりなど毛頭ない。絶対に成功させる。彼は頼りなく情けない王ではあるが、皆に担かつがれているだけのお飾りにすぎない王ではあるが、うまく担がれ、上手に踊るすべだけは心得ているのだ。

　扉がバタッと開いて、燕えん尾び服ふくに蝶ネクタイ姿のカタリ卿が部屋に駆けこんできた。「くるできよるできてまうでえ！　魚うおい、陛下っ！　用意せな！　しっかり頼むでしかし！」

「ブフーッ」彼は思わず噴きだしてしまった。

「な、なんやねんな⁉」

「……いやその、きみの恰かつ好こうがだねえ、どうにもこうにも

アレなものだから」

「はあ!?　アホか、ビシイッと決まっとるやないか!?　せやろ、なあアーニャちゃん！」

「ええ」琺瑠卿の隣に座っている国務次官のアーニャ・クルチバが真顔で首を縦に振ってみせた。「とても決まっています。決まりすぎていておもしろいくらい。ブフーッ」

「──って、そこで噴くんかーい！」

「いいから座れ、見苦しい」羅叉卿にうながされ──というか叱られて、カタリ卿は小さくなって「すんまへん……」と席についた。

　まったく、馬鹿陛下の異名をとるフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトが言えた義理ではないが、あれでよく外務大臣の要職が務まるものだねェ。しかし王妃曰いわく、人好きのする男で度胸は抜群、あれでなかなか抜け目がなく、タフな交ネゴ渉シエー人ターでもあるのだという。責任感も強く、決してプレッシャーに押し潰されない。気配りもできる不屈の男で、これ以上ないほど外交向きだというのだから、人は見かけによらんものなんだねェ。

　感心しているうちにまた扉が開いて、まずＪＣＫの十四人が黒檀の間に姿を現した。

　総代表ジャン・ジャック・ド・ジョーカー、国妃クローディア、親衛隊隊長チーロ・パンカロ、同副隊長カルロ・ボッシらだ。

〝おかしなフアニー〟フランクはジャン・ジャック・ド・ジョーカーと握手を交わしてから、クローディア妃の手をとって軽くひざまずき、敬意を表した。王妃ジャクリーヌの様子がおかしいことに、ファニー・フランクは気づいた。ジャン・ジャック・ド・ジョーカーを凝視して、足をすくませているかのようだ。

　ファニー・フランクが、どうしたのだ、と声をかけようとしたその瞬間、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーが突然、ジャクリーヌを抱きよせた。

「美しい女になったな、ジャクリーヌ」

「……お兄様」

「その男にはもったいないほどだ」

「いいえ」

　ジャクリーヌは涙をこらえている。ジャン・ジャック・ド・ジョーカーに──兄に、身を預けながらも、彼女はしかし、凜としていた。

「わたしが選んだ男です。お兄様にも決してひけをとりません」

「そうか。ならばいい」ジャン・ジャック・ド・ジョーカーはジャクリーヌを放し、ファニー・フランクに向きなおった。「陛下、己おれの妹をよろしくお願いする。言うまでもなかろうが、最高の女だ。大事にしろ」

「お任せあれ」

　即座に、平然とそう答えた自分自身を、誇らしく思うこともなかった。それよりも彼はうれしかった。彼の王妃が、かつて愛したという実兄とようやくふたたび相まみえた。どうやら、長年のわだかまりがようやくとけたようだ。なんと喜ばしいことだろう。王妃はクローディア妃と抱ほう擁ようを交わした。それは比類なく美しい光景だった。

　間もなくＪＣＫにつづいて、正統ラフレシアの総帥アロンズ・ニードルスピア、首相リリアン・イヌテロ、軍卿ヘンリー・ブラックモア以下、赤い装束に身を包んだ十四人が黒檀の間に入ってきた。アロンズ・ニードルスピアは年齢不詳で貴公子然としているが、何を考えているのかわからない、得体の知れない男といった印象だ。過去の所業からするとまったく信用できないが、軍を率いればめっぽう強い。地獄の勢力から旧ラフレシア第三帝国領の西部を腕ずくで切りとり、確固として盤ばん踞きよしている。人民から熱狂的な支持をえているし、この男がえも言われぬ独特のカリスマ性を持っていることは、誰でもうなずかざるをえないだろう。間違いなく一代の英雄だ。ただ、それだけに御ぎよしがたい。

　黒い肌のイヌテロは常識人で話が通じるし、ブラックモアは剽ひよう軽きんでつきあいやすい男のようだが、すべての決定権はアロンズ・ニードルスピアが握っている。

　今回、和平協定を結ぶにあたって、一番の懸け念ねん材料が正統

ラフレシアだった。

　なぜなら、我々は—人類は、連帯しなければ敵に対抗できない。緊密に連携したとしても、劣勢なのだ。現在、曲がりなりにも国家の体をなしているのは、エルデェイニオン東部から中部ミツ諸国ドラ域ンズ北西部に割かつ拠きよしている新生太陽王国、モトローリィのＪＣＫ、そして正統ラフレシアのみ。是ぜ非ひともこの三国がともに手をとりあい、一致団結して敵に対抗する姿勢を打ちださねばならない。

　今のところ、正統ラフレシアは我々に与くみすることを表明している。三国同盟は疑いなく相互に利するものなので、反ほ故ごにはしないはずだ。しかしながら、アロンズ・ニードルスピアの思考は読めない。仮に何か企みがあるのだとしても、信じる以外に手がないのだ。

「ようこそ、総帥！　歓迎する！」

　ファニー・フランクはアロンズ・ニードルスピアに握手を求めた。アロンズ・ニードルスピアは「光栄です、陛下」と恭うやうやしいと言ってもいいような態度で頭まで下げたが、なぜか手を握ろうとしない。ファニー・フランクが戸惑っていると、ブラックモアが「申し訳ありませんね」と肩をすくめた。「うちの大将は潔癖症なんですよ。悪気はないんだ」

「ほうッ、それは—」

　それはそれで失礼というものではないのか。しかも、王妃が挨拶をすると、アロンズ・ニードルスピアは進みでてその手をそっとつかみ、ひざまずいて口づけなんぞしおってからにしてからにッ。ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ許すまじッ。いやいや落ちつけッ。落ちつくのだッ。スーッ、ハーッ。正統ラフレシア、アロンズ・ニードルスピアはあくまで味方。人類の友。このような男を友とは思いたくないが、王としてそんなみみっちいことは言うまいッ。我々は共同して敵に当たらねばならないわけなのだから……ッ。

　その敵が黒檀の間に足を踏み入れる瞬間がついに訪れた。敵。だが先頭の男はまるで人間のようだ。白と赤と黒のジャケット、細身のズボンを身につけ、ブラウスにはフリルがあしらわれている。髪の毛は白に近い金髪。顎は尖り、鼻は高く、薄い唇には笑みが浮か

んでいる。切れ長の目は刻々と色合いが変化して奇妙だが、これくらい奇天烈な装い、容貌の人間は、たとえば魔術士なんかだとけっこういるだろう。とはいえ、男が引き連れている者たちは、いかにもな異界フリー生物クスだ。兜のようながっしりした頭から二本の角が突きだしていて身の丈たけ二メーテルを超える鉛色の悪魔ゼオルクスギャンドがいる。地獄の竜騎兵として知られる悪魔ゲバナストラングがいる。蜥蜴人がいる。鳥人ジャドーがいる。ついでに先頭の男は肩に小さな邪竜、たぶん邪竜の赤ん坊か何かをとまらせていたりする。

先頭の男に邪竜の赤ん坊まで加え、悪魔と悪魔以外の異界フリー生物クスが総勢二十四名。先頭の男は身体からだを斜めにして、胡う乱ろんなまでに優雅な礼をした。「このたびはお招きいただき誠まことにありがたい。名乗るも無ぶ粋すいなれど、名乗らぬも非礼。私は鏡を磨きたる者にして力と技の卓越者、いたわり偽り欺く者にして蝶の星、あるいは穢けがれの象徴、かつてジルマイヤ酒しゆ血ち湖こ及びハ・マーン淫楽街の領主だった者にして道化ジエステのル・ハ大イヴ公爵エリオン、私はジェンバジェンガ・フルミネンセ・パルートルメイヒヨーケンデール・クライストリスト・オーラル・ド・リリカル・ラーヴィア・カント・ヴ・アギナ・スーペルファルシャワード・カムイヨラセナイムクロミ・ダイ・アマント・グランド・セクスィ・マスター・アウトルマ・ファッルーカ。いささか長いので、アウトルマ・ファッルーカとお覚えあれ。言うまでもなかろうが未来指向型多種族共生国家アウトルマの元首であり、諸君の友だ」

黒檀の間に緊迫した空気が充みち満ちる。ＪＣＫ総代表ジャン・ジャック・ド・ジョーカーも、正統ラフレシア総帥アロンズ・ニードルスピアも、アウトルマ・ファッルーカに視線をそそぐだけで口を開かない。動こうともしない。

「陛下」と王妃がファニー・フランクの背を静かに押した。そうだ。このようなときこそ、この〝おかしなフアニー〟フランクの出番ではないか。アウトルマ・ファッルーカも道どう化けらしいが、このファニー・フランクにはかなうまい。

何しろ、アウトルマ・ファッルーカは名うての悪魔、最後の大ハイ公ヴエリ爵オンとして、今や全悪魔の三分の一をその指揮下に置いている。言うまでもなく、実力者だ。対してこのファーニー・フランクには実力と呼べるような実力はない。武力も知力も備わっていない。カリスマ性もべつにない。皆に馬鹿にされ、情けをかけら

れて、王でいさせてもらっている。それでいて己おのれの無力を恥じてもいない。どうも誰もやりたがらないようだし、皆が王でいていいというかぎりはちゃっかり王でいようと開きなおっている。道化勝負ならそうそう負けはしない。怖い物もさしてない。いやいや、愛する王妃だけはおっかないがねェ。

「いやはやッ」ファニー・フランクは笑顔で手を差しだした。「遠路はるばるお越しくださり、こちらこそありがたいッ！　友！　閣下は友と申された！　まさしく友でありたいッ、末永く！　不幸な過去は過去として、我々は未来を見すえ進まねばならんわけだからッ！　それは人類も悪魔もその他の異界フリー生物クスもまったく同じ！　意見の相違や対立はあるとしても、我々は対話することでそれを乗り越えてゆけるものと信じている！　少なくとも、対話を試みようという点で、我々は合意したわけだッ！　これは重要な一歩です！　その一歩をともに踏みだした我々は、友以外の何物でもないッ！　是非とも一つ一つクリアーしてゆこうではありませんか！　道は長いが、我々は歩きだした！　歩きだしてしまったーッ!?　まずはその事実を祝し、明日を築きましょうッ！　我々にはそれができるッ！」

「そう願いたいものだ」

　ファッルーカはファニー・フランクの手を握った。ひんやりとした手ではあったが、握手してくれるだけアロンズ・ニードルスピアよりマシではないか。いやいや、騙だまされてはいけない、油断するまじッ。だがしかし、そのへんは我が愛しの王妃やら、我が義兄ということになるジャン・ジャック・ド・ジョーカーやらが考慮し、必ずや善処してくれるだろう。ファニー・フランクはファニー・フランクらしく、道化を演じきればよいのだ。

「では、さささッ！　どうか席へ……ッ！」

　ファニー・フランクはファッルーカたちを先導しながら、羅叉や琺瑠、チェス・ピード、トワニング、カタリ、クルチバの表情をうかがった。大丈夫。大丈夫だ。私は皆を、未来を築く皆の力を信じている。

　我々新生太陽王国とＪＣＫ、新生ラフレシア、アウトルマは、今日、和平協定を締結する。恒久的ではなく、あくまで時限的なものだ。我々は国境と緩衝地帯を確定し、互いに不可侵とする。緩衝地帯はおそらく係争の原因になるだろう。しかし現時点で国境を接し

あうことは互いに受け容れられなかった。また、アウトルマに服しない悪魔や異界フリー生物クスの勢力も多数ある。彼らとの間では今後も紛争が絶えないだろう。この和平協定がただちに平和をもたらすものであるとは決して言いえないのだ。

　だが、進まなくては何も変わらない。これは変えるため、変えてゆくための第一歩だ。

　たとえこの先、一歩下がることがあろうと、十歩後退する羽目になろうと、我々はあきらめない。

　今日、我々は一歩進む。だから、明日もきっと進めるはずなのだ。

68　夜

「──んあーっ。終わった終わった、終わりよったぁ。終わったでえ。終わってまいよったわ。終わったァーッ。終わったんやなあ。ふぅー。終わったわぁ……ほんまに……」

　カタリは寝台に倒れこんだ。仰向けになって、蝶ネクタイを外す。上着を脱いでそのへんに放り投げようとしたら、アーニャが受けとってくれた。

「お疲れさま。晩ばん餐さん会、大変だったでしょう？」

「……せやなあ。ジョーカーとクローディアはええねんけど、アロォーンズ・ヌィードルスピアァーはんはわッけわからんし、悪魔たちに至っては種族の壁がなあ。食いモン、飲みモンも一応あれこれ情報集めて用意したったんやけど、アレでよかったんかどうなんか。喜んどるんか腹ァ立てとるんかもようわからんし……」

「そうね。たしかに」

「ファッルーカみたいに、わしらの言葉ァしゃべれるヤツばかりやないからなあ。公ヴエリ爵オンやら侯爵ラデオンやらはいけるみたいやけど、そのへんはファッルーカに従いよらんモンが多いみたいやし。厄介な話やで。そのへんもな。先のこと考えるとなあ、頭ァ

痛いわ……」

「もっと仕事の話を聞いてほしい？」

「いらん。もうえぇ」

「じゃあ？」

「ぎゅうさせたってくれ」

「うん」

　カタリは下からアーニャをきつく抱きしめた。

　アーニャがカタリの額に口づけをする。カタリはアーニャの胸に顔を押しつける。アーニャと体勢を入れ替えた。

「……似合わんかな。わしには」

「そんなこと、ない」アーニャは身体全体をカタリに擦すりよせる。重ねあわせ、混ぜあわせようとでもするかのように。「もっとして」

「そうやなくてやな……」

「わかってる。あなたはあなたにしかできない仕事をしてる。ちゃんと成果も出してる。あなたは勇敢で、誰とでも恐れずに交渉できる。あなたは情に厚い。あなたがぶつかっていけば、誰だってあなたを信頼する。あなたは大事なもののためならすべてをなげうてる。何が大事か、あなたはよくわかってる。あなたは大きな人。とてもとても大きな人。ちょっとやかましいから、あなたを誤解する人もいる。だけど長くつきあえば、あなたがすごい男だって全員が悟る。あなたは大切にされる。あなたも相手を大切にする。あなたは細かいことにこだわらない。間違いを認めて、正しいことができる」

「それだけか？」

「いいえ。カタリさん。わたしはあなたが大好きよ。愛してる。あなただけを」

「わしも好っきやで。愛しとる。もう何があっても、絶対に放さへ

ん」

「わかってる」アーニャはカタリをあたためてくれる。隅から隅まで。どこまでも。そして、「我慢して、カタリさん」と耳みみ許もとで、熱い吐息を吹きかけながら言う。「友だちと好きなように、気ままに過ごしたいんでしょう？　今はまだ、我慢して。みんながあなたを必要としてる。今は仕事をして。みんなのために」

「我慢できへん」

「だめよ。我慢しないと」

「そうやない」

　カタリはアーニャをあたためる。ふと、紛まがい物、という言葉が浮かんで、胸の奥が冷たくなった。その言葉がときおりカタリを底のない淵ふちに引きずりこもうとする。すべては無価値で、無意味だと考えてしまいそうになる。きっとカタリだけではないだろう。あのとき、あの場にいた者たちは全員、同じ呪のろいをかけられた。しかし、身を賭としてこの世界を守ろうとした者がいる。ためらうことなく、もっとも残酷な運命を物ともせずに。偽物か、本物か。それがどないしたっちゅうんじゃ。そんなんどうでもええ。このぬくもりが次の瞬間、消え失せるとしても、今はある。ここにある。たしかにある。命を懸かけて守るに値するものが。柄がらやないけどな。わしはやるで。やったるわ。見とってくれ。なあ。

69　おやすみなさい

「社長、お疲れさまです！」「オウッ」「社長！　お疲れっしたァッ！」「オウ」「お疲れさまです、社長！」「アァ」「社長！」「オウ」「お疲れさまです！」「オー」「社長！」「社長、お疲れさまです！」「社長！」「お疲れさまっした、社長！」
「ァァァアアわァーったっつーの。あとオレは疲れてねェッ！」
「ひいぃっ、ごごごごごごめんなさい……っ！」

　縮みあがる社員に一いち瞥べつをくれて、飛フエイ燕ヤンは街路を早足で歩く。今夜のケメック龍州人街はことのほか賑にぎわっている。ＪＣＫや正統ラフレシア、果てはアウトルマからも人が一人

間だけじゃない、異界フリー生物クスたちも、このケメックに集まってきているのだ。目的は様々だろう。商談。人脈作り。物見遊ゆ山さん。何にしても、ついでに飯を食い、酒を飲む。歌って踊って騒ぐ。めずらしいものが店先に並んでいたら立ち寄って手にとりたくなるのは、人間も悪魔も大差ないようだ。

　この龍州人街には食堂、酒家、珍品を扱う商店がひしめいている。ゆくゆくは、ここにくれば何でも手に入る、そんな場所に育てるのが飛燕の目標だ。

　そのために、飛燕は会社をでっちあげた。龍州連合会社。飛燕は社長だ。使えそうなやつなら龍州人でも何人でもかまわないからとりたてて仕事を任せる。今はまだだが、そのうち人間以外も使ってみたい。飛燕は本気でそう考えている。

　いつものように、飛燕は護衛をつけないで足早に夜道を歩く。危険だ危ないと社員たちはうるさいが、このオレに言う台詞せりふかよ。だしぬけに路地から飛びだしてきた暴漢を、飛燕は「ウラァッ！」と蹴倒す。暴漢はぜんぶで十七人。「──アホかァッ！　このオレを殺やりてェーんならなァ！　とりあえず五万人くれェーはそろえてこいッ！　オラァ……ッ！」

　あっという間に片づけて、飛燕はのびている暴漢どもに向かって一万ダラー硬貨を放ほうってやった。「テメェーら弱すぎ。もちっとマシな飯食え。オレの下で働くなら、雇ってやっからよォ。バシッと鍛えろ。わかったかよ？」

　数人が弱々しい声で罵り言葉を発した。飛燕はニヤリと笑う。「よォし、その意気だ」

　いろいろ工夫して足どりをくらましながら向かう先はマイホーム。庭付きで塀に囲まれた一軒家だ。ここばかりは警備を厳重にしてあるが、ぱっと見ではそれとわからない。フードを目深に被って門をくぐると、きゅーが出迎えてくれた。「くう！」

「オッス。遅くなっちまったなァ。みんな寝てっか？」

「きゅう」

「そっか。だよなァ」

　きゅーのもふ毛をぽむぽむしながら家に入ったら、「ンギャー」という泣き声が聞こえてきた。居間の灯りがついている。入ると、髭のオッサンが「よしよしよし」と幼子をあやしていた。

「オー。オッサン。ご苦労サンだなァ。ソイツ、ファンか？」

「ウム……」髭のオッサンは一歳になったばかりのファンを持ちあげたり下ろしたりしているが、一向に泣き止まない。

「どォーら。オレに貸してみ」飛燕は髭のオッサンからファンを奪い、背中をとんとん軽く叩きながら身体からだを揺する。ファンは間もなく寝息を立てはじめた。

「……ムム。うまいものだな」

「オッサンがヘッタクソなんだろァ？　オッサンは何でも力任せだからよくねェーんだよ。こォーゆゥーのはさァ、ソフトにやんねェーと。ソフトに。わかる？」

「ぐうの音も出ぬ……」

「つかアレだろ。オッサン今日は忙しかったんじゃねェーの。なんッかあったんだろ。式的なのが。疲れてんじゃねェーのか。寝ろよ。いィーかげん、いい年なんだからよォ」

「拙せつ僧そうはまだ若い！　少なくとも、お前などに心配されるほど老けこんではおらぬッ！」

「顔に疲れがニジミ出てんだよ。無理すんじゃねェーっつの。オッサンには長生きしてもらわねェーと困ンだからよォ」

「心得顔で息子のようなことをぬかすなッ！」

「ウハハッ。息子はねェーわなァ。せいぜい孫？」

「あれ？」と、ハニーメリーが息子のジュニアを連れて居間に入ってきた。下着の上に裾すその長いワイシャツを着ただけで、しかも前をはだけているというあられもない恰かつ好こうだが、この女はいつもこうだ。飛燕はもちろん、口やかましい髭のオッサンさえ何も言わない。

「オウ」と飛燕が声をかけると、ジュニアはハニーメリーの服の裾

をつかんだまま、灰茶色の瞳でじっとこっちを見つめた。その動じない目は明らかに父親似だ。ジュニアはまだ幼いのに物静かで、ごくたまにしか笑わない。

「帰ってたんだ」と言いながら、ハニーメリーは居間とひとつづきになっている台所のほうへと向かった。冷蔵庫から瓶びんを出す。麦酒ビアだ。ハニーメリーは瓶の栓せんを指で開け、直接口をつけた。ジュニアが母親を見ている。「飲む？」と母親に訊きかれて、ジュニアは首を横に振った。「そりゃそうか。飲むっていってもあげないけど。きみにはまだ早いもの」

「休憩かよ？」飛燕が尋ねると、ハニーメリーは肩をすくめて「そう」とうなずいた。

「テメェー今は何作ってやがんだ？」

「内燃機関」

「ナイネンキカン？」

「燃料を燃焼させて生んだ熱エネルギーを機械的な仕事に変換して動力をえる仕掛け」

「……そやってゆわれても、よっくわッかんねェーんだケド」

「できたら見せてあげる」

「オォー。そいつァー楽しみだぜ。ンでもよォ。ガキはちゃんと夜、寝かせたほォーがいンじゃねェーの？」

「ウム。拙僧もそう思うが」

「だって寝ないんだもの。それに、無理やり寝かしつけて離れてるより、わたしのそばにいたほうがよくない？」

　ジュニアはハニーメリーにしがみついている。

　飛燕はファンの寝顔に目をやった。「まァ、そォーかもな。人それぞれだし、テメェーとガキがソレでいいっつゥーならオレがガタガタ言う筋合いじゃねェーよ」

「……拙僧はそろそろ眠ることにしよう」

「アァ。そォーしろ、オッサン」

「わたしは工房アトリエに戻るね」

「無理すンじゃねェーぞ。ジュニア、眠くなったら、ちゃァーんと寝ろよ。オッカサンの隣で寝りゃァーいいんだからな。誰も引き離したりしねェーし、テメェーらはオレが守ってやる」

　髭のオッサンは自分の部屋へ、ハニーメリーとジュニアは工房へ引きとった。きゅーも自室に行くようだし、飛燕もファンを抱かかえて寝室へと向かった。寝室は広い。ほとんど床一面に敷しき布ぶ団とんが敷いてあって、子供たちがごろごろ寝ている。どいつもこいつも捨て子やら孤こ児じやらだ。一人、二人と増えるうちに、ファンを入れて九人になった。



「飛燕」子供たちの母親が顔をこっちに向けた。身体を横にし、まだ一歳になっていないチカに腕枕をしているせいで、身動きがとれないようだ。「お帰りなしゃい。ちゅかれたでしょう」

「ただいま。そォーでもねェーよ」飛燕はファンをあいているところに寝かせて、毛布をかけてやった。どうやら起きている子供は一

人もいないようだ。一人でも目を覚まして泣きはじめると大変な騒動になりかねないので、抜き足差し足で慎重に進まないといけない。ようやくたどりついて寝床に身を横たえ、後ろから抱きしめる。「……疲れてはねェーけどなァ。そンでも疲れが吹っ飛ぶカンジ」

「わたしもよ」

「ガキども、いい子にしてたかァ？」

「ええ。いたじゅらしたり、泣いたり、しゃわいだり」

「ソレのどッこがいい子なんだよ。オレがシメてやンねェーと」

　二人でひそやかに笑った。髪の毛に顔を埋うずめて、耳たぶに、首筋に唇を寄せる。敏感な箇所だとちょっと反応してくれて、かわいらしくてたまらないが、ほどほどにしておく。

「おやすみ、セリハ」彼女の名を呼んだ。彼女が飛燕に明かしてくれた本当の名を。

　彼女のおやすみを聞いて、飛燕は眠りに落ちた。

70　朝日が射しこむ部屋で

　夜が明けてから、サフィニアはいつも彼の部屋に忍びこむ。彼は当然、寝台の上で熟睡している。上うわ掛がけはだいたいはねのけられていて、シャツのボタンは外されている。彼が寝台の端はじのほうにいたら、その反対側に回りこむ。真ん中にいたら、左右どちらかのスペースに狙いを定める。今朝の彼は寝台のど真ん中で大の字になっている。髪が少し長くなってきたから、切らせてもらわないと、と思う。サフィニアはそれから、彼がのばしている右腕の下に素早く身体を滑りこませる。彼に背を向ける形で丸くなって、動悸が収まるのを待つ。待てど暮らせど、心拍数は低下しない。いけ、いっちゃえ、とサフィニアを鼓舞しようとする声が聞こえてくる。でも、どうしても勇気がわいてこない。いまだに彼にさわるのが怖くて、だけどさわりたくてしょうがないのだ。こうしているだけで充分。そんなふうにさえ思ってしまう。実際は待っているの

だ。彼が寝返りを打つ。そうして偶然、彼の身体がサフィニアにふれる。そうなってほしいと願っている。我ながら、馬鹿なのではないかと呆れてしまう。いつまでたっても進歩がない。サフィニアはそれでいいんだとは思うけどね。そんな声が聞こえた気がする。そうなのだろうか。そう思う……？

　そして、そのときがくる。彼が「んん……」と唸って身体を横向きにする。こちらのほうに。腕が降ってきて、サフィニアの耳のあたりにかぶさる。彼の重み、彼の体温を感じる。彼は熱い。とても熱い。寝息が近い。サフィニアも熱い。熱くなる。「あの……」と、つい口走ってしまう。「あの……あの……」小さな、小さな、かぼそい声で。「あの……好き……です」言ってしまった。伝えたことがないわけじゃない。でも、最近は言っていない。言う機会がないから。思っているのに。強く、強く、いつも思っている。この気持ちが特別で、これっぽっちも古びない、まったく色褪せないことに、自分でも驚いてしまう。だけどそろそろ、朝ご飯の支度をしないと。いつまでもこうしていたいけど、そういうわけにもいかない。起きよう。決心して、ぐずぐずする。一緒に寝てもいいかなって、言えばいいのにさ。そんな声が聞こえる。い、言えない、そんなこと。とても言いだせない。起きよう。名残惜しいけれど、彼の腕をよけようとしたら、「……ん」と彼が低い、少しかすれた声を出した。「……サフィニア。いたのか」「は、は、は、は、はいっ……ご、ご、ご、ごめんなさい……っ」「なんで謝る」彼に抱きすくめられる。胸に迫って、呼吸ができなくなって、頭の中が真っ白になる。それなのにそのうち、もっとしてほしいと欲ばりなことを思う。これで充分、満たされている。そうも感じる。どちらも嘘じゃない。カーテンの隙間から光が射しこんでいる。今日は天気がいい。ふと仲間のことを思った。

71　ふたり

「みんな、どうしているかな」呟くと、足あし許もとで横になっていたアルファが首をもたげてロム・フォウの脚に頭をこすりつけた。ロム・フォウはアルファの首筋を撫なでた。「きみはこのごろ甘えん坊だね」以前ならそんなことを言われると腹を立ててそっぽを向いたものだが、最近は余計に身を寄せてきたりする。アルファはもう若くない。それどころか、狼としては稀まれなほど長生きを

している。そろそろだろうとロム・フォウは予感している。たぶん遠からずアルファはロム・フォウのもとを去るだろう。動けなくなる前にひとりになろうとする。この旅の間にそのときはくるだろう。ロム・フォウはアルファを抱きしめる。身体中をさする。アルファは気持ちよさそうにしている。ところが、目やにをとってやろうとしたら、うぉん、と吠えられた。アルファは颯爽と起きあがって、さあ立て、行くぞ、とでも言いたげだ。「わかったよ」ロム・フォウは苦笑して立ちあがり、荷物の朝あさ露つゆを払って背負った。アルファはもう歩きだしている。その後ろ姿を眺ながめていると、予感を否定したくなる。これがアルファとの最後の旅になる。そんなことはないかもしれない。でも、くるべきときにそれはやってくるだろう。帰りたくなったら、彼女は帰るだろう。

72　簡単なこと

白い。外壁は真っ白で、飾り気は皆無だ。見た目はほとんど四角い箱で、塀すらない。

新生太陽王国の版図から外れていて、エルデェイニオンの中央から西部に陣どっているアウトルマのテリトリーでもない大陸北横断道沿いの目立つ土地に、こんなものを建ててしまうなんて。

建物の前に膝を抱えてしゃがみ、壁に彫りこまれた「モリー・リップス・アサイラム」の文字を眺めているうちに、笑いがこみあげてきた。正気の沙さ汰たじゃないけれど、じつに母様らしい。施設の規模は小さく、スタッフも少数精鋭だ。医術士の数自体多くなくて、この無謀とも思える大胆な計画に身を投じる者となるとさらにかぎられていたというのが、少数精鋭の実態なのだが。

まあ、母様とわたしがいれば何とかなるだろう。ベアトリーチェは楽観している。というよりも、することにした。始めてしまったからには、なんとしてもやりとげる。くる者拒まずで医術式を施し、救える者は無条件で皆、救うのだ。その先にどんな道が開けるのか。知らないわよ、そんなこと。それが母様の答えだった。

たしかに、見通しのいい時代ではない。先に目的地を設定して、そこめがけて一直線で突き進むようなやり方は通用しないだろう。

手探りで、それが前だと信じる方向へとにかく足を進めるしかない。母様は医術士で、わたしは救護剣士。なすべきことは救うこと。できることも救うこと。ならば、それをなすだけだ。

「簡単なことじゃないか。そうだろう……？」

　ベアトリーチェは友に問いかけて、ほんの少しだけ笑った。笑わないと、顔がゆがんでしまう。胸が苦しくなる。

「──うん。大丈夫だ」

　そう言い聞かせ、立ちあがって歩きだす。

　足どりは軽い。青草の匂いがする。太陽がまぶしかった。

73　父譲り

　突きかかってくる木刀を打ち払って、そらす。だが、相手の太た刀ち筋すじには意想外な粘りがあった。体勢の崩れは最小限。すぐさま彼の木刀を小刻みに打つ。打つ。彼の剣先を動揺させ、懐ふところに入ってこようとする。おもしろい剣だ。──しかし。

「それでは、試合の技にすぎぬ……！」彼は突っこんできた相手を体当たりで撥はね飛ばし、防具をつけた右肩を打つ。左肩を打つ。相手は座りこんだ。その喉のど元もとに木刀の切っ先を突きつける。「今、貴様は死んだぞ、タシーデ蝶イエ。小細工を弄ろうするのではなく、死中に活を求める覚悟で剣を使え。剣とはそういうものだ」

「……はい！」夕蝶は跳び起きて、木刀を構えた。「もう一度、お願いします、団長！　どうか、お手合わせを……！」

「だめだ。一日に二度、死ぬことは許さぬ。明日、本気で俺に挑んでこい」

「はい……！」夕蝶は目に涙をためて一礼した。「ありがとうございました……！」

　身を翻ひるがえそうとする夕蝶を「待て」と呼び止める。「覚悟は足りぬが、筋は悪くない」

「……わたし、強くなれるでしょうか。守られなくてもいいほど、強く。誰かを守れるくらい、強くなれますか」

「そう願うのなら、叶えるために励め」

「はい！　ありがとうございます……！」

　駆け去ってゆく夕蝶の後ろ姿を見守った。道場を出ようとして、慌てて振り返り、頭を下げる。まだ若いし危なっかしいが、見所のある団員だ。彼女と入れかわりに、防具をつけて短い木刀を持った子供が道場に入ってきた。「おとう、勝負だ！」

「……カレル。またか」彼は眉をひそめて天を仰いだ。「お前では相手にならぬ。それに、何度も言わせるな。俺はお前の父親ではない」

「ぼくのおとうと友だちだったから、おとうみたいなものだ！」

「どういう理屈だ」

「じゃあ、羅ラ叉サ！　ぼくと勝負しろ！」

「呼び捨てか」彼はあきらめて木刀を構えた。「では、かかってこい。負けても泣くな」

「泣くもんか！　やあ……！」カレルの踏みこみは鋭い。むろん、年齢のわりには、だが。剣にも力がある。ときに感心させられるほど。

「気を抜くな、カレル！　そら、受けろ！」「受ける……！」「よし！　これならば、どうだ！」「こうだ……！」

　こちらが打ちかかれば、器用に守ってみせる。カレルは柔軟だ。

「──あっ。羅叉、笑ったな！」

「笑っておらぬ」

「笑った！　馬鹿にして！」

　カレルが攻めたててくる。いい。いい剣だ。

　そうだな。俺は笑った。お前の息子は強くなるぞ、ヨハン。

74　巫シビ女リリ神スの野望

「つまらんのう……つまらん。つまらんぞ。つまらん。つまらん……！」

　姫は玉座で脚をばたばたさせる。玉座は高い、高い場所にある。姫が無む命みよう衛え士じや自じ動どう骸むくろたちに新しく築かせた広大無辺の霊れい王おう宮きゆうは、内部の壁をあえて最小限に抑えた。中央の高みに設えられた玉座からは、霊王宮のほぼすべてが見渡せるようになっている。

　麼マ禱トウ埜ーヤ霊国の霊王宮に生者は姫のみだ。霊王宮の管理維持のために働いている者はすべて死んでいる。生きている者は無能でやかましくていらつくのだ。「……そうはいってものう。死し人びとばかりというのもな。わらわは今、気づいたのだが、殺すものがおらんというのもけっこう退屈なものだ。生きている者がおれば、殺して操るという楽しみがある。死人しかおらんということになれば、静かでたいへんよいのだけど、なんというかのう……発展性がない！　死人は死んでおるからのう。死人の唯一の欠点だのう……」姫は腕組みをして考えこむ。すぐさま閃いた。「──よーし、わらわは決めたぞ！　周辺に攻めこんで、領土を拡張するのだ！　さすれば殺し放題、死人を増やし放題ではないかっ！　世界中を甘い死で満たして、わらわへのすてきな贈り物としよう！　きゅふふふ……っ！」

75　果ての果て

（見よ、エヴァンジェリン）

　超賢者は娘の手をとった。眼下は灰色の濃淡に占しめられ、空は

漆黒。深淵の闇に巨大な青い星が浮かんでいる。

（──はい、お師様。美しい。何度見ても美しい）（あれが我らの住まう星だとは）（わたしたちはあの星に囚とらわれていたのですね。わたしたちだけが解き放たれた）（そうだ。エヴァンジェリン、我が娘よ。我らの真の望みを、魔女めは最後まで理解しなかった）（この世の果ての果てまで行く。所詮、魔女は小さき者だったのです）（そうさな……）

　超賢者は瞑目する。目をつぶっても、彼には見える。五感など彼にとってはすでに概念でしかない。あるいは、感情すらも。それでも、人は人であることを捨てきれないのか。

（お師様）娘が超賢者に寄り添う。（わたしがおります。お師様のおそばには、常にこのわたしが。たとえわたしたちが何ものであろうとも）（ああ──）

（相変わらず、気持ち悪い）と、白き輝きが彼らの前を行きすぎる。（月まできて乳繰りあっているだなんて、あなたがた、本当に進歩がないのだわ）

（なんと……）（魔女……！）

（さようなら、モーグ。エヴァンジェリン。わたくしは先へ進ませてもらうのよ）

（ま、待て！）（待ちなさい……！）

　青白い輝きが白い輝きを追いかける。

　行き先は、この世の果て。

　果ての、果て。

76　大海原

　お気に入りの場所で身体からだ一杯に潮風を受け、目をつぶる。夕闇が迫る大西洋を暗黒大陸へと向かって航行する船の帆柱マス

ト、そのてっぺんだ。当然、帆柱マストの先端は足場にはならない。彼女はそこに足をついているが、立っているわけではないのだ。船の速度にあわせて飛んでいる。せっかくいい気分だったのに、邪魔された。「──お肌お肌お肌が荒れ荒れアレ荒れちゃうよ♥　ベティベティベティ子潮風ってよくよくよくないから♥」

　目を開けて見れば、すぐ隣に真っ黒いトモヨがいる。

　ベティは舌打ちをして、髪を指で梳すく。少し、というかけっこうごわついている。

「……うるさいわね。そんなふうになったあんたには関係ないでしょ」「トモトモトモトモヨさんには関係関係ない♥　ベティベティベティ子はそれでいいのいいのかなあ♥」「おかまいなく。余計なお世話だから、さっさと消えて」「ねえねえねねねねえ♥　あんたあんあんあんたってまだまだ処処処処処女なの？」「うるっさい！　消し去るわよ!?」「ＫＹＡＨＡＨＡＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ♥　ホンホンホントは知ってる♥」「──この、出で歯ば亀がめ……」「ＮＹＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ♥　マタネ♥」「もうくるな！」「ヤーダ♥」

　トモヨがふわふわと風に流されるように飛んでゆく。ベティはため息をついた。「何のつもりなんだか……暇なんだろうけど。そっちの道に進んだんだから、あれやこれやと干渉しなきゃいいのに。いい迷惑だわ。まったく……」

　興が削そがれたので、ベティは帆柱マストを蹴った。甲かん板ぱんめがけてゆっくりと降りてゆく。

　甲板では早くも酒盛りが始まっていた。そうでなくても騒がしい。眠るときや荒こう天てんのとき以外、船室でおとなしくしているということがまずない、どうしようもない連中だ。

　船ふな縁べりから釣り糸を垂らしているカイが軽く手を振った。「ベティ」「どう、カイ？　釣れてる？」「いや。今日はさっぱりだ」と答えながらも、カイはさして残念そうでもない。ちょっと意外だが、このごろずいぶん釣りに凝こっているようだ。

　オトミが年甲斐もなく、色サン眼グラ鏡スに水着姿で寝椅子に身を横たえている。居眠りをしているのか。寒くないのかしら。ベ

ティがそう思った矢先に、ジョゼとユーリィが毛布を持ってきてオトミにかけた。リリアが微笑んで遠くから娘たちを見守っている。

　仮面をつけた半裸の大馬鹿者は性しよう懲こりもなく筋トレ中だ。

　カツヲが舵かじにもたれて立ったまま寝ている。彼と再会したのはベティたちが大海原に乗りだす直前だったが、気がついたら操そう舵だ手しゆに収まっていた。あれで腕はいいのだ。

　あの男は二角帽を被って舳へ先さきに背中を預けて脚を組み、空っぽに近い酒瓶の底を見つめていた。

　舳先の近くでは、金髪ドレッドで黒い肌の男と顔に×の傷がある男、それから固太り男ともじゃもじゃ男、幽霊みたいな女が輪になって座り、博奕ばくちでもやっているのか。

「よーっす、ベティ」ともじゃもじゃのデ・ペドロが手をあげた。固太りのギャンガーは手札に集中しているようだ。金髪ドレッドのシャマニはヘッヘッヘッと陽気に、×傷のメツェルディはうっうっうっと陰気に笑った。幽霊女は包丁を甲板に、グサッ、グサッ、と刺している。

「ちょっと、コリ──」ベティは言いなおす。「じゃなかった、ステファニー。何してるのよ、あんた。船が傷むじゃない」

「……ごめんなさい。つい癖でごめんなさい本当にごめんなさい許して今すぐ海に飛びこんで溺死するからどうか許してくださいお願い」「──お、おい、ステファニー！　落ちつけって、な！」すかさずギャンガーがステファニーを押さえこもうとしたが、逆に組み伏せられた。ステファニーはギャンガーを殴る。殴る。殴る。「落ちついてるちゃんと落ちついてるもの落ちついてる！　こんなにも落ちついてるのになんでそんなこと言うの！　落ちついてる……！」「うげっ、がっ、おごぁっ、待っ、ぎゃあっ、しっ、死っ──」「よ、よせって！」デ・ペドロがステファニーを羽は交がい締じめにした。「な、わかったから、ステファニー、な？　そんなに殴ったら、な？　ステファニーの手が痛いんじゃねーの？　大丈夫か？　ん？」「……大丈夫じゃ、ない」ステファニーは手首を振った。ぶらんぶらんしている。泣きだした。「痛ぁーい。痛いよぉ。ひぐっ。痛ぁーい。痛ぁーいよぉー。うぇーん。痛ぁーい」「ヴィクトリアーっち！　治療よろぴこーっ！」シャマニに呼ばれて、遠

くにいたヴィクトリアが「は、は、はい……っ」と大慌てで駆けてくる。

　ベティは肩をすくめた。「ギャンガー。デ・ペドロ。コ━じゃなくてステファニー。変わらないわねえ、あんたたち」

「……オマエも変わらずニセチチだべよ」血まみれの顔を両手で覆ったままギャンガーがそんなことをぬかしたものだから、ベティは容赦なく股間を踵かかとで蹴った。

「━う、うごおっ！　し、しぬう……」

「くくく……」と、舳先の男が青と黒の目をすがめて笑っている。

「何よ」ベティは男を睨みつけた。

「何よも糞もへったくれもあるかよ。塵ゴミ屑クズめ」男は酒瓶を呷あおった。空になった酒瓶を海にひょいと放る。

「あんたね……」ベティはあえて男の腿ももに腰を下ろして、腕組みをする。「海は屑くず籠かごじゃないんだから。何でもすぐぽいぽい捨てるのはやめなさいよ」

「俺に指図するんじゃねぇ。女房でもあるまいし」

「あら。あんた、相手が女房だったら言うことを聞くわけ？」

「どうだかな。女房なんざいたことがねぇ」

「もらったらいいじゃない。一応、海賊船の船長なんだし。女房の三人や四人、いたっておかしくないんじゃないの」

「女は犯やれりゃあ充分だ」

「そのうち介護してもらわなきゃならなくなるわよ」

「黙れ、ナイチチ」

「いいえ。黙らないわ。知ってるでしょ？」

「ああ。てめぇは黙らねぇ。糞うぜぇ女アマだぜ」

「悪かったわね」

「悪いに決まってんだろうが」

「似合わないわよ」ベティは手をのばして、男が被っている二角帽を奪った。「こんな帽子。ダリエロ、あんたには」

　そして、海に向かって投げてしまった帽子の行方ゆくえを、男は目で追うことはしない。

　色の違う、表情も異なる左右の瞳で、男はベティを見つめている。

　根負けして、ベティは先に顔をそむけた。

「そうだな」と男が呟くように言う。「俺にはあんなものなんざ必要ねぇ。てめぇの言うとおりだ、ベティ」

「わかればいいのよ」

「かわいくねぇ女だ」

「あんたにかわいいなんて思われたくないもの」

「ふん……」男は鼻を鳴らし、自分の腕を枕にして暮れなずむ空を見上げる。「あの糞馬鹿野郎は、今ごろどこで何やってやがるんだかな」

「さあ」ベティは首をかしげた。「知ったことじゃないけど、いつか帰ってくるでしょ」

77　すべてに

　手がかりがなかったわけじゃない。あった。あちこちに。情報を求めていたのは彼だけじゃない。点在する断片をかき集め、繋つなぎあわせて、一つの絵図にする。でも、そう簡単にはいかない。断片には真と偽ぎがあって、どうやっても組みあわせることができない、もしくは、組みあわせることで真の断片が押しのけられてしまう偽物もあった。何を信じるかだ。それか、とりあえず片かたっ端ぱしから信じて確認する。方針を一貫するのは難しかった。あっち

へ傾いたり、こっちへ傾いたり。ただ、断念したことだけはなかった。一度たりとも。彼は文字どおり飛びまわった。歩いた。駆けた。休もう。一休みしたい。そんなことは片時も考えなかった。彼はどこにでも行った。無駄足。落胆。失望。そんな言葉ごと忘れてしまえばいい。彼は夜明けや日暮れを数えるのをやめた。時間。そんなものに何の意味があるというのか。手がかりはあった。どれだけ些細でも、不確かでも、それが手がかりだと思えるものならまぎれもなく手がかりなのだ。嘘か本当かわからない。だったら、調べればいい。この目で見て、判断すればいい。世界は広く、ときに狭く感じた。目的を見失うことだけはなかった。彼はさがしつづけた。

それは遺跡だ。

あるいは、かつては遺跡だったと言ったほうが正確かもしれない。

周囲は見渡すかぎり赤い岩と砂ばかりの大地だが、その一帯はくぼんでいて木々が生おい茂しげっている。樹木と、風が運んできた赤砂に埋うもれ、半ば崩れて、くわしく見ないとそれが建物だとはわからない。

遺跡はここで長い間、眠りについていたのだ。もしくは、埋葬されていた。掘り起こされたのは最近らしい。悪魔をはじめとする異界フリー生物クスの侵攻に遭い、故郷を追われた者たちがこの窪くぼ地ちに流れついた。窪地には小さな泉があった。涸かれかけた古井戸も手を加えると使えるようになった。やがて集落ができた。窪地の中央にある朽ちかけた建物は最初、雨あめ露つゆをしのぐ場所として利用され、そのうち集会場、祭場として用いられるようになった。

人々は知らなかったのだ。その建物の地下に、上エンシ古エントのポー門タルと呼ばれる装置があることを。上エンシ古エントのポー門タルは世界中に点在していて、今でも相互に行き来可能だということなど知るよしもなかった。

彼も知らなかった。突き止めたのだ。上エンシ古エントのポー門タルは現代人が自由自在に操作できるような代物ではないが、偶然、それか限定的に起動した例はある。上エンシ古エントのポー門タルを通って、遥か彼方かなたにある秘境に飛ばされた者も中にはいるらしい。

彼は窪地の集落を歩きまわった。彼に声をかけてくる者はいなかった。住民たちは皆、警戒しているようだ。ためしに彼が挨拶をすると、住民は決まって逃げていった。彼には彼らの言葉がわからず、彼らもおそらく彼の言葉を解しないだろう。事情を説明して協力を求めたかったが、それは叶かないそうにない。だから彼は、行き合う者一人一人をつぶさに観察した。無礼と知りつつ、粗そ末まつな掘っ立て小屋の中を一軒一軒のぞいた。成果がなかったので、彼は窪地の中心部へと向かうことにした。

傾かしいだ石柱と石柱の間を通り抜けて、奥へ、奥へと進む。さながら密林のようだが、歩きづらくはない。地面が踏みかためられているのだ。そのうち石畳らしきものを見つけた。道だ。道がある。彼は道の上を歩いてゆくことにした。

何かに導かれている。同じような感覚を、これまで何度も味わったことを思いだした。

期待するな。裏切られる。また、裏切られてしまう。

それがどうした。裏切られたとしても、平気だ。どうってことはない。

彼は知っているからだ。たとえ打ちのめされて起きあがれなくなったとしても、彼は必ず立ちあがるだろう。

証明しなければならない。

いや、そうではなくて、彼は証明したいのだ。自分の言葉を。



　そのため、というわけじゃない。誰のためでもないのだ。誰かのためじゃない。ただ、そうしたい。彼自身がそう欲しているから、歩みを止めない。

　欲すること。望むこと。願うこと。それだけが結局は彼にとっての真実だった。欲しつづけること。望みつづけること。願いつづけ

ること。たった一つのことを。

　信じること。

　この世のすべてに意味はない。意味は見いだすものだ。ない、ない、どこにもないと嘆なげいている暇があったら、その手でつかみとればいい。この身が紛まがい物でも、人形でも、次の瞬間、すべてが跡あと形かたもなく潰えるのだとしても、信じる。欲する。望む。願う。求める。最後の最後まで、あと一歩。あと一歩。他に何ができるだろう？　違う。そうじゃない。信じることも、欲することも、望むことも、願うことも、求めることもできるのだ。こんなにもたくさんのことができる。永遠などなくていい。たった一秒あれば、生きていられる。前を向ける。この一瞬、信じろ。欲しろ。望め。願え。求めろ。

　彼は進む。

　枝をかきわけ、倒れた石柱や壁材を乗り越えて進む。奥へ。

　奥へ。

　建物があった。苔こけむした柱が、壁が、天井の一部まで残っている。

　彼は中に入った。

　大きくはない建物だった。天井だったのだろう石材が床に散らばっている。光が降りそそいでいて、明るかった。正面に廊下がある。

「見つけたヨ」

　廊下の手前に、いた。

　どこにもいないなんて、考えもしなかった。

　やっぱりだった。

「薔薇のマリアマリアローズ」

『薔薇のマリア』完

あとがき

"A BRAVE HEART OF RED ROSE"というロゴの下に英文が記してあります。

　これは『薔ば薇らのマリア』が始まったときスニーカー文庫の編集長だった野の﨑ざきさんの奥様が、原げん稿こうを一読して物語の基本的なコンセプトを知った上で、ロゴになっている英題やサブタイトルの英訳と一いつ緒しよに考えてくれた文です。

　右も左もわからなかった僕が曲がりなりにもここまで歩いてこられたのは、多くの方々の支えがあったからでした。

　担当編集者の柏かしわ井いさん、長は谷せ川がわさん、成なる戸とさん、上うえ野のさん、ありがとうございました。初代担当の柏井さんは『薔薇のマリア』の土台を築いてくれました。長谷川さんはシリーズの分ぶん岐き点に立ちあってくれ、成戸さんには難しい局面につきあわせてしまい、上野さんには終わりまでいろいろと無理を聞いてもらいました。全員、戦友のようなものでした。

　スニーカー文庫編集部の皆みなさん、とくに、ライトノベルについて無知だった僕を丁てい寧ねいに指導してくれた当時の編集長の野﨑さん、副編集長の女おな井いさんにはお世話になりました。また、現編集長の森もり丘おかさんには最後までお力ちから添ぞえいただき、ありがとうございました。

　design CRESTのデザイナーさんをふくめて、編集部以外の制作や販はん売ばいに関かかわった方々とは直接お目にかかる機会がありませんでしたが、大変感謝しております。

　イラストレーターのＢＵＮＢＵＮさんは、『薔薇のマリア』を半分創つくってくれました。最初にＢＵＮＢＵＮさんが描えがいてくれたマリアローズたちのラフ、今でもたまに眺ながめます。あのラフを見たときからずっと、マリアローズたちは僕の頭の中でＢＵＮＢＵＮさんが描いた絵の姿で生きています。僕がどんなにめちゃくちゃなことを書いても、ＢＵＮＢＵＮさんは絵にしてくれました。ＢＵＮＢＵＮさんが絵にしてくれることを、僕は疑いもしませんで

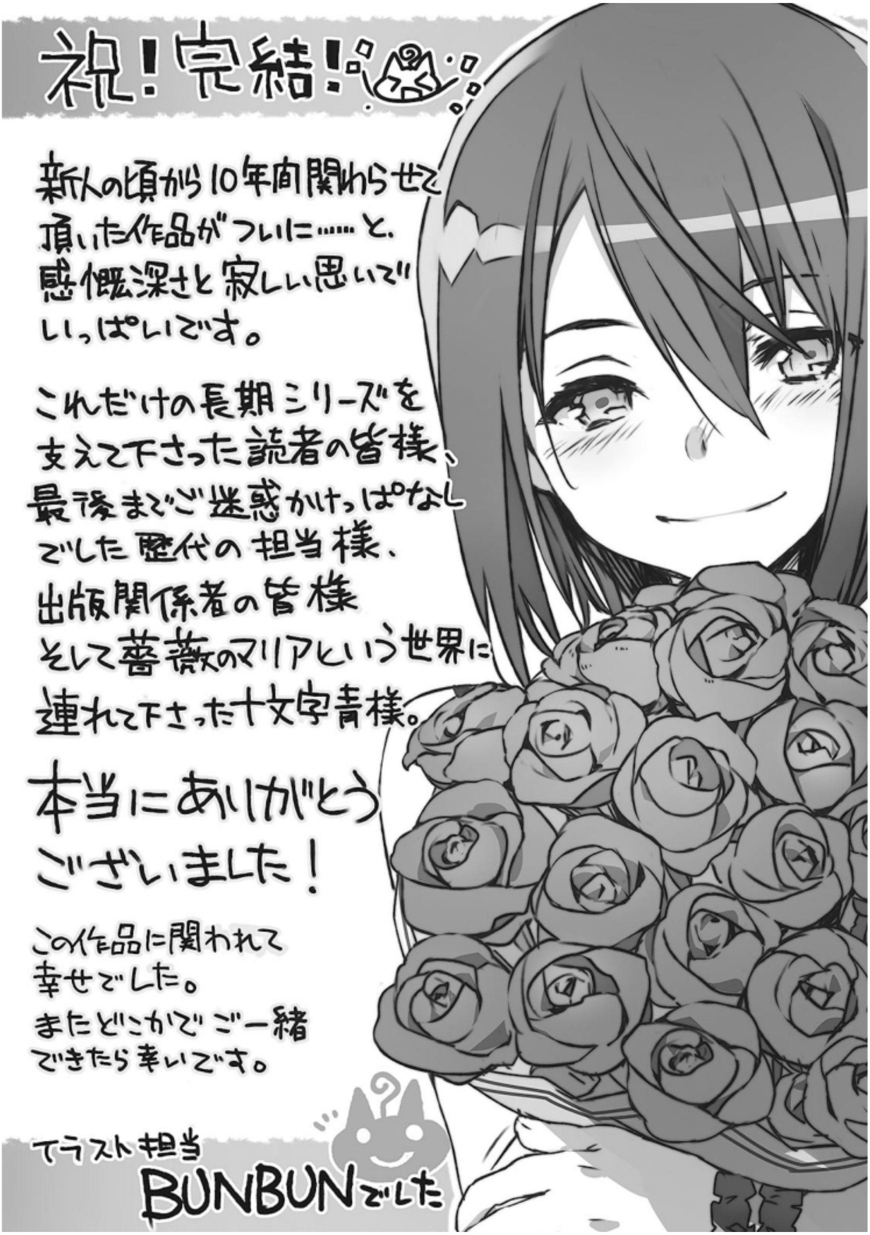
した。それはとてもとても、特別なことでした。本当にありがとうございました。

　そして、最後まで『薔薇のマリア』を読んでくださった皆みな様さまに、胸むねーいつ杯ぱいの愛と、ありったけの感謝と、それからこの『薔薇のマリア』を捧ささげます。

　僕が書いた小説はもちろん僕のものなのですが、『薔薇のマリア』だけはそう言いきることができません。読んでくれている人たちが、皆様がいなければ、僕はきっと挫ざ折せつしていたでしょう。僕は何より僕のために小説を書いていますが、『薔薇のマリア』はもしかするとそれ以上に皆様のために書いてきました。なんとか書き終えることができました。

　もう『薔薇のマリア』は僕の手から離はなれました。今日から皆様のものです。

十文字　青


祝！完結！
新人の頃から10年間関わらせて
頂いた作品がついに……と、
感慨深さと寂しい思いで
いっぱいです。
これだけの長期シリーズを
支えて下さった読者の皆様、
最後までご迷惑かけっぱなし
でした歴代の担当様、
出版関係者の皆様
そして薔薇のマリアという世界に
連れて下さった十文字青様。
本当にありがとう
ございました！
この作品に関われて
幸せでした。
またどこかでご一緒
できたら幸いです。
イラスト担当
BUNBUNでした

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

21.I love you.[rouge]

十じゅう文もん字じ　青あお

平成26年5月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　21.I love you.[rouge]』

平成26年5月1日初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/